
複合生命体

AALIYAH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

複合生命体

【Nコード】

N7529S

【作者名】

AALIIYAH

【あらすじ】

とある荒野にて男は目を覚ました。彼は“普通”の高校生で親友と下校中だった。がしかし目を開けば荒野のど真ん中。意味不明、解答してくれる奴はいない、とりあえず荒野を超えることにした。

——そして否定されてきた渡鴉は異世界で好きに生きることにした。

1話 異界訪問（前書き）

初見となります、こちらAALIIYAH。

最近小説を書き始めたド素人です。

誤字脱字が目立ち読みにくく、つまらなく感じると思います。

暇つぶし程度としてお読み下さい。

暇つぶしにもならなければ、すいません。

1話 異界訪問

緑が一切無い荒野のど真ん中に一人の男が大の字で寝ていた。

「……む」

男は目を覚まし、ムクリと起き上がり、周りを見回す。

その“赤い”瞳には、驚愕で彩られていた。

「…ここは…一体？」

彼は“普通”の高校生で、記憶通りならばさっきまで親友と帰宅している最中だった。

全く見覚えの無い荒野に一人、意味不明な出来事に少し困惑していた。

3

困惑から回復したあと、ズボンのポケットからケータイを取り出し、開く。

助けを呼ぶためだ。

「…圏外……チツ、役に立たんな」

しかし、電波はたっておらず、苛立ち気にケータイを仕舞う。

日本人らしい真っ黒の髪の毛を掻きむしりながら、打開策を考える。

（……とりあえず人を探すか）

近くに落ちていた自分のカバンを取り、勘を頼りに歩き始める。
何故こうなったかを、記憶を探りながら。



だいたい二時間ぐらいだろうか、歩き続けたが、一向に人に会えずにいた。

記憶の方は、学校帰りに親友と帰っていると、突然視界が閃光に包まれた。

最後の目にしたのは、親友の目の前に浮かぶ幾何学模様というあり得ない光景だけだった。

ライトもないのに視界が光で包まれるだけでもかなり異常なのだが、所謂魔方阵のような模様までもが浮かんでいた、神秘的な金色で輝きながら。

それに親友もあの光に巻き込まれたはずだが、見当たらない。

（まあ、奴なら上手くやっていけるだろう）

なんせ奴は、神に愛されているからな。

容姿然り、頭脳然り、身体能力然り、カリスマ性然り、e t c。
性格に難ありだが。

まあ、そんなことより心配すべきことは――

「――食料だな」

現実的問題に直面していた。

育ち盛りな年頃なためか、先ほどから激しく腹が自己主張していた。

辺りを見回すが、枯れた木か雑草しか生えていない。

結構マズイ状況だ。

ケータイの電波はたつ兆しがまったく無く、カバンの中を漁っても、有るのは教科書などの勉強道具、読書用のSF小説三冊などで、食料になる物は無い。

(……ファツキン)

一食程度ならば問題ないと、泣きじゃくる腹を殴り付けて黙らせる。溜め息を吐き、近くの倒木に腰掛けて休憩をする。

空を見上げれば、日は既に沈み、夜の幕開けだ。

日が沈んだため気温が下がり、少し寒い。

幸い未成年ながら、たまに喫煙するためライターを持っていた。そのライターを使い、落ちていた木々を燃やし暖をとる。

パチパチと火の粉を散らす木々を眺める。

「おい、坊主、金目の物だな。素直に出せば命は保証するぜ?」

いかにも山賊な三人組が目の前に現れた。

武装は銃万歳の時代を反対するかのように、刃渡り50センチのボロボロなナイフ。

多少疲労が溜まり警戒が薄れたのか、まったく気付けなかった。

今の時代に山賊とはな、本当にここはどこだ？

「聞いてんのかよ？坊主」

「もしかしてブルツてんじゃねえ！？」

囃し立てるようにして山賊の一人が言った。

「ぎやはは！そいつはオモシレエ！」

「恐いでちゅ、ってか？ひゃひゃひ！」

「だはははは！！！」

油断しているな、ならば好機。

まともに戦うのは面倒、奇襲を選択。

目の前、山賊の股間を蹴りあげる。

確実にヒット、玉が潰れたかもしれない。

それほどの力を込めて蹴った。

「■■■■■■！！！」

なにを言っているか聞き取れない音量で絶叫し、両手で股を押さえ崩れ落ちる。

「…て、テメエ！」

「…ブツ殺す！」

他二人は一瞬、大口開けたまま止まっていたが再起動し、仕舞っていたナイフを引き抜いた。

一人は突きで、もう一人は大振りでナイフを振るう。

突きは軽く避け、足掛けで転倒させ、もう一つの方は体を反らせ回避する。

顎に向けて右ストレート、怯んだ所でナイフ持っている右手を肘から折る。

「ぎゃあああああああ！！！！」

勢いよくやり過ぎたのか、折れた骨は皮膚を突き破り大気にさらされる。

それを気にも留めず、零れ落ちたナイフを引っ掴み、起き上がるとする山賊の手の甲をナイフで突き刺し、地面に縫い付ける。

「ぐがあああああ！！」

存外、容易く無力化出来た。

まあ、これで安全に質問が出来るな。

「いいか、俺は面倒が嫌いだ、二度は言わんぞ。ここはどこだ？」

山賊は痛みに悶え聞こえていない様子。

（仕方ない）

手を地面に縫い付けられた山賊の首筋にナイフを添え、再度言う。

「俺の質問に答えろ、でないと殺す、いいな？」

無論、言葉の綾だ。

ケンカ馴れはしているが、人を殺したことはない、殺したいとも思わないしな。

……半殺しは何度かあるが。

山賊は忙しく上下に首を振るい、同意を示す。

そして、質問しようと口を開いた。



幾つか質問を続けて得られた情報は、聞いたことが無い国名、地名、そして――

「――魔法、か」

ファンタジー系は苦手なんだがな、と内心で呟いた。

最初は、狂言かと疑い、首の薄皮を切ってやったが、その言葉は覆らなかった。

恐らく事実なのだろう。

まさかと思い、アメリカやロシアといった有名な国々の事を知っているかと訊いた。

だが、返ってきた答えは知らない。

国際的な有名人の名前を出しても、知らないという回答のみ。

自分が考えているより大事になっているのを直感した。

その後、利用価値が無くなった山賊を解放し、逃がす。

山賊は一目散に走り去っていった。

それを見届け、思考に没頭する。

これらの情報を総合的に考た末に出した答えは、異世界に転移したという荒唐無稽な答え。

（ハッ、胡散臭いな）

直感はしたが、決定的証拠ではない。

今の所は、半信半疑。

山賊から幾つか奪っておいた物品の一つ、ナイフ一本を制服の内ポケットに入れ、倒木を背もたれにして寝る体勢に。

このような異常現象に精神はそうでもないが、肉体は疲労したのだろう。

先ほどから眠気が凄い。

腕組みをして、右手は制服の中のナイフに。

いつでも襲撃に対応出来るように、だ。

（……腹へった）

再度泣き喚き始めた腹の音を、子守唄代わりにして寝る。

1話 異界訪問（後書き）

いろいろと展開が急すぎて分かりづらいですね、気を付けます。
感想など待っています。

出来れば辛辣な言葉ではなく、オブラートに包んでやってください。
作者はハートが弱いので。

2話 厄介事件（前書き）

主人公は自身にとって害悪な存在になるならば、それが誰であろうと牙を剥きます。

だから、相手を傷付けることに罪悪感はない片も感じていません。

2話 厄介事件

朝の冷たい空気が肌を貫く。

それを感じ、ゆっくり目を開ける。

焚火の炎は消えていた。

道理で肌寒いわけだ。

立ち上がり、服に付いた砂を払う。

背伸びをし、凝った体をほぐす。

ポキポキと背骨が鳴った、それと腹も。

また腹が自己主張を始めたようだ。

とりあえず朝飯を確保するために、遙か前方に見える、獲物の居そうな森に向けて足を進める。



一時間程度で森に到着。

内ポケットからナイフを取り出し、ターゲットを探す。

(……………居た！)

猪のような奴を発見。

二本の巨大な角が特徴的な猪に気づかれないように、息を潜め背後から近づく。

そして、

「……シッ！」

脳天を一突き。

キレイに猪は絶命した。

「悪いな、こちらでも生きるために必死なんだ。存分に恨め」

親友の起こす厄介事から逃れるため、こうやって存在を殺したな、と懐かしみながら猪にそう言った。

死体を解体し、食べれそうな部分の肉を木で作った串に刺し、焚火の火で炙る。

十分に焼けたら、豪快に喰らう。

少し生臭かったが空腹の前では、それは気にならなかった。そのまま、喰らい続ける。

腹もふくれた。

次にやることは人に会い、山賊の言葉の裏付け。

ここが異世界かどうかの。

もし、ここが異世界ならば、それはそれでいいと思っている。
元の世界に未練はないからな。



アチラの世界にいる時から考えていた。

退屈、だと。

毎日の繰り返し、似たような日々。

戦争を望んでいるわけではないが、平和な日々に飽き飽きしていた。
ツマラナイ、実にツマラナイ。

それからケンカをするようになった。

理由は面白そうだったから。

最初は負けてばっかりだったが、いつしか負けなくなっていた。

また退屈な日常に逆戻り。

それから親友が持ち運んでくる厄介事を暇つぶしに手伝うことにした。

まあ、あまりにもくだらない厄介事を持つてくるので止めたが。

本当に困り、助けが必要な時以外は厄介事から逃げることにした。

そんなわけで元の世界にそこまでは執着していない。

なによりも異世界、SFチックで結構なことだ。

そう考えれば異世界に生きるのも悪くはない。

俺は心底そう思った。

この森を抜けた先に街がある、情報どうりならばそろそろ着く頃合いだ。

黙々と歩き続け、やっと街並みが見えた。

寂れた街並みが。

空は曇天、光を通さず、暗い雰囲気を一層に強くした。街を歩く人の表情には影が差し、疲れきっている。

なにかあるな、と思いながら喫茶店風の建物に入る。

建物にはムラサメと“日本語”の片仮名で書かれた看板が掲げられていた。

この世界の主流言語は日本語なのかもしれない。

（存分、平行世界の地球でした、というオチだったりしてな）

そう内心で考え、喫茶店のカウンター席に座る。

「注文は？」

幾分か経ったところで、喫茶店のマスターがぶっきらぼうに訊いてくる。

「軽食と飲み物を」

結構歩いてきたためか、小腹が空いていた。

「銅貨一枚だ」

山賊から迷惑料として奪ったおいた巾着袋から銅貨一枚を取り出し、渡す。

数分後、サンドイッチとコーヒーが運ばれた。

「訊いてもいいか？」

「……街のことか」

「ああ」

厄介事はお免だが、好奇心に負けて街の事を訊く。
マスターは疲れた表情で語り始める。

「……四年ほど前にな、いきなり奴が現れた。奴は、夜な夜なこの街の人間を拐っては喰らう、そんな毎日だ。昨日は七人も犠牲になっちまった」

マスターは溜め息を吐いた。

「勿論、対策はとった。ギルドに退治を依頼した」

ギルドってなんだ？と思ったが、今は黙って聞くことにする。

「だが派遣された連中は、奴を見るや否や逃げちまいやがった！」

ダンッ、とテーブルを殴る。

マスターの顔は怒りで真っ赤になっていた。

「……すまん、感情的になり過ぎちゃった」

「いや、構わない」

コーヒーを一口含む。

ほどよい苦味が口内に広がる。

あまりブラックは飲み馴れてないが、コイツは旨い、何杯でもイケ

る。

「派遣された連中はそれっきりか？」

「ああ、そうだ。ギルドは代わりの人材を送ってきたが、逃げるか、死ぬかのどちらかだ」

「そんなに強いのか」

「奴と同種の個体はそれなりの強さだ、Aランクの実力者が三人で十分に倒せる」

Aランクがどのくらい強いかわからんが、それなりに強いことはなんとなく理解出来た。

「だが奴は違うと」

「ああ、その通りだ。Aランクが十人、二十人、幾ら束になっても勝てなかった」

「そ、そいつは大変だな」

頬を引きつらせながら、そう答えた。

「ギルドで最高ランクのSランクが一昨日来て奴の所に行ったが、音沙汰なしだ。お前さんも長居せず、さっさとこの街から逃げた方がいいぞ」

「アンタはどうするんだ？」

まるで自分はここから離れないと言っているようで、気になった。

「ワシはこの街から離れんよ」

「逃げないのか？」

「くたばるならこの街で、と決めているからのう」

ニヒルな笑みで、そう言った。

惜しい、実に惜しい。

特段、コーヒー通というわけではないが、この人の煎れたコーヒーは旨かった。

「なあ、マスター」

「なんじゃい、若者」

気がつけば、

「俺に手伝えることはないか？」

口が勝手に動いていた。

厄介事に首を突っ込む、困っている人に手を差しのべる、俺の柄じゃないんだがな。

3話 幻想会合（前書き）

今回から出来次第投稿になります。
最低、一週間に一回は投稿したいです。

3話 幻想会合

「俺になにか手伝えることはないか？」

はあ？と、呆けた表情になる、マスター。

「最初は関わるつもりはなかったが、マスターのコーヒーがあまりにも旨くてな。協力をしたくなってしまった、そういうわけだ」

「：お前さんはまだ若い、こんな寂れた街のために命をはるのは愚行、というやつだ。それでもか？」

「それでもだ」

「しかし、そう強そうには見えんがのう」

「まあ、そう強いというわけではないが、動体視力と体力には自信がある。囃程度にはなれると自負しているが」

そう言って、ニヒルに笑ってみせる。

一応これでも、親友の厄介事に巻き込まれ、銃弾を避けたことがある。

銃弾を避けるのは存分簡単なことで、相手がトリガーを引くのに併せて、射線上から逃げれば中らない。

しかし、囃が居ても肝心のアタッカーが居ない。

俺はアタッカーになれるほどの威力は持っていない、ナイフ一本だしな。

「呆れた、だがそんな考え方、嫌いじゃねえ」

どうしたものか、と考えていると背後からの太い声がして振り返る。そこには2メートル近くは有ろうかという大男が居た。

見た目は三十代後半、くすんだ金髪が特徴的だ。

一応、俺は180センチはあるが、この大男と比べると随分自分が小さく感じる。

かなりどうでもいいことを考えている、俺。

「お前さん生きていたのか!？」

マスターが驚いたようにして声をあげる。

恐らくこの大男がさっき話に出てきた、Sランクの奴か。

「まあ、手酷くやられちゃったがな」

そう言って肩を竦める。

大男のほぼ全身に包帯が巻き付けられていた。

「だがそれは奴も同じだ、今なら弱りきっているはずだ」

「ホントか!」

「嘘は言わねえよ、だがこのまま行っても負ける、そこでお前の手を借りたい」

「いいのか? 自信はあるとは言ったが、そう易々と信じて。しかも初対面の人間を」

「勘で分かる、お前は出来る奴だ」

そう断言した。

「呆れた、だがそんな考え方は嫌いじゃない」

さっきの大男を言葉を真似って言ってやる。

「クッハッハッ！こいつ一本取られたな。俺の名はタフガイだ、無論偽名だが」

と、手を差しのべ、握手を求められる。

名は体を表すように、タフガイと名乗った男は高い身長に加え、筋肉隆々で、正にタフガイだ。

もっとましな偽名があっただろうに。
ド直球すぎる、ネーミングセンスだ。

握手に応え、自分も名乗り返す。

「俺は……レイヴン、レイヴンだ」

本名を名乗ろうとしたが、止めた。

理由なんてない、あるとすれば気まぐれだ。

「レイヴン？」

「ああ」

「絶対偽名だろう？」

「さあ？想像に任せる」

俺の黒髪赤目、その色合いは鴉を連想させた。
だからレイヴン（鴉）と名乗った。

「若者よ」

「ん？なんだ」

今まで黙っていたマスターが、金貨を数枚ほど差し出す。

「少ないが、依頼料だ。持っていけ」

「いや、要らん。俺が勝手にやると言った、だからこの際の依頼料
ってのは場違いというやつだ」

「……それではワシの気がすまん」

受け取れ、と目で語っていた。

だが、な。

奴とやらの影響で、この街に訪れる旅人などは激減したはずだ。
現に、この喫茶店に来る前に見た限りだが、殆どの店は畳まれてい
た。

街を歩く人も少なく、お世辞にも活気あるとは言えない。

そんな、客の来ない状況下で経営を続けているマスターから依頼料
を受け取るのは、どうもな。

大きなお世話かもしれないが、考えすぎかもしれんが。

しかし、要らん言っても諦めなさそうだ。

「なら熱々のコーヒーをくれ、それが依頼料だ」

格好つけて言った。

「格好いいねえ、お兄さんには真似出来んよ」

タフガイが茶々をいれてきた。

というか、お兄さんというよりオッサンだろうに。

「誰がオッサンだ」

エスパーか、このオッサンは。

「…なにも言っていないだろ」

「いんや、お前の目が言った」

「自覚があるから、そう思うのではないか？」

あくまでシラを切る。

ぐっ、と呻いた、ホントに自覚があつたのか。

「……分かった、とびっきり旨いやつを作ってやる」

すると、マスターは納得していない表情をしていたが、諦めたようにそう言った。

「それは楽しみだ。ところで、いつ奴の所へ行くんだ？オッサン」

「…クソツタレ覚えてろよ。二時間後だ」

オッサン発言に、なにか言いたげな顔をしていたが、吐き捨てるようにして答えた。

「そーいやお前さん、武器は持っているのか？」

コーヒーを作りながら訊いてくる。

「ナイフが一本」

ナイフを懷から取り出し、マスターに見せる。

「お前馬鹿だろ」

珍獣でも見るかのような目で、タフガイ……いやオッサンが言った。

「そんなにボロボロのナイフじゃ、自衛にも使えんだろ」

「まったくだ」

コーヒーを作り終えたマスターが同意した。

「狩りには使える」

渡されたコーヒーを飲みながら、反論する。

「ホントにか？」

「ここに来る前に猪を一頭」

疑うような視線を向ける、二人。

「どうやったんだ、若者よ」

「気づかれないように近づいて、脳天を一突き」

「なるほど」

「…だが、奴相手には心持たなすぎる」

オッサンは、考える素振りをした後にごそごそ、と自身が背負っていた袋からある物を取り出した。それは、鞘にしまわれたナイフ。

「そこで、この“お兄さん”がコイツをプレゼントをしてやる」

お兄さんの部分を強調して言う、しつこいぞ。

ナイフを受け取り、鞘から出す。

刀身が60センチほどある、ナイフと言うより鉞だな。頑丈そうで、刃はよく物が切れそうだ。

「大事に扱えよ」

「いいのか？」

「ああ、丁度売ろうとした不要品だ、存分に使え」

「なら遠慮なく貰うことにする」

「貸し一だ」

プレゼントではないのか、とオッサンに抗議の視線を向けたが、オッサンはしてやったりな顔をした。

「なんだあ？まさか無料で手に入る、とでも思ったかのか？残念だが、そう上手く事は運ばんさ。よかったなレイヴン、これで社会の法則を一つ学習した」

ニヤニヤ笑いながら、滔々に喋る。

絶対、オッサン発言の復讐だ。

「……ファツキン」

げんなり眩き、コーヒーを飲み干す。
精々大事に使わせてもろうとしよう。

「んじゃ、俺は準備に取り掛かるとしよう。レイヴンも準備しておけよ」

「了解した」

店から出ていく、ペテン野郎。

「マスター」

「なんだ？」

「コーヒー、おかわりだ」

カップを差し出す。



準備が終わったのか、オッサンが帰ってきた。

「準備はいいか？」

「ああ」

「では行くとするか」

「気をつけろよ、お前さん方」

手を振り、応える。

因みにカバンはマスターに預かってもらい、ズボンのベルトに先ほど貰ったナイフを付けている。

「さて、どこに行くんだ？」

「あの森だ」

指差した方向は、俺が朝っぱらに走破した森だった。よく襲われなかったな、俺。

奴がいる森へ歩き始める。

数時間かけて走破した道のりを、再度辿るといのは、面倒なことこの上ない。

「そういやオッサン、武器はどうしたんだ」

今気づいたが、オッサンはなにも背負っておらず、随分身軽だ。

「ん？ ああ、コイツだ。あと“お兄さん”な」

そろそろ認めろ、アンタは“オッサン”だ。

オッサンは首にかけているペンダントを掲げる。

可哀想に、老化が脳まで。

「なにか失礼な事を考えていないか」

即座に反応した。

やはりエスパーか？

「いや、まったく」

「…まあ、いい。コイツは特殊魔法を応用して武器が格納されてんだ」

思わぬところから、魔法という言葉。

オッサンにとって魔法は当たり前のモノのようだ。

魔法という単語を使い馴れている感があった。

「おら、出てこい、パルヴァライザー」

そう言うとおッサンの手に、所謂バスターソードのような大剣が現れた。

無い物がいきなり現れる、そんな非現実的な光景を見せられては、ここが異世界と認める他ないな。

半信半疑だった心も、これで納得した。

「パルヴァライザー、意味は『粉碎する者』か、いい名だな」

「だろう？俺の頼りなる相棒だ」

大剣をペンダントに戻し、誇らしげ言う。

「そういえば聞き忘れていたのだが、奴ってのどんな奴だ？」

マスターもおッサンも、奴としか言わなかったからな。

「言ってなかったか？」

「ああ」

「そうか。簡単に言えばドラゴンだな」

ドラゴンとは、まったくもってファンタジーらしいな。

「ドラゴン程度なら余裕だが、奴は違う。Sランクである俺でさえ、なんとか引き分けがやっとだ」

「Sランクってのは、どの程度強いんだ？」

「知らねえのか？」

驚いた風に訊いてくる。

「なにぶん田舎出でな」

異世界からの説明が面倒だな、口八丁なでまかせを言い追及を逃れる。

「結構有名なはずだがな。まあ、いいか。ギルドはF、E、D、C、B、A、S、と順に並びSが一番強く、Fが一番弱い」

「なるほどな」

「因みにSランクは俺を含め、世界に30人にしかない」

「少ないな」

「まあ、Sランクの壁は高い、というわけだ。そう簡単にはなれないのさ。しかしお前ならばいけるかもな」

「俺がか？」

「ああ、そうだ。俺の勘がそう告げている、結構あたるんだぜ」

「……何故俺を気にかけるんだ」

ずっと感じていた違和感、それを口にした。

俺を囚に選んだのも、ナイフ貰ったのも、それらが引っ掛かっていた。

要となる囧を勘というアヤフヤなモノで判断し、ナイフは売って金にすればいい。

囧は基本的に逃げ回る役だ、攻撃はあまり重要ではない。

オッサンは一瞬硬直した、やはり何かあるのか？

「…バレちまったか？」

苦笑いをし、頬を掻きながら確認してくる。

「そのセリフは白状と同義だ」

「ハハッ、なら白状するさ。要約すれば優秀な人材を探しているんだ。優秀な人材に融資し、育てる。そしてその人材を使い金を稼ぐ、というわけだ」

「借金でも背負っているのか」

「いんや違う、家族のためだ」

「格好いいねえ」

「男だからな、格好つけたくもなるさ」

「Sランクじゃ稼ぎが少ないのか？」

稼ぎが多そうだがな。

Sランクって凄そうだし。

「十二分にはある、だが訳ありでな、大金が必要なんだ」

訳ありねえ、訳かぬ方がいいだろう。

それにしても、まだ森に着かな。

大分歩いたが、森の樹木を視認するに至ってない。

「俺も“機人”だったらなあ」

溜め息を吐きながら、そう言う。

「機人？」

「お前知らねえことばっかだな。しかしコイツは田舎の奴でも知っている常識ってやつだぜ、知らないっていう奴は初めて見たな」

挑発するようにオッサンが言った。

ぬかった、なんでもかんでも訊くものではないな。

まあ、隠すことでもない、話すとするか…かなり面倒だが。
最初から言っておけば良かったか？

「——という事だ」

「……その親友とやらの召喚にまきこまれたのだろうな、前例がねえから断定は出来んが。……そういや勇者を召喚する、という噂があったな。その親友とやらは勇者かもな？」

勇者か、アイツなら喜んで引き受けそうだな。
アイツ、馬鹿だしな。

そういや存分あっさり信じたな、このオッサン。
そう珍しいことでもないのか。

「なら元気にやってるだろう」

「会わないのか？」

「ああ、面倒だからな」

厄介事は基本的に巻き込まれるのは嫌だ、今回は例外として除くが。
アイツに会って、勇者の手伝いをさせられるのは勘弁。

情が無い、と言われるかも知れんが、アイツ一人で十分。
万事上手くやってくれるだろう……多分。

アイツ、頭はいいが考えないで物事をやる猪突猛進型だから、少し
心配。

「薄情なことだ」

「俺はアイツを信じている、だから大丈夫」

可笑しいな、何故か棒読みになってしまった。

「本音は面倒なだけだろう？」

「そうとも言う、よく分かったな」

「……お前の人間性が分かった気がするよ」

げんなりとオッサンが呟いた。

まあ、結局のところは面倒なだけ。

アイツが切羽詰まり、心底助けが必要としているならばを貸すが。

突然オッサンが目を細め森の方を見やり、パルヴァライザーを取り出した。

森まで残り数十メートル程度。

流石はSランクといったところか、雰囲気ガラリと変わり、戦士然している。

「……どうやらお喋りはここまでのようだな」

そうだな、と返しながらベルトからナイフを引き抜く。

咆哮、轟音という表現が相応しいほどの音が大気を震わせる。

そして奴が姿を現した。

8、9メートル程の巨体が軽快に空を舞っていた。

爛々と光る目線がこちらに固定されている。

ちようど飯の時間か？ソイツはグッドタイミングだな、ファツキン・ドラゴン。

「大技を奴にかます！その間は無防備になる、しっかり働けよ！」

オッサンの体は傷だらけ、短期戦でかたをつける、ということだ。精々、死なない程度に頑張るとしよう。

「了解した」

地を蹴り、前へ。

奴は空から地上に降り、悠然と構えている。

（嘗めてんのか？コイツは）

空から奇襲すればいいものを、ナンセンスな行動だ。

飯前の小運動ってところか。

恐怖はない、あるのはこのギリギリの命の取り合いを愉しむ心のみ。
口元には歪な笑みがうかんでいた。

——Engage——

4話 闘争行動 一部設定修正（前書き）

いろいろと説明が足りてないところがありますが、今度説明しますので気にしないでください。

4話 闘争行動 一部設定修正

俺は地を駆ける。

オッサンに注意が行かないように気を付け、ドラゴンの背後に半円を描くようにして近づく。

未知数の力を持つ相手に不用意に近づくのは愚の骨頂だが、今回は仕方ない。

思惑通り、ドラゴンを俺に第一のターゲットにしたようで、体ごと動かし追従する。

オッサンは大剣を構え、集中している。

オッサンの周りに微弱な蒼色の粒子が漂っていた。

なかなか近寄らない俺に痺れを切らしたのか、ドラゴンはおもむろに口を開く。

分かりやすいな、技の兆候だ。

威力、攻撃規模も不明、全力回避に移る。

ドラゴンはその強靱な四肢を地面に固定して反動に備える。

かなりの大技のようだ、だがそれ故避けやすい。

先ほど居た場所に閃光が駆け抜ける。

レーザーの如き閃光が通ったところは一直線に地面が抉れていた。その高熱量のエネルギーの余波を受けた地面はガラスに似た性質になっていた。

どんな出力だ、イカれてやがる。

正直、冷や汗がびっくりなまでにかいている。

（喰らえば、熱々のローストチキンの出来上がりだな）

それ以前に消し飛ぶがな、カスも残さず。

「あぶねえ！」

どうやら先の大型レーザーはブラフ、ドラゴンの羽から小型レーザーが幾重にも発射された。

運が良かったのか、かする程度に被弾した。

しかしこの距離に居座り続けたら、いつかは穴空きチーズになってしまう。

かなり危険だがドラゴンの懷に潜り、逃げ回るしかない。

即座に急速接近する、近付けば近付けほど威圧感が増す。

小型レーザーの網を掻い潜り、ドラゴンに到達。

この距離ならばレーザーを使えまい。

ドラゴンは待ってましたと言わんばかりに口を開く。

俺を食らいつこうとする大口を横に避け、その首にナイフで思いっきり切りつける。

「：チッ、そう上手くはいかんか」

あっさり弾かれた、硬い。

ドラゴンは前足の刃物のように鋭い長爪を出し、上から下へと裂いてくる。

存外に爪は長く、目測で2メートル以上はありそうだ。

それを考慮し、過剰気味に後ろに飛び回避。

目の前を長爪が通過、学生服のみ裂くに留まった。

ドラゴンと視線が交差した。

（あつぶねえな）

内心ヒヤヒヤする、過剰に飛ばなかったら、三枚におろされるところだった。

気のせいか、ドラゴンと視線が交差したとき、奴の瞳が怪しく光った。

まるで、罠に掛かったなと言わんばかりに。

ドラゴンは振り下ろす前足の長爪を収納、勢いを殺さず地面に叩き付ける。

そして予想外な光景が目に入った。

叩き付けた衝撃を利用し、後方宙返り。

その過程で長く鋼鉄の尾を使い、アタック。

こちらは過剰め飛んだため滞空中、足場はなく回避行動に移れない。

避けきれない！

鋼鉄の尾が目前に迫る、咄嗟に両腕をクロスして防御姿勢になる。

直撃。

鈍い音が響く。

両腕に激痛が走る、歯を食いしばり痛みを耐える。
トラックに正面衝突されたかのような衝撃。

足を伸ばし無理矢理バックステップ、ダメージ減少を狙っての行動だ。

衝撃で後方へ吹き飛ばされた。

思いの外効果が表れ、両腕のみの粉碎に留まる。
バックステップしなければ即死していたと思う。
それほどの威力を秘めていた。

後方に7、8メートル吹き飛び、地面に叩き付けられた。

（クソツタレ、目が霞んで見えねえ）

後頭部から叩き付けられたのが原因か、視界が霞む。
霞む視界から巨体がゆっくり近づくのが分かる。

腹筋と足を使い立つ。

両腕には力が入らず、動く気配がない。

脳内にアドレナリンが大量に分泌しているのか、痛みに対して鈍感になっている。

（ファッキン！平衡感覚もイカれてやがる）

立った方がいいが足元が覚束ず、よろける。

難とかバランスをとるが、儘ならない。

絶対絶命、というやつか。

ドラゴンの地面を踏みしめる音が直ぐ近くで聞こえた。

ポタポタとなにかが落ちる音、異臭が鼻をつく。

霞む視界が回復して見えたのは、口を開き涎を垂らすドラゴン。

距離的に3メートル程前にドラゴンの顔がある。

（臭え、ファツキン・スメルだ）

最後の悪足掻きに、落ちていた小石を足で蹴りあげシュート、狙いは無防備な目。

「グオオオオオオオツ！！」

案外痛そうな声をあげた。

ファツキン・ドラゴン、獲物を前に舌舐めずりは三流のすることだ、でないと手痛いしっぺ返しをもらうぞ。

かなり痛かったのか、まだドラゴンは悶えていた、そんな痛かったか。

その悪足掻きが命を繋いだ。

「よおし、準備万端。…ん？なんだお前ボロボロじゃねえか、ダセエな」

オッサン、それが命を賭けて囚になった俺に言うことか？
それとアンタも奴にやられてボロボロだろうに、人のこと言えるのか。

オッサンの剣は通常時は黒い色をしていたが、今は深海のような蒼色で塗装されていた。

形は少し変わっており、無骨なデザインに鋭さが加わっていた。

悶え終わったのか、ドラゴン血走った目で怒りを露にしていた。

「オッサン、あとはよろしく」

悶えている隙に俺はドラゴンから離れている。

あとはオッサンの仕事だ、遠目で大技を見学する。

「おう、任しておけえい！この“お兄さん”にな！」

実年齢は訊いていないが、見た目は三十代後半、完全にオッサンだ。

「必殺！豪快一振り！！」

だからそのド直球なネーミングセンスはなんだ。

オッサンは小型レーザーの網を搔い潜りドラゴンに接近、名の通り豪快に大剣を振った。

真っ二つに切れ、あっさやかたがつく。

それにしても、あのドラゴンなんだ？

ファンタジーらしく火でも吐くかと思ったが、レーザーの如き閃光、

圧倒的の破壊力。

……退屈はしそうにないな、この世界は。

「……はあ……疲れた」

5分程度の攻防、体力には自信があったつもりだが疲労困憊だ。

ドラゴンを倒したあと、粉碎された腕の痛みがアドレナリンが切れたことにより、激痛が身体中を駆け巡った。

それに気が付いたオッサンに、治療魔法とやらをかけてもらい応急措置を施した。

全快は無理らしく、ドラゴンを倒した証拠の眼球を取り、急いで街に戻った。

街に戻るとマスターが待っており、俺の傷に気がつき魔法で治してくれた、あとオッサンの傷も。

個人的には野郎より美人さん治してもらいたかった、贅沢すぎる考えだが、それを言ったら二人とも同意した。

マスター曰く、野郎なんかより“幼子”を治療したいらしい。

マスターの印象が渋い老人からムツツリスケベとロリコンに変わった。

……まあ、孫にでも向ける愛情かも知れんがな。

だが次が問題だ。

オッサン曰く、リザに治療してもらいたかったらしい。
リザとは誰だと訊くと、満面の笑みでこう言った。

「俺の嫁さんだ！」

頼んでもないのに写真（魔法で作った）を見せて、その写真には聖母のような微笑みで写る金髪緑眼の美人さん。
タフガイの印象が、オッサンから嘔吐きペテン野郎に変わった。

俺とマスターはあからさまに胡散臭い表情をした。

「オッサン、嘘はいかんぞ」

「だあからっ！ホントだって言ってるだろうが！」

可哀想に妄想と現実の区別がつかなくなるとは。

「…まあ、いいさ。俺に嫁さんがいる事実は変わらねえ、しかもとびっきり美人のな！」

先ほどの必死な態度から一変、余裕な態度に変化。
多少イラッときた、その余裕な態度に。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだ」

ミクロ単位も信じていないからな。

「そんなことってなんだ！」

憤慨したようにオッサンが言った、だが確かめたいことがあるので

無視を選択。

「訊きたいことがある、あのドラゴンについてだ」

「……そういやレイヴン、奴を相手にしてよく生きていたよなあ」

感心したように呟く。

待てコラ、いきなり何を言い出すかと思えば、よく生きていたな？

「死ぬ前提だったのか、俺は。というかオッサン、アンタはお前ならやれるとかなんとか言っていなかったか？」

「言ったことは言ったが、十分に時間を稼げるという意味だ、生死は知らん」

ぬけぬけと利用されたか、まあ、マスターの出すコーヒーがまた飲めるんなら構わないがな。

「しかし、本当に生きていたよな、お前。奴は“機人”並みの攻撃力と防御力を持っている。まあ、推測だがな」

「機人じゃと!？」

現在、マスターの経営するムラサメのカウンター席に座り、マスターはグラスを磨いている。

マスターが驚く、そんなに危険な相手なのか？
機人……どっかで聞いたな。

「すまんが、機人ってなんだ？」

率直に訊いた。

「説明していなかったか？」

「ああ」

「まあ、いいか。機人ってのはな——」

機人、現在たった六人しか確認されていない生命体。

通常時は人間となんら変わらない姿をしているが、戦闘時は全身に鎧を着込む。

その鎧は、どんな上級攻撃魔法を使おうが傷付かず、圧倒的なものの攻撃力を有している。

しかし上記の能力は序の口。

バリア、高速移動などあり、それらも相まって機人は無敵な存在。

事実上この世界のヒエラルキーの頂点に立つ存在。

勇者でも魔王でもどんなに強かろうと、機人には遠く及ばない。

機人は、カレードと呼ばれる中立の傭兵組織に属している。

「ん？なら勇者を召喚する意味なくないか、そのカレードとやらの魔王討伐を依頼すれば、簡単に決着がつくだろう？」

「まったくもってその通りと言いたいが、言えない」

まあ、実際勇者を召喚しているのだから、それなりに理由があるのだろう。

「民間に機人の存在自体知られていない、何故だか分かるか？」

ヒエラルキーの頂点に立つ存在が知られていないだと、どういふことだ？

まったく分からない。

「……勇者を使い魔王を倒す、そうすれば国に手柄が入り、国が発展する。政治的な配慮じゃのう」

マスターは理解出来たようだ。

というかマスター、秘匿されている機人の存在を知っていたり、政治的理解がある、何者だ？

まあ、俺には関係ないな。

「そういうことだ、機人の存在を知らせないのは手柄取りに邪魔な存在なるからだ。機人の存在が知られては勇者なんて不要の産物なのさ」

なんとなく理解出来た。

勇者は言い様に踊らされている人形、ということをとおりあえず“アイツ”に南無と捧げた。

「まあ、そんな機人並み強いドラゴン相手に生き残ったお前は十分に見所がある、そんなわけで一緒に旅をしないか？」

いきなり旅のお誘い、特段予定もないし、この世界のこととも知らないから了承した。

しかし不満な点が一つ。

「ムサイ野郎二人での旅、誰得だ」

贅沢な考えだが、言う分には問題ないだろう。

「その点はぬかりない、俺だったムサイ野郎二人なんて嫌だからな」

「どういことだ」

「“見た目” 麗しい人物が明日辺りにはこの街にくる手はずだ」

案外手際がいいな、オッサン。

「フムン」

しかし、なにか引っかかる物言いだ、気にすることのほどでもないだろう。

「そういえばお前さん方、夕食の時間帯だが、食べていくかのう？
今ワシは機嫌がいい、じゃから奢るぞい」

話し込んでいたら外は暗くなっていた。

どうりで腹が空くわけだ。

お言葉に甘えさせてもらおうでしょう。

腹も膨れ、疲労が溜まっていたため眠い。

マスターの喫茶店の二階は宿屋としての運用されていて、粹な計らいでここも無料で泊まらせてくれた、しかも個室。気前がいいことこの上ない。早速ベットに体を預けると、急速に瞼がくつつく。

〈条件クリアを確認〉

〈第一次情報凍結を解除〉

〈情報内容をレイヴンへ伝送〉

〈――伝送完了〉

夜は更けていく。

5話 魔人参入（前書き）

自分はその場の勢いで設定や文を書くんですが、当初この作品はシリ阿斯ダーク調でいくはずだったのに、いつの間にかこんな馬鹿みたいな話に。

所謂、どうしてこうなった。

5話 麗人参入

朝。

太陽が世を照らし、小鳥のさえずりが聴こえる。
窓から部屋に太陽光が侵入、目が覚めた。

「……眩しっ」

目を擦り、欠伸を噛み殺しながら一階に下りる。

一階に下りるとマスター、オッサン、見覚えのない麗人、昨日言っていた人物と予測。

「お、レイヴンやっと起きたか」

「随分と早起きなことで」

いつから起きてんだコイツら。

こちらは寝起きでまだ眠気があるが、コイツらは全然眠たそうにしていな。

適当に朝の挨拶をすませる。

「昨日言っていた奴か？」

「そういうこった」

「貴方がレイヴン殿か、私はガーベラと言う、よろしく頼む。兄者から面白い奴と聴いているぞ」

艶やかな黒い長髪をポニーテールにし、顔立ちは凛とした表情が映える造型。

キリッとした雰囲気をもつ妙齡の美人だ。

第一印象が侍、侍と呼ぶことにする。

……ん？待て兄者？

「兄妹か？」

それにしても、まったく似てないな。

「いんや兄弟だ」

オッサンはニヤニヤ愉快そうに笑っている。

それを見たガーベラは不思議そうにしている。

兄弟…兄妹ではなく兄弟……よしオチが読めた、だが当たってほしくない。

というか外れろ。

外れてくれたら、神様だって信じられる。

ファツキン・ゴッド、俺の願いを訊け！訊いてくれ！

「なあ、侍」

「……私のことか？」

「ああ、そうそう、俺は人の名前を勝手につけたあだ名で呼ぶんだ、気にしないでくれると助かる。それよりも確かめたいのだが、性別は女か？」

そうであってほしい、という一抹の願いを込めた質問。

なにを馬鹿なことを言っているのだ、そんな表情をしている侍。

「無論私は男だ」

無惨にも願いを踏み潰された。
裏切られた気分だ。

「オッサン、表に出ろ今すぐにだ、即時即日即行最速速攻」

ゲラゲラ笑うペテン野郎。

オッサンを無理矢理連れ出し、店の前に。

「だ！れ！が！女って言った！俺は“見た目”麗しいしか言ってねえよ」

完全に開き直っている感、全開だ。

確かにそう言ったが、普通そう聞いたら勘違いするだろう！

「死ね！最速でな！」

左ストレートをペテン野郎の顔面に。

「中らねえよ、んなテレフォンパンヂッ！痛ったあ！舌嚙んだ！」

難なくかわされたが、本命は右ストレート、頬にクリーンヒットした。

しかしこれで気がすむわけもない、畳み掛ける。

「いいか、俺は面倒が嫌いなんだ。だから早く逝け！還れ！」

腹部、横っ腹、顔、滅多打ちだ。

そういえば昨日の機人云々で、最初聞いたときは誰でも機人を知っていると言っていたが、それはウソっぱち。

俺がなにも知らねえからって調子コキやがって！

「テメエ！恩人に牙を剥くか！あつたまキタ！ブツ潰す！」

オッサンも拳を構えた。

なにが恩人だ、言い様に利用した分際で。

「歓迎しよう、盛大にな！」

拳と拳の応酬、罵詈雑言な言い合いが30分続いた。

「とうか結局野郎じゃねえか！」

「見た目は美人だろうが！目の保養にはなるだろうが！」

「確かになるが、ボインがねえだろうが！第一自分の弟をそんな目で見てるか！？」

「んなわけあるか！俺にはりザがいる！第一ボインがなんぼのもんじゃない！尻だろ、男なら！」

「お前の趣味嗜好なんか訊いてねえんだ！」

「なにを！」

「多少手加減しているとはいえ、殴り合いで兄者と渡り合っている」

「やるのう、若者」

感心した風にガーベラとマスターが。

「いい加減くたばれ！ファツキン・オッサン！」

「お前が先に！くたばれ！クソレイヴン！」

「「逝け！今すぐ最速にな！！」」

拳の応酬は更に熾烈を極める。



「マスター、朝飯だ朝飯」

殴り合いが終われば二人とも痣だらけ。

レイヴンの元からボロボロだった服装は更に磨きが掛かり、みすばらしい。

「ほら」

マスターはそれを見越していたのか、朝食をだす。

内容は目玉焼きと焼きベーコンが乗ったパン三枚、コーヒー。

「ありがとうございます」

レイヴンは勢いよく食べる、先の殴り合いがいい運動になったのだろう。

「兄者、私は少し準備がある、これで」

「…お…お…お…」

瀕死体がひとつ転がっていた。

ガーベラはその瀕死体に近付き、用件を言い終わるとさっさとその場から離れた。

「……はい、ごつそさん」

「随分ボロボロになったのう」

食器を片付けながらマスターが言った。

「そーいやそうだな。……マスター、服が売ってある場所知らないか？出来るだけ安いところで」

現在、レイヴンに金を稼ぐアテはない、そのため節約する。

「そうじゃ、少し待っておれ」

なにか思い付いたかのようにそう言い、ちょうど片付けが終わったマスターは店の奥に引込む。

なんだろうか？

「……ぜえ…ぜえ…若いっていいな」

瀕死体が蘇生し始めた。

「だからオッサンなんだ、アンタは」
コーヒーを飲みながらレイヴンが。

「お前っ！オッサンオッサンって言っているが、俺はまだ25だ！」

「ブフォッ！！」

黒い液体が宙に舞った、その様は大変汚い。

「ゴホッ！ゲホッ！」

レイヴンはむせた、それも盛大に。

（25？どうみても三十代後半、肯定的に見ても32が限度だ。…
ジョークのセンスがまったく感じられないな）

「そんなに驚くな！悲しくなるじゃねえか！」

その口ぶりからジョークの類いではないと悟ったレイヴンは、

「老け顔」

「グハッ！」

真顔でトドメをさした。

「なにをしとるんじゃ？ お前さん方」

マスターが戻ってきた、手に何かを持って。

「なんでもない、マスターそれは？」

吐き出したコーヒーを拭きながら訊く。

「少し…いや随分と古いが、ワシが昔着ていた戦闘服じゃ」

そう言って、マスターはレイヴンにその手に持った物を差し出す。

「戦闘服？」

それを受け取り、宙に広げる。

シャツ、エンブレム付き革ジャン、ホルスター付きズボン、ナックル付きグローブ。

その戦闘服は全体的に黒い、それと赤いラインが入っている。

エンブレムは頭骸骨の上に鴉が一羽、此方を睨んでいる。

なにか運命を感じた、レイヴン（鴉）。

「コイツはスゲー。全部に高水準の対魔力に防刃機能付きだ」

一目見て、その服が高価な物と判別したタフガイ。

「ん？このエンブレムは……マスター、貴方まさか！」

タフガイが驚いたようにマスターを見る。

「ありゃ、気づかれたかのう。もうワシのことを知っとる奴なんていないと思ったのにのう」

その反応が予想外だったのか、マスターも驚いたように言った。

「デスドライバー！（死の運び手）生きる伝説だぜ、コイツは！」

「懐かしいのう、その呼び名も」

ヒーローを見た子供のようにタフガイが、昔の思い出に浸るようにマスターが言った。

二人で盛り上がる、レイヴンを置き去りにして。

「あー、すまんが説明を要求する」

「なに知らねえのか！？レイヴン！……ってそーいやお前、異世界から来たんだった、忘れてた」

「なに異世界じゃと、興味深い話じゃのう」

長くなるので割愛。

「つまりお前さんは召喚に巻き込まれ、」

「マスターはその昔、ギルドの中で無類の強さを誇った生きる伝説で、通り名がデストライバーで、」

「その生きる伝説が着ていた服がそれだ、というわけだ」

三人がそれぞれ引き継ぎながら話す。

「それにしてもよく分かったのう、何十年も前の話じゃぞう」

「ギルドに所属する奴に語り継がれているのですよ、貴方のことは」

タフガイはマスターに対して口調が敬語に変化した。

「ワシのような老いばれに敬語はいらんよ」

「いえ、滅相ありません」

キツパリと断る。

「似合わねえな」

レイヴンは2メートルを超える強面な大男が、壮年のマスターに敬語で話す様が、変に思えた。

例えるならば、893が老人を労り、己の親のように介護するかの様な様。

偏見だが、そう思えて仕方なかった。

「うるせえい」

「レイヴンの言う通りじゃ。今のワシはしがない喫茶店のマスター、それ以上でもそれ以下でもない、敬語は止してくれ」

手を左右に振り、拒否を表明する、生きる伝説。

「わかりまし……分かった」

流石にそこまで言われて尚も敬語を使い続ければ失礼にあたるため、渋々口調を戻すタフガイ。

「レイヴン、かなり古いが貰ってはくれんか？」

聞いた限りでは、大変高価な物品で有名人が着ていた物。

「いいのか？こんな、見知らぬ俺に」

そう、会って三日程度、殆ど初対面だ。

殆ど初対面の人物から物を貰うほど、図太くない。

まあ、初対面の人物にオッサンやら侍と、勝手につけたあだ名で呼ぶため、結構図太いが。

「なにいいんじゃ、置き場にも困っておったしのう」

「なら遠慮なく。感謝する、あんがとさん」

物凄く軽い感謝の仕方。

タフガイはその軽い感謝に頬を引きつらせた。

「早速着てくる」

レイヴンは着替えるため、二階へ。

「そういえばマスター、貴方はあのドラゴンには挑まなかったのか？ 貴方なら余裕で勝てそうだが」

唐突にタフガイが質問した。

自身が“多少”手こずったドラゴン、老いた伝説でも勝てる、とタフガイは信じた。

「現役時代にのう、大きな傷を負ったのじゃ。その傷は深くてのう、日常生活がやっと、今のワシはそこら辺のチンピラ相手でも満足に出来ない」

「そう…なのか」

「第一なんじゃ？ ワシのような老人に肉体労働をさせるとは、殺す気か？」

威圧的な視線がタフガイを貫く。

「い、いやそういうつもりで言ったわけではないのだが」

少し狼狽えた。

「純粋な疑問ってやつだ、気を悪くしたのなら謝る」

頭を下げ、謝辞の姿勢。

人に不快な思いをさせたら謝る、基本的な行為だ。

「冗談じゃ、頭を上げろ」

クックツと喉を鳴らし笑う。

そこで初めてからかわれたことに気付いたタフガイ。

「そりゃねえぜえ、マスター」

「すまんすまん」

寂れた街、それがレイヴンの第一印象。

それが今は活気を取り戻しつつある。

あのドラゴンが居なくなっただけだ。

「んじゃ、行くとするかねえ」

「了解した」

「分かった」

ガーベラの用事が終わり、その後旅の支度を完了させ、活気を取り

戻しつつある街から去っていく三人。

見送りはしない、人知れず去っていく。
マスターは……いない、死んだ。

〈使用可能武器再点検〉

〈右手武器、マーズ〉

〈左手武器、ムーンライト〉

〈背面武器、現在使用不可〉

〈肩部武器、現在使用不可〉

〈第一特殊機能、物質構築可能〉

〈第二以降、不可能〉

5話 麗人参入（後書き）

感想を待っております。

あと小説をかくアドバイスなども。

6話 老人逝去（前書き）

自分はなにが書きたいのだろうか。

前回は馬鹿みたいな話を、今回は唐突にシリアス風に、どこに向かっていくのでしょうかこの話は。

感想待っております。

6話 老人逝去

レイヴンは貰った戦闘服を着て、一階に下りた。

「格好いいねえ。お兄さん羨ましいよ」

タフガイはコーヒーを飲みながらまったりしている。

「確かに。ワシの若かりし日を思い出すのう」

しみじみといった感じに言うマスター。

「ソイツはどうも。野郎に誉められてもまったく嬉しくないがな」

「「俺も／ワシもそう思う」」

野郎が野郎を誉めても、それは気持ち悪いだけ。
鳥肌が立つような話だ。

「……なあ、レイヴン」

するとマスターがどこか改まった口調で。

「なんだ？」

「出来ればいい、ワシの意思を引き継いでくれないか？
否をしても文句も何も言わん」
無論拒

意思、それがなにかは分からない。

「オーケーだ、いろいろと恩があるしな」

だがこの高価な服を貰った恩がある、それなのに断る、なんてイカれた神経を持ち合わせていない。

「……あっさり決めるのう」

「俺は情に熱いんだ」

冗談めかしに言った。

「お前は親友を見捨てるような薄情な奴じゃないか」

即座にタフガイが反応。

「失敬な、見捨てるのではなく、アイツ一人で大丈夫……と信じているからだ、見捨ててはいない」

後半、まるっきり感情がともらず棒読みだ。

「本音は？」

「やはり、面倒は嫌い」

「……真面目な話をしているんじゃないが」

「すまん。で、内容は？」

「本当にあっさりしているのう。――ワシの意思、それはワレル族

の解放じゃ」

タフガイの眉が微かに動いた。

しかし二人ともそれには気付かなかった。

「ワレル族とは？ 説明よろしく、オッサン先生」

「オッサン先生ってなんだコラ。まあ、いい。ワレル族とは――」

代々魔王を生み出す一族、性格は好戦的かつ残虐で凶悪、と言われている。

人の身にあまる魔力を有し、全てを薙ぎ払う。
一見すれば人間となんら変わらないが、体の一部が人間と違うため
判別はつく。

「なるほど」

「じゃがそれはまったくの嘘、根拠のないデタラメじゃ」

「なに？ また嘘こいたのか、ペテン野郎」

マスターはその説明を違うと断じた。

心外だ、といわんばかりに肩を竦めるタフガイ。

「いや、それが一般に知られていることじゃ」

「わけがわからんな、出来れば単純明快な答えを頼む」

「そうでないと困る連中がいるからじゃ」

更にわけがわからなくなった。

「順を追って説明する。昔、ワシはある任務中に負傷した。腕は千切れ、足は粉碎され体は微動だにせず、血は止めどなく流れた。ここであつたばると、本気で思った」

懐かしむように滔々と話し始めた。

「そんな時、耳が動物の耳、そして尻尾が生えていた亜人、ワレル族と確信した。足搔くのを止めたよ、こんな状態じゃ悪足搔きにもならんからのう」

黙って耳を傾ける。

「じゃが違った。傷を治してくれた。意味がわからない。当時のワシも、ワレル族Ⅱ悪という固定概念を持っていた、じゃから困惑したのう」

相づちを打ち、コーヒーを啜るレイヴン。

タフガイは腕を組み、黙って聞く。

「なにか良からぬことでも企んでいるのかと疑った。率直に訊いた、何故助けたのかと」

一息つく、マスター。

「そのワレル族の女性はこう言った」

『困っている人に手を差し伸べる、当然のことですよ』

「残虐？凶悪？好戦的？そんなものは皆無。それを聞いたワシの中にある、ワレル族に対する偏見が消え失せた。そしてある異常に気付いた」

「異常？」

「そう異常じゃ。ワレル族は悪という概念を植え付けるかのような世の中に気付いた」

悪Ⅱワレル族、その公式を全人類に浸透させる世の中だ。

「まるで洗脳だな」

レイヴンは飲んでいたコーヒーを空にして、言った。

「そうじゃ、まさしく洗脳。――めでたく洗脳から解放されたワシは、培ってきた人脈を活かし情報を集め始めた。なにか大きな裏がある、とワシの直感が告げていたからじゃ」

喋りすぎて喉が渴いたのか、マスターは水を注ぎ一気に飲み干す。

「……あと一步のところまで来た時じゃった。手当たり次第情報屋にあたったお陰で、いつの間にか懐がスツカンピン、ちょうど高報酬の依頼があったから、それにとびついた」

自嘲気味に笑う。

「罠だった。幾重にも包囲網が敷かれ、流石のワシも突破は難しかった」

「さっき貴方が言っていた任務とはそのことか」

黙っていたタフガイが、確かめる声音で。

「そうじゃ。――辛くも包囲網を突破は出来たが深い傷を負い、身を隠すことにして、数十年。儘ならん体に苛立ち、無力な自分に嘆いた」

なんの理由もなく悪と決めつけられて迫害を受けているならば、それをなくしたい。

あの時助けてもらった恩に報いるために。

「頼む、ワシに代わり、真相を解き明かしてくれ。ワシは……もう駄目じゃ、死期が近い」

膝を地につけ正座の姿勢から前に体を倒し土下座の構え、マスターは心の底から頼んだ。

悔しいと思った、自分ではなく他人に頼むのが。

なんの関係もない他人に、恩を肩代わりさせる道しか思い付かない自分に、苛立った。

自分の戦えない体を、憎んだ。

自分のエゴを若者に押し付けるのが、なによりも情けなかった。

「だから……頼むっ！」

「お、おい、分かったから頭をあげろ」

レイヴンは慌てて立ち上がり、マスターを起き上がらせようとする。

「頼むっ！」

形振り構わず、頼み続ける。

こんな老いぼれに出来るのは、“昔の自分”に似たレイヴンにすぎ
るのみだ。

表面上は冷静沈着、裏は無感動な人間。

恐らく、このレイヴンという男は例えそれが親友だろうと、自身の
害悪になるならば潰す、そんな徹底した利己主義の持ち主、と直感
したマスター。

何故分かる？

昔の自分がそうだったからだ。

だから自分の意思を引き継いでくれそうな人物と思った。

昔のマスターとレイヴンは徹底した利己主義の持ち主だが、恩には
恩で返すという義理堅い一面も持ち合わせている。

まあ、誰かに借りを作るのが嫌なだけだが。

だからレイヴンに懇願した、自分の代わりに真相を解いてくれと。

例えそれが自分でなくとも、知らない他人より、自身に似た他人な
らば良かった。

「分かった分かった！ だから頭上げろって、アンタの意思は引き
継ぐから」

「本当にか！？」

「ああ、嘘はつかん。どこかのファツキン・ペテンと違って」

「おいそりゃあ、どういうことだ？ お兄さん、詳しく聞きたいな」

手のひらに拳を打ち付け、ベキベキと鳴らす。

ニヤリツと笑うレイヴン、掛かったな、とほくそ笑む。

「コイツは可笑しいな、誰もオッサンとは特定していない」

「……チツ、ドジ踏んだぜ」

「まあ、そんなわけだマスター、俺にまかせ……ろ、っておい！」

場を和ませようとしてタフガイを生け贄にした。

が。

振り返れば、地面に倒れ込んだマスター。

レイヴンは何事かとマスターを抱き起こし、それを目にした。

マスターの身体中に毒々しい色が蜘蛛の巣ように広がり、蝕んでいるようだ。

荒い息づかい、額から大量の脂汗が浮き出ている。

歯を食いしばり、なにかに耐えている様子。

それでもマスターは途切れ途切れに言葉を繋いだ。

「言った、じゃ、ろう、長くないと」

「コレは……永続的に肉体的、精神的に苦しみを与え続ける魔法…

…禁忌指定にされている魔法のはずだぞ！」

禁忌指定魔法、名の通り危険すぎる効力持った魔法、それ故使うことを禁止したもの。

禁忌指定された魔法を使えるのは極一部、国直属の魔法士のみだ。そのことからマスターを疎んじたのは国。

しかしこの世界には三つ国がある、そのどれかしか断定出来ない。

分かったのはそれだけで、あまり詳しくは知らない。

「――兄者、今帰ったぞ」

ドアを開けてガーベラが店内に入る。

手には行くときには持っていたなかった、えらく細長い物を携え。

「ガーベラか！　ちょうどいいところに、マスターを見てくれ、治療魔法が得意なはずだよな」

タフガイは急かすようにガーベラをマスターの近くに來させる。

タフガイの弟、ガーベラはあらゆる魔法行使が天才的だ、だから治療可能だろうと考えた、例え禁忌指定の魔法だろうと。

しかし現実は無情で非情で悪辣。

体に張り付く蜘蛛の巣、それを見たガーベラは悔しそうに、言った。

「……残念だが、私には無理だ。この魔法は大掛かりな設備、優秀な人材が十数人で初めて解除“出来るかもしれない”」

「んなモン、やってみねえと分からねえじゃねえか！」

「無理だ、かえって悪化させる」

「なに？——まさか！」

「そうだ、そのまさか。マスター殿に掛けられた魔法は『永獄』だ」

永い地獄と書いて永獄、対象の人物に、まさに地獄と呼ぶに相応しい痛みを死ぬまで与え続ける。

禁忌指定された魔法の中でも最悪で最凶。

使えば“必ず”相手も死に、使った本人も死ぬ。

へたに治癒魔法を使おうなら、それを糧に症状を悪化させる外道魔法だ。

そして『永獄』の一番の脅威は生きること諦めたら死ぬ、ということだ。

無論痛いのは誰だって嫌、直ぐ様諦める、それが計り知れない痛みなら尚更だ。

だがマスターは生きること諦めなかった、それは何故か？

当然、あの時の恩、それだけのこと。

強靱な精神力で肉体的な激痛、精神的な鬼痛を抑え込む。

刹那的も途切れない肉体に走る痛み、日々夢で見る自分が惨たらしく殺される精神的な痛み。

耐え続けた、長い永い時間耐え続けた。

レイヴンとマスターはなにやら小さな声で話している、暢気に。

「分かった、最善を尽くす、とでも言っておこう」

軽い調子で、今現在の状況には似つかわしくない。

「なに暢気に話してんだ！？レイヴン！」

その、あまりにも危機感を感じさせない態度に苛立ちを露にするタフガイ。

ガーベラも鋭い視線を向けていた。

小指で耳を掘り、五月蠅いといっている様子がありありと伝わる。

「抗ってどうする？」

レイヴンはそう言った。

まるで、マスターはここで死なすと言っているようで。

「なに！？」

それを当然の如く、受け入れているマスターに苛立ち。

当然の如く言っているレイヴンに苛立ちをぶつける。

タフガイにとってマスター…デスドライバーは英雄のような存在だ。子供の頃にデスドライバーの武勇伝を聞かされて育ち、その強さに憧れた。

そんな何者も寄せ付けない強さを持った存在が、目の前で死ぬ？

人生の目標にしていた人が？

ふざけるな！

目の前のクソ野郎を殴り付ける、鈍い音が鳴り響き、壁がレイヴンをキャッチ。

十分に理解している自分勝手なエゴだと。尊敬している人が目の前で逝く、耐えられない。

「いつてねえな、ファツキン」

ペツと唾液混じりの血を吐き出す。

殴られた頬を優しくなで、壁に背もたれる。

「……………もう、ワシは……………限界、ここまで……………粘ったが……………。生き続けて、良かった……………意思を、引き継いで、くれる……………存在に、会えて……………」

目は閉じかけ、うわ言のようにマスターが。

そのうわ言に嬉々の色が含まれていた。

もう長くないのは誰の目から見ても明白。

「クソツタレ！ 生きろ、って言い返せねえじゃねえか！」

嘆くタフガイ、ガーベラは悲しそうに目を伏せる。

「まあ、安心して逝ってくれ。出来る限りはやる、無理だった時は……………すまん」

目の前で瀕死体の人物がいるのにも関わらずに、顔に手を合わせ、すまんと軽い調子で謝る。

「……そこは……断言するところ……じゃろう、に」

死体に半身を突っ込んでいるマスターは呆れた様子でそう言った。

「湿っぽいのは苦手だ、明るく逝こうぜ」

不謹慎極まりない、哀悼の意も送らないレイヴン。

「だが安心して構わない、やり遂げてみせるからな、この俺が。出来なくとも無理矢理出来させる、それだけの話だ、これがな」

先の言葉を否定する発言。

レイヴンの言葉が意外だったのか閉じかけた目を少し開き、そして笑った、安心したかのように安らかな笑みで、目を閉じた。

「この俺が、な……」

マスターの遺体は塵となり空に舞った。

原因は恐らく『永獄』の影響、肉体を完全に消滅させたと思われる。レイヴン達は、マスターの店を畳んだ、主の居ない店内はひっそり寂しい。

「ああ、憧れた人が、尊敬すべき人が逝っちまったなあ」

少し鼻声でタフガイが悲しんだ。

「それにしても、マスター殿があのだスドライバー殿だったとは、もっと話しておけばよかった」

先ほどマスターの正体を知らされたガーベラは後悔したように言う。

レイヴンは自分の持つ煙草を一本、火をつけ線香代わりに。

「で、どうする？」

「なんの話だ」

「俺、予定が入っちゃったが、お前らはどうする？」

ワレル族の真相、旅の目標が出来た。

「私はレイヴン殿についていこう。私も気になる、ワレル族についてだな」

「……レイヴン、お前は実力はあるが経験がない。そこでこの“お兄さん”が指導してやろう、感謝しろよ」

ガーベラは純粹な疑問から、タフガイは表面上の口実。自らが尊敬する人物の手助けになりたいと思っていた、だから意思を継いだレイヴンについていくからとに。

「ソイツは助かる、ナイフ一本ではキツイからな」

そんなタフガイの心情を知ってか知らずか、素直に礼を言った。

レイヴンの武装はオッサンから貸し一で貰った(?) ナイフのみ。
山賊のナイフは売っぱらった、金の足しにもならなかったが。

既に旅に必要な物の準備は完了、タフガイが所有する馬車に乗り込む。

「んじゃ、行くとするかねえ」

「了解した」

「分かった」

「……もうコーヒーは飲めないのか、残念だ」

その言葉には確かに哀悼が含まれていた。

レイヴンの呟きが聞こえた二人はなにも言わない。

馬を走らせ、街から離れる。

タフガイの馬は賢いらしく、進路修正を必要としない。

ガーベラは結界魔法を使い魔物との遭遇を防ぐ。

出発した時刻は夜すぎ、いろいろ疲れた三人は、各々が寝る態勢に入った。

〈PAN、PAN、PAN〉
『緊急通信』

レイヴンの“頭の中のみ” 戦闘機で鳴るような警告音がけたましく
鳴り響いた。

「な、なんだなんだ!？」

突然、頭に警告音が鳴り響いたらビックリするのも当然のことだ。

〈敵性体接近、数5、12時方向、距離3000〉

レイヴンの目のみ、空間に文字が描かれているのを認めた。
なんのギミックもトリックもない。

「む、どうかしたのか、レイヴン殿」

ガーベラがレイヴンの奇声に反応、すっきりと目を覚めました。
因みにタフガイはイビキをかき、爆睡中。

「変なことを訊くかもしれんが——ここら辺に何か見えるか？」

レイヴンはアイス（覚醒剤）をキメた覚えはない、と思いながらも
ガーベラに質問した。

「いや、何も見えないが。それがどうかしたのか？」

「いや……なんでもない」

やはり幻視か？

〈敵性体尚も接近、距離1500、迎撃せよ〉

文字が更新された。

なんとなく自分の好きなハードSF小説に出てくる戦闘知性体のようだ。

「侍、結界の範囲はまだ広げられるか？」

「ああ、余力はあるそれがどうした」

ガーベラの結界はセンサー機能にもなる。

「範囲を広げてくれ、大至急だ」

確認する、幻視か現実かを。

「分かった」

ガーベラは訝しげに思ったがとりあえず結界の範囲を広げた。

「……反応が5、これは大物だぞ！」

驚愕の表情をうかべる。

〈目標近付く、距離500〉

更新、大分近くまで接近している。

「迎撃するぞ、兄者起きろ！」

レイヴンの目が敵性体を捉えた。

真っ暗な夜にもかかわらず、ハッキリと見えた。

「あれは……いつぞやのドラゴン！」

〈エンゲージ〉

敵はあのドラゴンだった、しかも5体。

6話 老人逝去（後書き）

当初マスターは二度とでてくるとのこないモブキャラA。

即興で考えた設定のせいで出番が増え、最終的に主人公に意思を託すまでになってしまった。

まあ、そのお陰でヒロインへ伏線が立ちましたから、良かったです。

因みにヒロインは結構あとになって登場します。

7話 能力具現（前書き）

いろいろと小説の書き方を模索中。

出す予定ではなかったチート敵を出してしまい、主人公が無能に思えるかも知れませんが、徐々に強くしていきますから、ご安心を。

7話 能力具現

——イレギュラー、確認——

——見せてもらおう、お前の力を——

レイヴン達の遥か遠方に人型が一体。

真の意味でこの世界の“支配者”の一人だ。

総て彼らが管理している、あらゆる事象の総てを。

それを知らずに暢気に暮らす全生命体。

人間、動物、魔物、男、女、家畜、雄、雌、勇者、魔王、エトセトラエトセトラ。

全生命体は知るはずもない、何故ならば彼らは一度たりとも表舞台に現れないのだから。

例外としてその存在を知っているモノは彼らが造り出した機人の一人のみだ。

……いやもう一つだけ例外が存在した。

それは……

「俺がやる、お前らは遊撃に専念しやがれ！」

「了解した、オッサン」

「分かった、兄者」

レイヴンは前回の経験を活かし、ドラゴン攻撃を避け注意を引き付ける。

未だ決定力に欠ける攻撃しか持っていない。

ガーベラから魔法の手ほどきを受けたが、てんで駄目で“一切”使えなかった。

魔法は個人差はあるが誰でも使える、誰でもだ。

どんなに才能がなくとも最低はライターぐらいの火は生み出せた。

だがレイヴンは一切使えなかった。

ガーベラはそれを訝しみ、タフガイは大笑いした。

とりあえずガーベラは異世界人（説明済み）だからとあたりをつけ、一応納得した。

そんなガーベラは現在、一体のドラゴンを切り刻んでいる最中だ。

「必殺！豪快一振り！」

あっさり一体撃破、あと4体。

「……ってオッサンコラッ！テメエ、前回手抜きしていたな！」

タフガイの技発動に前回は3分ほど要していたが、今回は10秒足らず。

レイヴンは小型レーザーの網から逃れ、ドラゴンの背中へ。背中ならレーザー発射は不可能だ。

「はて？ なんのことだ」

惚けるタフガイ、大剣『パルヴァライザー』をドラゴンにむけて構えた。

〈警告、3時方向、レーザー〉

「うおっ！——あとで覚えている！」

仲間意識が薄いのか、射線上の味方もろとも大型レーザー発射。レイヴンは即座に離脱で無傷、大型レーザーの直撃を受けたドラゴンは生命活動を停止、残り3。

「氷刃閃！」

ガーベラが日本刀『冬』に氷結魔法を付加、ドラゴンを氷らせ砕く、結構エグい戦い方だ。

因みにガーベラはタフガイの一撃必殺戦法とは違い、数重視の切り刻む戦いに主点を置いている。

「砕けて果てろ」

氷らせた箇所が一斉爆破、四肢が千切れ、明後日の方向へ飛んでいく。

四肢と爆風でやられた翼から勢いよく大量の出血、血溜まりがドラゴンを中心に広がっていく。
残り2。

「氷影刀・凶牙」

ガーベラは既に次の行動に移っていた。

魔力で作られた馬鹿デカイ氷刃を造り出した。

近くで大型レーザーのチャージに勤しむドラゴンの胴体に向けて射出、深く突き刺さる、それを爆散させる。

内部から駆け巡る、爆発のエネルギーが、ドラゴンの内臓機関をメチャクチャにして絶命に至らせる。

「ラスト1体だぞ、兄者」

「んじゃ、俺もらい！」

タフガイは大剣に魔力を充填、切れ味と質量を増大させる。

「豪殺！」

タフガイは大剣を肩で担ぎ、肉体強化魔法で足を強化、地を蹴りあげ空高く舞う。

「全壊一振り！」

大剣を両手で握りなおし、体重、大剣の重量で加速的に降下する。

そして自身の間合いに到達と同時に振り下ろす。

大地を割るかのようなその攻撃はドラゴンの装甲を容易く切り裂いた。

血しぶきを舞わせ、その鮮血は月光に反射した。

〈敵性体全滅確認、コンプリートミッション〉

「よしオッサン、そこから動くな、ぶん殴ってやるから！」

レイヴンはタフガイの元へ一直線、走りながら軋む音が聴こえるほど拳を握りしめる。

前回のドラゴン戦、ファッキンペテン野郎が手抜きしたお陰で要らない怪我をしたお礼参りだ。

どういう思惑で手抜きしたかは知らないが、一発ぶん殴ってやらないと気がすまない、とレイヴンは思った。

「ハッ、それは出来ねえ相談だ！」

大剣をペンダントに戻し、自然体に構える、カウンター狙いだ。

〈警告、敵性体出現、生体特定――機人、数1、距離――4秒後に到達〉

「なに？」

殴り掛かろうとしたところで、警告音がまた鳴り響く、レイヴンの頭に。

タフガイは、いきなり立ち止まり視線を少し下に這わせるレイヴンの行動に疑問符を浮かべる。

ガーベラは、自身が広範囲に張っている結界魔法行使が唐突に作用しなくなり驚愕の表情をした。

文字を読み取り終わるころには“ソイツ”が現れていた。

赤と黒のツートンカラー、前のめりな頭部に縦に二重線のカメラアイ。

中量的な体軀をしていて、まさしくその姿はロボットだ。

ソイツは宙に滞空していた、視線をレイヴンに固定したまま。

「兄者、レイヴン殿、気を付けろ！ 奴は機人だ！」

警戒心を露にガーベラが。

「なに！？」

「何をそんなに驚いてんだ？ 先ほどのドラゴンと強さはあまり変わらないのだろう」

ガーベラとタフガイが驚くのも、レイヴンがそう言うのも仕方がなかった。

「……レイヴン、言い忘れていたが、さっきのドラゴンと機人には決定的に違うものがある」

機人の脅威について説明不足、滅多に姿を現さない奴らに出くわすことも無いと思っていたからだ。

「機人にはある能力が備わっている」

赤と黒の機人は滞空したまま、品定めするかのような目線をレイヴンに送り続けていた。

その視線を受けているレイヴンは苛立った。

見知らない、顔も知らない奴から品定めされる目を向けられるのを好き好む奴なんて居ない。

「勿体ぶるな」

品定めする視線を真っ向から睨み返してやる。

レイヴンはなんの力を持っていないが、それが相手の行動を許容させる理由にはならない。

「機人が発する緑色の粒子は一時的に魔力を消滅させる、それが広範囲にだ。今の私達は武器を持っただけの存在、奴らに言わせれば雑魚なのだ、私達は」

「それが機人が無敵と謳われる理由だ」

タフガイ、ガーベラ両名とも武器に魔力を込めて切れ味、破壊力、属性を付加したことにより、あのドラゴンを撃破出来た。

しかし魔法なしでは、容易く撃破していたドラゴンが難敵に鞍替え。一体を殺傷するのにかなり時間が掛かる。

もしかすれば、生命の危機に陥るかもしれない、それほど魔法に頼っているのだ、この世界の住民は。

もしかすれば、生命の危機に陥るかもしれない、それほど魔法に頼っているのだ、この世界の住民は。

「なんだ、たったそれだけのことか」

「それだけって、馬鹿なのか、お前」

「装甲は無限ではない、微々たるダメージだろうと、与え続ければいつかは砕ける」

余裕綽々、いつでもかかってこいと言わんばかりに滞空し続ける、

機人。

「無敵だから諦めるのか？ 諦めてなんになる、奴が見逃してくれるとでも？」

その余裕が気に食わなかったが、冷静に心を落ち着かせる。

「何もせず死ぬよりもやって死ぬ方が断然いいに決まっている」

マスターに対しても言い訳になるだろうしな、と付け加える。

「……阿呆まるだしの考え方だ、だが面白い考え方でもある」

「確かに。よし、やってやろうじゃねえか！」

二人は絶望の一步手前だった固い表情を緩ませ、その顔にやる気が満ちていた。

己の武器を握りなおし、弾かれたように散開。

機人は右手に持つ独特な形状をしたレーザーライフルを発砲、中るか中らないか程度に加減して。

そのレーザーは、ドラゴンが吐き出した大型レーザーよりも遥かに威力が高く、タイムラグが殆ど存在していない。

狙われたのはレイヴン、足を全開に働かせ、難を逃れる。

レーザーの着弾地点はガラスに似た性質が大規模に表れた。

「中ったら焦げ焦げのローストチキンだな」

レイヴンは軽口を叩くが、多量に冷や汗をかいていた。

「オラッ！」

タフガイがその内に接近、大剣を渾身の力で振るう。

だが突如として、機人は全身に球体状の緑色の壁を展開、大剣はそれに阻まれる。

薄っぺらい緑色の壁にぶつとい大剣が進行を止められた、なかなかシユールな光景だ。

機人はレイヴンに照準を合わせ続け、まったく意に介さない。

レーザーライフルを連続発射、避けれる程度に加減をしている。

そのため、レイヴンはまだ被弾ゼロだ。

地面には着弾の度にガラスの性質が出来、月明かりに照らされ輝く。

その間にもタフガイ、ガーベラがダメージを与えるべく奮闘するが、件の緑色のバリアが鉄壁を発揮、バリアを突破出来ない。

↑—————↓

「なに、ソイツは本当か!？」

逃げ回るレイヴンが、打開策でも見付けたかのように言う。

それに反応した機人、右肩の六連装ミサイルランチャー起動、目標指定…レイヴン、タイムラグがなくロック終了、発射。

ロケットモーターがうねりをあげて作動、超加速、ミサイルが音速突破、レイヴンに殺到した。

今回は手加減されていない、追尾機能があるミサイル、避けても追っかけられる。

回避手段は射程外まで逃げ切るか、物にぶつけて信管を作動させて爆発、これらのどちらかだ。

前者は人間の足では音速で飛来する物から逃れられない。

出来る確率が高いのは後者、しかし壁などぶつけさせれそうな物が存在していない。

↑—————↓

「構わん、やれ！」

レイヴンは足を止めた、諦めたわけでは無さそうだが、無謀すぎる。

——ミサイル飛来、着弾間近。

「おい！ なにをしている、避ける！ レイヴン！」

「駄目だ、もう間に合わない」

誰とも分らないぐちゃぐちゃなレイヴンの体、タフガイとガーベラはそれを幻視した。

ミサイル破裂、爆煙でレイヴンの姿が隠れた。

「あつぶねえっ！」

なんとも間抜けな声が聴こえ、爆煙が晴れば、そこにはほぼ無傷のレイヴン。

右手には先ほどまで持っていなかったアサルトライフル『マーヴ』。

銃身下部に鋭角なデザインの実体剣、突き刺し切り裂き、どちらの用途にも使える。

「……なんだ、それは？」

「説明はあとだ。――行くぞ、“ウィンド”」

〈私の別呼称と推測、回答を求む〉

「ああそうだ、今名付けた、俺が名付けた。お前は今日からウィンドだ」

端から見れば、独り言のオンパレード、残念な人を見るかのような視線をタフガイとガーベラは無意識に投げ掛けていた。

マーヴの銃口を機人に向け、高速発砲。

銃身に取り付けられた衝撃打消機構により射線のブレがまったく言っていないほど、ない。

機人は回避行動に移り、着弾ゼロ。

〈未来予測、到達予定地点割り出し、E-4へRDY GUN〉
「そこか！」

ウィンドが機人の行動を高速で予測、レイヴンに教える。

予測が的中、バリアに阻まれる。

〈エネルギーチャージ確認、回避せよ〉
「あらよっと！」

お返しのレーザーを受け取り拒否、更にマールヴを発砲。

ウィンドの補助FCS（火器管制システム）の恩恵で格段に命中力が上がる。

だが幾ら命中しても、バリアを突破出来ない。

〈敵機人、部分的にバリア出力低下、地点座標――22…3〉
「いい加減、くたばれ！」

レイヴンは機人の胴体部分に向け発砲。

雷鳴の如き銃声が轟き、射出された無数の弾丸がバリアを食い潰そうと接触した。

〈バリア消滅を確認、モーションパターン1を推奨〉

機人のバリアが雲散霧消、緑色の粒子が煌めきながら散った。

モーションパターン1のイメージがレイヴンの頭に流れる。

「許可する」

〈特殊機能、物質構築作動、足場生成〉

ウィンドが作り出した足場を踏み越え、機人の元へ。

無論、それを許すほど手加減をしない機人はレーザーライフル、ミサイルランチャー、グレネードキャノンを一斉射。

レイヴンはレーザーとグレネードを避け、ミサイルは次々撃ち落とす。

普通は至難の技だが、今のレイヴンは動体視力、判断力が強化され、

容易く撃ち落とすことが可能となった。

ミサイルの破片がレイヴンに襲いかかるが、それを意に介さない。

〈提案、ランチャー部へRDY GUN〉

「ソイツは良い提案だ!」

空中を跳ねるように飛び回り、機人の攻撃を避ける。

その間にミサイルランチャーに照準を合わせ、発砲。

ランチャーの中のミサイルに着弾、連鎖的にミサイルが爆発、機人は大きく態勢を崩して無防備な姿を晒す。

最大のチャンスだ。

「マ―ヴ!」

機人へ急速接近、マ―ヴを突き刺す。

胴体部分に突き刺さり、そのままトリガーを引く。

零距离射撃を敢行、手加減なんて甘いことはしない。

機人は全然本気で攻撃してこなかった、その気になれば瞬く間にレイヴン達を殲滅出来る。

この攻撃にしくじり、機人が本気になれば容易く負ける。

だからこの一撃は手加減をしない。

たらふく弾丸を機人にブチ込んだあと、マ―ヴを引き抜き離脱する。

機人の胴体部分、すなわちマ―ヴが突き刺さった箇所からは火花が散り、そのためか動きが鈍い。

「――敵機人、再生を開始」

「そんなモノまでついているのか!？」

だが。

まるで予定の内だと言いたげに、装甲を直していく。

ビデオの逆再生のように、みるみる内に装甲は直り、瞬きより短い時間で再生を終了させた。

「イレギュラー、お前の力を見せてもらった」

徹底して無口を貫いてきた機人が口を開いた。

若い男の声だが、平坦で無機質、感情がまったく灯っていない声だ。

「イレギュラー?」

レイヴンはこの世界に来訪してまだ一週間も経過していない。

だからイレギュラー呼ばわりされる筋合いはない。

「コンプリートミッション、RTB」

淡々とした口調で言う、機人。

機人から吸収音が鳴り爆発的加速力で、来た時と同じように超音速で去っていた。

「……機人……か」

レイヴンは嘆息した。

手加減され尚且つ見逃されたことは腹立たしいが、命あつての物種。

なによりマスターのこともある、まだ死ぬわけにはいけない。

「理解したか？」

「ああ、嫌と言うほど理解した」

「二度と戦いたくないものだな、まだ生きているのが不思議なくらいだぞ」

疲れたようにガーベラが。

「「激しく同意する」」

うんうんと頷き同意を示す、タフガイ、レイヴン。

いつの間にか、夜を超えていた。

東の空に明るみが、レイヴン達の夜間戦闘の終わりを表しているかのようだ。

8話 状況確認（前書き）

野郎ばかりではいかなものかと思い、女性キャラ投入。
そしてストーリーが進まない、早くヒロイン出したい。

8話 状況確認

「んじゃ、説明してもらおうか」

機人との戦闘後、どっと疲れが込み上げた三人は、とりあえず馬車に戻った。

小休憩をとり、気休め程度に疲れを癒したあと、タフガイはレイヴンに説明を要求。

「侍にも言ったことだが――ここあたりに俺は文字が見えるんだ、アンタらは見えるか？」

レイヴンは手で文字の現れる場所を示した。

「見えんな、幻覚の類いではないのか」

「私もそう思った、だが違うらしいな」

「ああ、そうだ」

レイヴンはそれから口を閉ざし、腕を組んで黙る。なにかを考えているようだ。

「……………説明は？」

大分経ってからタフガイが催促した。

「それ以外はよく知らん」

キッパリと事も無げに言い放った。
予想外の答えに固まる、二人。

「は？」

「いやな、なにを言っても、〈質問の意味不明。再入力せよ〉しか
言わねえんだ。困った困った」

ハッハッハッと苦笑いのような、高笑いのような笑いをするレイヴ
ン。

困ってるようには見えない。

「本当にそれだけしか分かってないのか、レイヴン殿」

「ああ」

ガツクリと項垂れる、ガーベラ。

そうキッパリと肯定しないでくれ、とガーベラは思った。

「そんなあやふやな存在をどう信じればいいのだ」

「――『マーヴ』、コイツでどうだ」

大きな銃剣付きアサルトライフルを右手に具現化させる。

ちょうど、タフガイが大剣をしまうペンダントのような感じだ。

「その武器について分かっているのは？」

「突いて斬って撃って、あとは……そうだな……反動がないな、驚
くほどに」

他は？という顔をするタフガイ。

「名前は知っているな、名付け親が俺だからな。名前はウィンドって言う。ほらあいさつしろ、ウィンド」

「レイヴン、現在私は貴方以外にコミュニケーション手段を持っていない、故に不可能」

「ああ、そうだったな、忘れていた」

「お前、よくあの戦闘中に……ウィンドって言ったか、その存在を信じられたな」

もし幻覚かなにかだった場合、レイヴンは今頃、野性動物の餌になっていた。

「まあな、俺も不思議に思う。恐らく、あの危機を脱するのに必死だった、だから形振り構わなかった、例えそれが幻覚だろうともな」

だからウィンドの存在を認め、ある提案を許可はした。

ある提案は『マーズ』を具現化、それを使いミサイルを撃ち落とせ、という内容だ。

「まあ、いい。戦力アップは喜ばしい限りだ、だがなレイヴン」

真剣な顔つきをするタフガイ。

「見誤るなよ、力の使い方を」

「……似合わないな、オッサン」

「うるせえ、茶化すな」

ゴホンとワザとらしい咳払いをする。

「いいか、制御出来ない力はただの暴力、暴力は殺戮を生む、それだけは忘れるな」

「十分に理解している、精々そうならないように気を付けるとしよう」

レイヴンは肩を竦めながらそう言った。

「――ところで、レイヴン殿」

黙って耳を傾けていたガーベラが思い付いたかのように言う。

「なんだ、侍」

「これからどうするのだ？　まだ行く当ては決めていないが」

「……そうだな、マスターの手記にはおおよそのワレル族について書かれていた。これに書かれている内容を確認してから決めるとするか」

「分かった」

マスターの店を畳んだ時に見付けた手記を取り出し見せる。
人の手記を勝手に見るというのは悪いことだが、一応マスターが逝く前に許可は得ている。

手記には乱雑にワレル族の情報がこう書かれていた。

比較的平和主義者が大半を占め、滅多に攻撃を自分からはしない。魔法を自衛に使ったりはするが、それ以外は自然のために使う。

「この自然のために使うってなんだ？」

疑問を口にする、レイヴン。

「恐らく植物でも生やしている、そう考えるのが普通だぞ」

「自然大好きワレル族、世間一般の常識にケンカ売っているな」

「まあ、いいか。続ける――」

ワレル族は一カ所の場所には留まらず、各地を転々とする。

森の奥深くに現れることが多い、と言われている。

「森の奥深くとは、そんな自然が好きなのかねえ、はたまたヒツキ
ーか？」

「知らん」

どうでもいいことを言うな、そんな意味が含まれている。
ガーベラは結構毒舌のようだ。

「レイヴン、ガーベラが冷たい。お兄さん悲しいよ」

「知るか、次行くぞ」

ワレル族Ⅱ悪、この公式を進んで広めているのが、カノープス王国。

「カノープス王国とは、侍先生、説明を」

「ふっ、しょうがない生徒だな」

妙齡美人の見惚れそうな微笑でそう言った、存外ノリが良いのかもしれない。

「カノープス王国とは、この世界の大半を領地に行っている最大の国だ。いろいろと黒い噂が絶えないことで有名だ」

人体実験、目障りな存在を誘拐、誘拐した者を洗脳、邪魔な存在を殺戮、エトセトラ。

「もしやマスターに『永獄』をかけたのはカノープスの連中か」

ワレル族について嗅ぎ回っていたマスターが目障りになった、だが相手は伝説の存在、ならばと禁忌指定魔法を使い排除した、こんな筋書きか。

「そう考えるのが妥当だぞ」

「なるほどな」

カノープス王国は怪しいな、と思ったレイヴン。尤も一概に決めつけるわけではないが。

「なあ、いきなり俺の扱いが酷くなっていないか？」

二人に適当な扱いを受けたタフガイ、何気に傷付きやすい性格のようだ。

「「気のせいだ」」

「――まあ、だいたいこんなモノだろう」

「で、どうするよ、カノープス王国を相手にするのは分が悪すぎる」

「……フムン、経験を積むか」

「はぁ？ なに言ってるんだ、テメエは」

レイヴンの唐突な話題展開に、タフガイは疑問を口にした。

「俺には新しく力が出来た、だからその力を使いこなす訓練をせねばならん、というわけだ」

「確かに一理ある、私ももっと経験を積みまねばな、魔法に頼りすぎずにな」

ガーベラは賛成した、先ほどの機人戦で魔法に頼りすぎていたのを痛感させられた。

「時間は掛かりそうだが、やる価値はあるな。ギルドで依頼でも受ければいいだろう、経験も積めて、金も貯めて、魔物も減少して、人から感謝される、一石四鳥じゃねえか」

ハッハッハッと豪快に笑う、タフガイ。

「そういや、オッサン。アンタ、家族のために金貯めていると言っていたが。いいのか、こんなところでチンタラやっついて」

「ああ、それが結構貯めているから問題なし」

「そうか、ならいい。まあ、戦力ダウンは勘弁してもらいたいものだからな」

また機人と戦うことになれば、少しでも戦力が多い方が断然いい。

「じゃあ、侍も家族のために戦っているのか？」

「そんなところだ」

へえー、ご苦労なことで、俺には理解できない、とレイヴンは思った。

「んじゃ、ここから近い街で早速依頼を受けるか」

「何時間ほど掛かる？」

「だいたい4時間だ、それまで寝といってもいいぞ。なんせ俺の馬は優秀だ、勝手に目的地に行ってくれる」

タフガイはその場に寝転がった、直ぐにイビキが聴こえ始める。

「では私も、睡眠不足は健康に悪い」

ガーベラはそう言って、壁になしかかり腕を組んで、座ったまま寝る。

「ウィンド、周囲の警戒を頼む」
〈了解、よい眠りを〉

機人との戦い、三人は肉体的にも精神的にも疲れ果てていた。だが謎が残る、何故俺をイレギュラーと呼んだのか、殺さず見逃したのか。

後者は、力を見せてもらった、という機人の発言から予想がつく。俺の力をはかった、だから死なないように手加減もした。

しかし分からないのが前者、俺がイレギュラー呼ばわりされる理由は持ち合わせていない、とレイヴンは眠りにつく直前まで考えた。

魔物の襲撃もなにもなく、無事に街についた。

時刻は昼頃、ギルドに行く前に食事を摂ることにした、三人。

「つーわけで、ビビツときたこの店に決定」

タフガイが独断で店を決めた。

他二人の反応は、

「……兄者、本気か？」

「可哀想そうに老眼鏡が必要な目になったのか」

ガーベラは頬をひきつらせる、レイヴンはやっぱり失礼なことをの

たまった。

「老眼鏡が必要な年じゃねえ！　まだ25だ、ぴっちぴちの年だ！」

レイヴンの言葉にタフガイを憤りを露にした。

「ハッ」

それをレイヴンは鼻で笑った。

「て、テメエ……そうかそうか、このお兄さんとそんなにケンカがしたいのか、なるほどなるほど……ブッ潰す！」

ストリートファイトが始まった。

タフガイが先制、右上段蹴り。

身を引いてそれをかわす、レイヴン。

「あつりえねえだろうが！　なんだこの店、倒壊秒読みじゃねえか！」

件の店は、ボロボロでいつ倒壊してもいいくらいボロい。

「うっせえ！　ビビッときてしまったから仕方ねえじゃねえか！」

レイヴンはヒット&アウェイで、タフガイは一撃必殺な攻撃を繰り返す。

かわしては殴り、避けては殴り、殴られれば殴り返す。

ガーベラは静観に徹する、ちょうど武術の試合を見る感じだ。

「騒々しいわね」

ボロい店から人が、従業員か店の主のどちら。

ケンカの真っ最中だった二人は、その声でケンカを中断した。

（ムッチャボインやんけ！）

（メッチャ美尻やんか！）

店の従業員らしき人物を見た二人の反応は、上がレイヴン、下がタフガイ、二人とも口調が変わっている。

「——というか、リザ!？」

リザ、オッサンが以前言っていた妻のことか、まったく信じてないが、とレイヴン。

「あら、オールド、こんなところでなにしているの？」

オールド、察するにタフガイの本名。

太陽光に反射して煌めく金髪、エメラルドのような優しげな瞳、顔立ちもよく、大変悩ましい体をしている。

「リザこそなにやってんだ!？　こんなところで？」

「なに、って店の経営よ」

ウインクつきでリザがそう言った。

そのウインクにあてられたタフガイと通行人数名はハートをライフで射殺される。

レイヴンは眼福眼福と呟いた。

「久しいですな、リザ殿」

「あら、ベラちゃん」

ベラちゃんはガーベラのあだ名だ。

「……その呼び方は勘弁して」

げんなりとガーベラはあだ名の使用停止をリザに求めた。

「ふふっ、だめよ」

ガーベラの要求を笑顔で却下した。

「ベラちゃん、そちらの人は？」

リザはレイヴンの存在に気付き、ハートをやられて使い物にならないタフガイに変わりガーベラに訊いた。

「ああ、この人の名前は「レイヴンと申す者、以後よろしくでござる」——どちら様？」

あからさまに意図して作られた口調に、ガーベラは怪訝な表情をした。

「ジョークジョーク、こ洒落たジョークって奴だ。――先も言った通りレイヴンだ、オッサンたちの旅の同行にしている者だ」

レイヴンは手を差し出す、握手のサイン。

「あら、そうなの」

リザは握手に応える。

「でもオールドをあまりオッサンとか呼ばないでね、傷付きやすい人だから」

握手に応えたまま、リザは注意する。

「善処する」

やらない人の常套句をレイヴンは発する。

「お願いね」

レイヴンは自分の手に異常を感じた、骨が粉碎されていくかのような痛みがレイヴンの脳へ直接配達にくる。

「いだだだだっ!!」

〈警告、目の前の人物より120kg程度の握力を感知、即座に離脱せよ〉

痛みの原因はリザ、そのか細い腕からは予想できない握力でレイヴンの手を粉碎しようとした。

「お願いね♪」

「あ、ああ」

リザの笑顔が般若か悪鬼羅刹に見えた、とレイヴンは思った。

（愛されているな、オッサン、羨ましいな畜生！）

レイヴンは握り潰されかけた手を振るう、痛みを飛ばすかのように。

回復したタフガイがレイヴンに近付き、一言。

「ざまあ」

「よし、食前の運動といこうか」

痛みで歪ませていた顔を無表情にする、レイヴン。
無表情の冷たい仮面の下に憤怒の熱が隠れていた。

「俺の新必殺技！ タマキン・クラッシュ！」

今度はレイヴンが先制。

技名通り、タフガイの股に向け、足を蹴り上げる。

「っあぶな！ テメエ、それ卑怯だろうが！」

「生憎と合理主義者だ、男に効果的ダメージを与えるのは、これしかない！」

タマキン・クラッシュ。

返しタマキン・クラッシュ。

返し返しタマキン・クラッシュ。

返し返し返しタマキン・クラッシュ。

相手の股を蹴り上げようとしてはかわされ、お返しに股を蹴りあげられそうになる、それを繰り返す、レイヴンとタフガイ。

いつの間にか、通行人が立ち止まり、そのシユールな光景を暇つぶしに見学していた。

シユールといっても無駄にハイレベルな戦いだ。

相手の攻撃をかわしてはカウンター、これらを高速で演じている。

「こんなことは毎回あるの、ベラちゃん」

「……ハア、いつもの光景ですよ」

一応ガーベラは男（女顔で美人だが）でいい大人だ、ちゃん付けで呼ばれるのは流石に憚れる。

しかしこの人は改めそうにない、と思ったらため息を吐いた。

「あら、ため息を吐くなんて、何かあったの？ お姉さん相談のるわよ」

貴方のせい、なんて言えるわけもなく、首を振り心配ないと返す。

今日もいつも通りの日常が流れる。

「ファッキン・タマキン・デストロイ・オーバード・クラッシュ！」

「なんか、凄そう！」

8話 状況確認（後書き）

感想をお待ちしております。

9話 鴛鴦夫婦

目の前に食欲を促す香り、尚且つ彩りがある、チキンブロス。スプーンでそれをすくい、口に含む。

「――コイツは凄いな、まさに絶品というやつだ」

レイヴンは出された料理の感想を無意識に言う、それほど美味かった。

タフガイとの命を賭けた、急所潰しを痛み分けて終えたあと、とりあえず昼飯を件のボロい店で食すことに。

「にしても、なんでこんなところに来たんだ？ 道中危険だろうに」

タフガイは料理に舌鼓を打ちながら、疑問を口にした。

「オルドがなかなか帰ってこないからよ。一人で寂しいから追ってきたのよ」

悲しげな表情をする、リザ。

「ソイツはすまねえな」

タフガイはリザの肩を引き寄せ、その華奢な体を抱く。

そして耳元でなにかを囁く、それを聞いたリザは嬉しそうに身を振るわせる、愛を囁かれたのだろう。

おしどり夫婦がイチヤイチヤし始めた、居心地が悪い、ガーベラと

レイヴンが内心で思った。

非所帯体の二人にできるのは自分を殺し、空気と同化することだけ。

イチャイチャは食事が終わっても尚続いた、神経をヤスリで削られた気分だ。

「つーわけで、リザが参入することになった」

軽い調子でタフガイが言う。

因みにリザが経営していた店は畳まれた、リザは一時的にこの場所に留まりオルドの行方を捜しているところに偶然にも出会ったというわけだ。

これが噂に聞く夫婦愛というやつなのだろう。

（（じよ、冗談じゃ…））

毎日、二人のイチャイチャを見せられ神経を削られるのは勘弁願いたい、と思った非所帯体。

「よろしくね」

ニツコリ微笑む、リザ。

「オッ——」

レイヴンはどういふことだ、とタフガイに声を掛ける。
そしてオッサンと言いかけたところで、リザの目が怪しく光るのを
横目で感知したレイヴン。

また骨を粉碎されかけるのは真っ平ごめんだ。

「――ルド」

そのため即座に訂正した、オールドと変な感じになったが。

「珍しいな、お前が名前で呼ぶなんて――なるほど、そういうこと
か」

タフガイ――いや、オールドは不思議そうにしていたが、レイヴンの
アイコンタクトで理解した模様。

「お前から名前で呼ばれると……なんか鳥肌が立つな、だからお兄
さんと呼べ」

「まだこだわるか、オッサン。若くありたいのはいいい心がけだが、
見た目が既に――それではな」

呆れた声音でレイヴンがオールドをたしなめる。

「それに、俺がオッサン、アンタをお兄さんと呼ぶのが一番鳥肌が
立つ話と思うがな」

確かにとオールドも同意した。

しかしそんなことはどうでもいい。

「危険が伴う旅だ、下手したら命、一国に反逆するかもしれん旅に連れていくのは止めていた方がいい」

諭す口調でオルドとリザに言う。

自分の目的のために、どちらか片方がもし死んで悲しみに暮れる姿を見せつけられたら夢見が悪い、とレイヴンは言葉に潜ませる。

尤も面倒なだけかもしれないが、悲しみの捌け口として怨念をぶつけられるのが。

まあ、二人に限ってそれはないと思う。

抜けたら抜けたでガイドに困るけどな。

「フフン、私達夫婦が揃えば最強よ。だから心配には及ばないわ、レイちゃん」

「待て待て待て待て、レイちゃんとは……俺のことか」

あたるな、俺のことじゃない、考えすぎだ、肥大した被害妄想だ、と微かな希望の糸をたどる。

「そうよ」

リザは肯定した、ガーベラとオルドは口をひきつらせる、アレは笑いを堪えている顔だ。

滑稽、そんなに滑稽に映るか、ファツキンどもが。

希望の糸は途切れ断ち切れ、代わりに胸にナイフが深々と刺さったのを実感する、レイヴン。

「頼む、ちゃん付けは勘弁してくれ」

レイヴンは全力で懇願、余程嫌なようだ。

「流石にレイヴンにちゃん付けはどうかと思うぞ、悪役面だし」

「私も似合わないと思うぞ、悪役面だし」

さりげなくけなしも入っているが、レイヴンは援護攻撃ならば構わなかった。

というか理解している、自身が悪役面な顔つきをしていることぐらい。

「ええ、似合ってるじゃないの」

どこがだ、声を大にしてオルド、ガーベラ、レイヴンが揃えて言う。

「妥協してレイならばいいが、ちゃん付けはホント勘弁してくれ」

なんで俺はこんなことを頼んでいるんだ、第一にレイヴンとでも呼んでおけばいいものを。

もしやあれか、夫以外の男は名前で呼びません、とでも言いたいのか、畜生め。

ちゃん付けノーサンクスだ、まったくもって。

「しょうがないわね」

分かってくれたようだ、胸を撫で下ろす。

「じゃあ、レイ君ね」

どうやら甘い考えだった、しっかりと分かってはいなかったようだ。

「……………ハア…それで構わない」

ちゃん付けよりはました、だが君付けも勘弁してもらいたいものだが、いやそれを言えば……。

思考がループに陥る、しかし贅沢をいえばちゃん付けに戻るかもしれないと思い、自身を無理矢理納得させる、それほど君付けも嫌らしい。

「んじゃ行くか」

無事に解決したところにオルドが声をかける。

オルドが先頭、その隣にリザ、後ろにガーベラとレイヴンが並んで歩く、目的地はギルドだ。

レイヴンは疲れた顔をしていた、まだなにも始まってないというのに。

どこことなく剣呑な雰囲気漂う建物、ギルドに到着。

中に足を踏み入れれば、厳つい男、不機嫌そうな奴、殺気を無償で振り撒く女。

今にもケンカが起こりそうな雰囲気、ここでは当たり前前の光景だ。

「んで、どんなやつをやるんだ？」

オルドとガーベラは馴れた様子で、依頼が貼られた掲示板を見やる。リザは初めてか、興味深げに見ていた。

「実戦あるのみだ、それも難易度が高いやつをな」

あの機人と再戦となれば（なるか不明だが）、こちらが負けるのは火を見るよりも明らかだ。

ならば生存率をあげるためには多少の危険もやむ無し、むしろドンとこい。

「それならコイツだ」

オルドは一枚の紙を剥ぎ取る、依頼内容はベヒモス討伐。

〈検索項目…ベヒモス、4メートル程度の身長と強靱な肉体、極端なパワー型。脅威度合い…A〉

「へえー、ウィンドってなんでもありだな」

ウィンドが自動で検索結果を表示。

感心した、とレイヴン。

戦闘補助をしたり、簡易的な未来予測をしたり、魔物情報を持っていたり。

普通ならば疑うところだ、ウィンドとは何者だと。

他者には感知できず、自分だけに感知でき、高性能なスペックを有している。

そして一番に疑うべきことは、ウィンドの実体はどこにあるのか、というわけだ。

霊的存在か又は妖精か、訊いてみたが、いつもの〈質問の意味不明。再入力せよ〉と返すだけ。

俺の味方ならそれでいいかと、レイヴンは探るのを止めた。

「ついでにギルドに登録しとくか？　なにかと便利だろうしな」

ギルド登録を薦めてくるオルド、それをレイヴンは了承した。簡単に手続きを済ませ、ギルドカードと呼ばれる、ギルドの一員を表すモノを貰った。

「オルド、私もする」

リザが頬を膨らませ、拗ねたように言った。
自分だけ仲間外れ（ギルドの一員ではない）なためにヘソを曲げたようだ。

相当愛が強いようだ、オルドと一緒に在りたいというのが。

オルドは苦笑いをした、そのあと書類をリザ用に新しく貰い、渡す。受け取った書類を女性らしい綺麗な字で書き込み、ギルドカードを貰う。

その間に依頼を受付嬢に渡し、受理される。

「オルド、鼻の下伸びてるわよ？」

リザは尖った調子でオルドをたしなめた。

「んな」

ビックリした風に、オールドは間拔けな声をあげた。

ただ単に受付嬢を見ていただけだが、リザにとっては見とれている
と思えた。

存外に嫉妬深い。

「ち、違う、リザの思い違いだ」

困ったようにオールドは弁解をはかるが、リザは拗ねたまま。
あたふたご機嫌とりに勤しむ、オールド。

一方、レイヴン達は、

「じゃ、さっさと行くでしょう」

「わかった」

その二人に見向きもせず、出口のドアに手を掛け、出ていこうとし
た――矢先の出来事。

「よう、姉ちゃん、そんなムサイ野郎より俺と遊ばねっ？」

チャライ男二人組がリザの声を掛ける。

拗ねた顔を一変、困ったようにというか、あからさまに迷惑そうに
表情を歪ませる。

オールドは能面になる、感情を削ぎ落としたようにも思える。

「いいじゃんいいじゃん」

「自分で言うのもなんだが、いい夢みせるぜ」

迷惑そうな顔を者ともせず、に畳み掛ける、二人組。

オルドの無表情に一つだけ灯る、殺意という感情が。

「おい」

触れれば切れる鋭い刃の如き、ドスの利いた声を漏らす。

「あん？ テメエには言ってねえんだよ、黙ってろ」

「あんたのようなムサイオッサンは独り寂しく酒でも呑んでた方がお似合いだ」

リザに対する友好的な態度が変わり、嘲るような口調になった。

二人組はオルドの溢れ出る殺意に気づかない。

周りはその殺意に怯え、恐怖していた。

ある者は怯えきった表情になり、ある者は失神したり、その恐怖が次々に伝染する。

「俺の大切な女に気安く話し掛けるな」

それは警告、これ以上リザを困らせることをすれば潰す、という最終通告。

俺の女発言にリザは嬉しそうにしていた。

「俺の大切な女？ つまらなさすぎるジョークだ」

「テメエなんとか釣り合ねえんだよ!」

最終通告は無駄に終わり、その強烈な殺意気づかない二人組は更にいきがる。

「……そうか」

オールドはまだ若い二人組に近付いた。

「なんだやろうってのか? 言っておくが俺達はAランクだぜ!」

「テメエみてえな脳まで筋肉とは違んだよ!」

Aランクはベテランの実力を有している。

この年でAランクとはなかなか驚きだ。

だがAとSは便宜上は一単位違うだけだが、そのSになれるまでの壁は厚く高く、そしてなによりも険しい。

本来ならばギルド内でのケンカはご法度だが、誰も止める者はいない、というか動けない。

未だ明確な殺意に鈍感な二人組は、剣を抜いた。

「エターナル・エンド!」

「ダークオブダークネス!」

大変イタイ技名で、魔法で属性を付加した剣で切りかかる。

「ふん」

オールドはそれを生身の拳で粉碎される。

「お前らのような小便小僧はもっと実力をつけてから出直してこい」

更にドスの利かせた声で言った。

今更ながら、オールドがかもしだす濃厚な殺意に気付いた二人組は、恐怖で意識を切り離れた。

「行くぞ、リザ」

これだけの殺意に気付かないでよくAランクになれたな、と疑問に思った。

「ふふっ、わかったわ」

頬を緩ませ、弾んだ声でリザが言った。

「なにをそんなに嬉しがつてるんだ？」

自分の腕に組み付くりザに不思議そうに訊いた。

「『俺の大切な女に気安く話し掛けるな』——うん、いい言葉ね」

「ブフッ！」

勢いとはいえ、自身のクサすぎるセリフに吹いた。

そのあまりにも恥ずかしいセリフを発した自己を殴り付けたい衝動に駆られる。

「嬉しかったよ、オールド。愛してる」

リザは万人が見惚れそうな笑顔で、想いをのせた声音で言った。

「――俺もだ、愛してる」

照れくさいのか、頬を掻きながら返答した。

いきなりイチヤイチヤが始まった。

甘い空気が辺りに漂う、空気が砂糖の粒子に変わったかと思うほどに。

一旦その場に留まっていたレイヴン達は、それを見せつけられて、思い立ったかのようにギルドの外に出た。

「侍、少し用事ができた」

「奇遇だな、私もだ」

早足で近くの喫茶店に入り、店の主人に注文する。

「「とびきりに苦いコーヒーを頼む、今すぐ最速でだ」」

9話 鴛鴦夫婦（後書き）

おわかりのとおり、自分は萌えや恋愛系は苦手です。

燃えならば幾分かマシだと思います、そのためこの複合生命体には萌えが薄くなります。

10話 経験取得（前書き）

いろいろと吹っ切れました、今回よりパロディが多々になります。
今回はとあるスタイリッシュアクションから技名、セリフを。

10話 経験取得

イチャイチャが一段落、レイヴン達が居ないのに気が付き、近くの喫茶店で二人の姿を発見。

「なにしてんだ、お前ら」

入店すればコーヒーを一気飲みをするレイヴンとガーベラがおり、変人を見る目付きで、オールドは訊いた。

「アンタらの」

「お陰だぞ」

捨て台詞を吐いたあとに代金を支払い、今度こそベヒモス討伐に向かう。

幸運なことにベヒモス出現場所は近く、数十分で着きそうだと馬車に乗り込み早速現場に行く。

これから殺し合いに向かうというのに馬車の中は和気藹々としていた、主にオールドとリザが。
ガーベラは、その甘い空気に当てられ胸焼けしたかのような表情になる。

〈第一次情報規制を解除〉

レイヴンはウィンドに『マーズ』に関する情報や他に使える武器はないかと訊くと、突如情報が頭に流れ込んできた。

情報という名の荒波に揉まれている気分だ。腕組みをしながら背もたれているレイヴン、一見すれば寝ているように見えるが、よく見ればうつすら額に脂汗をかいていた。

右手武器マーズ、左手武器ムーンライト、第一特殊機能…物質構築、使用方法、使用制約、使用範囲、形態変化可能範囲、第二以降特殊機能概要、複合粒子、複合粒子の機能、役割、生成状況、エトセトラ。

一気に駆け抜ける波、その波はレイヴンの脳みそに大量の情報を刻む、忘れないようにするためだ。

へ——情報流動終了

「……………刺激的な体験をしたぜ、畜生」

悪態をつく、自ら望んだとはいえいきなりアノようなことは、勘弁してくれと内心で呟く。

「起きたか。いいご身分だな、レイヴン殿」

ガーベラの恨みがましい目付きがレイヴンに射し貫く。

兄者夫婦のイチヤイチヤを見せ付けられ、自分は胸焼けに耐えているというのに、この鴉は寝ていやがる。

私もこの領域から逃げたいというのに、この鴉は！

恨みがましい目付きはそう語っていた。

「……すまん」

なんとなく居た堪れなくなり反射的に謝罪。

「まあ、いいさ。――そろそろ着くな、しくじるなよ？」

「了解している、ウインド」

〈スーパースーチー―敵性体確認、距離2000、数13〉

「数13だと？ 事前情報とえらく食い違っているな」

渡された書類には2体と書かれている、食い違いすぎだ。

レイヴンは、その情報を教え、帰ったら報酬の増加交渉をするかとガーベラに訊いてみる。

「そうだな、たんまりとせしめるとしよう」

ガーベラは悪どい顔になる、元がいたためその表情もよく映える。

「さて、と。お二人さん、悪いが仕事の時間だ」

レイヴンはため息を吐き、果物ではい、あゝん（はあと）なんかしている奴らを視線に収める。

ハッキリ言って物凄く話しかけづらい。

だが、それではイカンと意を決し、イチヤイチヤ終了を通達した。

「ファツキン、というやつだな」

したりないのか、不満気にオルドは言った。

「歸りにでもすればいい」

どうでもよさげにレイヴンが返答した。

「それもそうだな。リザ」

用意はいいか？という意味を含ませる。

「オーケーよ。ベラちゃん？」

「ああ、了承した。レイヴン殿、準備は万全だ」

「O k e y . . . I ' m a R o c k ' n r o l l e r ! ! ! 」

イヤッホォー、と奇声をあげ、馬車から飛び出し目標…ベヒモスへ一直線する鴉。

「……突撃ラヴァハアアアトツ！」

次にガーベラが奇声を、普段クールな性格からは考えられない行動だ。

「なにやってんだ、アイツら」

「さあね、なにかしら。というか珍しいわね、ベラちゃんがあんな奇声をあげるなんて」

レイヴンは自身を鼓舞(?)し、ガーベラはイチャイチャを見せ付けられ、溜まった鬱憤晴らしに行動に移した結果がアレだ。

「ま、行くかねえ。ヘマするなよ」

「ふふっ、わかってる。貴方も気を付けてね」

「コイツはやる気のでる声援だな」

オールドはいつも通り、ペンダントから大剣を出現、遠方に見えるベヒモス群に接近する。

先行したレイヴン、ガーベラは戦闘を開始した。

「エアハイク！」

〈物質構築、作動開始〉

空中に足場を形成、上空からベヒモス群の一体にターゲットロック。マーズを連続発射、轟雷の如き銃声を響く。極超音速以上の速度で射出された特殊弾丸は頭部に着弾。

弾丸は、ベヒモスの岩石の如き硬い皮膚を物ともせず貫通、頭部だけ穴空きチーズになった。

頭という中枢を失ったベヒモスは、石像のように突っ立ったままになる。

「おいおい、こんなものなのか」

レイヴンは純粹に疑問に思った、弱すぎだ、と。

機人があまりにも強すぎたために感覚が麻痺したのだ。

「まあ、それも致し方あるまい。所詮はA程度の魔物だ、群れようと弱いことに変わらない」

これでは戦闘訓練にはならんな、とレイヴンは心中で呟く。
雑魚相手に積めれる経験は生き物を殺すという背徳行為に馴れる、
それだけだ。

ガーベラが『冬』を一閃、魔法行使せず、瞬く間にベヒモスが細切れになる。

「魔法使わずとも十分にお強いことで」

「Sランクになれば、この程度常識というやつだぞ」

「へえー、ソイツは凄いな」

気が抜ける会話をしながら、レイヴンは銃撃、ガーベラは接近戦をする。

なかなか息のあったコンビネーション、ベヒモスを順調に葬っていく。

「俺も混ぜろよな」

そこにオールドが飛び入り参加、大剣を使い薙ぎ払う。

「慈愛のお守りはいいのか、戦闘向きではないのだろうか？」

「慈愛？——お得意のあだ名か」

レイヴンが言った慈愛はリザのことを指している。
由来は、見た目が慈愛に満ちた聖母の如き人物だからだ。

「本格的な戦闘は無理だが、そう簡単にやられはせん、なんせ俺の自慢の妻だからな！」

ハッハッハッと豪快に笑う。

「結局ノロケか、ファツキン・シット！」

レイヴンは前進、フォーメーションを変更。

意図を理解したガーベラは後退して援護、レイヴンはマールヴの銃剣で接近戦。

「氷影刀・雪崩」

ガーベラは氷で作られた無数の刃を、名に恥じない勢いでベヒモスに殺到させる。

意図的に残したベヒモスにレイヴンはマールヴを振り上げる。

左腕が宙に舞い、流血を起こした。

「今更だが、俺の身体能力異常じゃないか？　やはり強化かなにかしているのか、ウインド」

「レイヴンの言う通り、戦闘時に身体能力を強化している」

やはりかと心で呟いた。

易々3メートルを飛び上がれるほどのジャンプ力があつたり、岩石の如き皮膚を意に介さずに切り裂くことができたりと、なかなか異常だ。

へいけなかっただろうか？

表示された文字の輝度が若干薄く、少し読みにくい。
なんとなくウインドの感情を表している気がした。

イタズラをした子供が悪いことをしたと自覚し、親に怒られないか
ビクビクしている、そんな光景を幻視したレイヴン。

「……いや、ただ確認したかったただけだ。気にしなくていい」

そう会話しながらも足場を作り、空中を駆ける。

「オラオラオラオラオラッ!!」

ブンブンと大剣を振り回しながら突っ込んでいくオルドを視界の端
で捉える。

3体ほど肉塊に仕上げた。

「ラスト1」

ガーベラが報告。

「俺の獲物だぜええっ!」

「……兄者、張り切りすぎだ」

呆れたようにガーベラが言った。

「ところがどっこい、ってな!」

対抗するようにレイヴンが声をあげる。

〈マーヴ、モード変更——試作レーザーライフル〉

マーヴは複合兵装、実弾兵器からエネルギー兵器まで運用可能。
マーヴのチェンバに装填された弾種を変化、ライフル弾から高エネルギー弾へシフト。

試射とデータ収集を今回行うつもりだ。

「この場面で最も適した決めセリフを使うとするぜ！」

目標とレティクル（照準）が重なる。

〈t a r g e t——L o c k o n〉

「ジャック・ポット！」

禍々しい赤黒い光がベヒモスに突き刺さった。

大きな風穴が空き、背後の風景が丸見えだ。

〈コンプリートミッション〉

ウィンドは周辺をスーパースーチを使用、敵性体がないことを確認したあとに宣言した。

「え、ええ〜」

やる気満々だったのに、それをぶつける相手がいなくなり不完全燃焼なオールドは拗ねた。

拗ねたオールドをリザが慰める、子供か。

「なるほど。威力は結構、タイムラグもそれなり程度か」
〈機人のバリアにはエネルギー兵器は有効、効果的に減衰、貫通が期待できる。次回戦はそれを活用することを推奨する〉

「次回があつてほしくないがな」

ふうと息を吐く、更なる戦力アップは喜ばしい限りだ。
だが、この違和感はなんだ？

頭の隅に引っ掛かるナニカ、コイツは一体なんだ、不愉快極まりない。

いいように実験、観察されている気がした。

「これで終わりだな。――夕陽か、もうこんな時間か」

青空がオレンジ色に変わっていることに気付く、ガーベラ。

レイヴンはとりあえず不愉快の存在を忘れることにした。

「さあて、オッサンに侍に慈愛、帰るぞ。まだ日の光がある内にな」

暗くなったら視界が利かなくなるからな。

「そうだな」

「そうだぜ」

「そうだね」

呼ばれた三人が同時に返事をした。

討伐した証拠としてベヒモスの一部を剥ぎ取り、それを袋に詰め馬車に乗つける。

「因みに訊きたいんだが」

馬車に乗り込み、現在街に帰還途中、一部でイチャイチャな雰囲気
が漂っているがそれを無視してレイヴンが口を開いた。

「あのドラゴン——大小の光線を射出したドラゴンはどの程度の強
さだ？」

ガーベラに視線を向け、そう訊いた。

イチャイチャしているバカどもに意識がいかないようにするための
世間話だ。

「……Sランクの魔物でもあんな強さを持つ個体はあまり居ないな」
考える素振りをしたあとに答える。

「俺の異世界ライフはオープニングからハード、というわけか」

例えるなら、RPGゲームで初期装備で操作方法はわからないとい
うのに中ボス戦。

よく生き残り、死ななかったモノだな、とレイヴン思った。
結構な怪我は負ったが。

道中になにもなく無事に街に着いた。

街に着いて早々、ギルドに行き、たんまりと金をせしめた。

そのあと、リザの店で絶品な夕食を摂り、予約していた宿に泊まる。

おしどり夫婦は万全な“防音”設備がととのった部屋で、ガーベラとレイヴンは個室に宿泊。

レイヴンはベッドに身を投げる。

上等なベッドだった、安物のベッドの方が俺には合っている、と思った。

上等な物だと体が凝って仕方ない。

案外、体に疲労が溜まっていたのか、眠気が勢いよく強襲した。眠気に身を委ねる、意識は切り離された。

11話 渡鴉本性

「いや、昨日はお楽しみだったぜえい」

「お、オールド」

朝の清々しい空間に異物が混入、下ネタという異物が。
発信源はオールド、昨日の夜は夫婦で仲良くしたのだろう。

恥ずかしげにリザはオールドに抗議する。

「こんな朝っぱらからなに言ってるんだ、オッサン」

レイヴンは苦いコーヒーを飲み、その予想以上の苦さに顔を歪ませながら言った。

レイヴンはオールド達より早くから目が覚めていた、他の奴らが起きるまでこうして待っていたのだ。

「なにして、ナニ」

オールドがこれでもかというくらいにドヤ顔をした。
それを聞いたリザは顔を熟れたトマトのように真っ赤にする。

「そのドヤ顔をやめろ。それにオッサン、そこまで上手いことはいってない」

レイヴンは冷ややかなツツコミをいれる。

「な、なに!？」

笑えるほどに狼狽えた、そんなに自信があつたのか。

リザは恥ずかしさに耐えきれずオルドを凶撃、襲撃ポイントは股間。

「……………愛が重いぜえ」

股間を押さえ悶絶中のバカが感慨深げに言った。

もしやそれが言いたいがために、俺に振ってきたのか？
まあ、どうでもいいか。

「おはようだ」

するとガーベラが一階、つまりレイヴン達の居るところに降りてきて、挨拶をした。

「あいよ、おはようさん」

「ベラちゃん、おはよう」

律義に悶絶中のオルドとリザは即座に応え、レイヴンは冷えた水で未だに残る苦味を洗浄したあとに応えた。

「にっしても、ホント苦いな、コイツは」

顔をしかめ、コーヒーを無理矢理飲み干す。

「それで、これからの予定はどうするんだ」

再度、口内を水で洗浄後にオルドに訊いた。

「お前が決める、一応はレイヴンがリーダーだからな」

「なに？」

レイヴンは聞き返した、リーダー？俺がか？

「忘れたのか？ 私達は貴方について行く、といっただろう？」

そうだったな、と返答。

ガーベラは自身の知的好奇心で、オルドはマスターという憧れの人
の役に立ちたいという理由だ。

「えっ、そうなの？」

「……まあ、慈愛は知らなくて当然か」

簡単にオルドが説明、レイヴンはその間にプランを考える。

ついでにウィンドにも演算させた、なんとなく正確なプランを立て
てくれそうだからだ。

「——というわけだ」

説明し終え、一息つく。

「オルド、昔からその人の武勇伝好きだったものね」

過去を懐かしむようにリザは言った。

「まあな、尊敬すべき人だからな。なんたって、マスターは——」

「はいはい、長くなるからまた今度ね。オルド、その人の話すると日が暮れちゃうからね」

「ちょ、そりゃないぜ」

オルドはぼつの悪い顔をして、ぼやいた。

一方、レイヴンは思考を続けていた。

「各地を練り歩き、ワレル族の情報収集、それを行いながらレイヴンは戦闘経験を積む、というプランはどうだろうか？」

「ソイツはいいな」

演算終了、ウィンドは自身の演算結果を表示。

口直し用に、新たに注文したミルクと砂糖が入ったコーヒーを飲み、レイヴンは軽い調子で返事した。

ブラックこそ正しい飲み方、ミルクと砂糖は邪道だというこだわりをレイヴンは持っていない。

「それを採用するか。感謝するぜ、相棒」

「……私が相棒？」

表示された文字は、疑問の他に戸惑いが含まれている気がした。

「そうだ、いやだったか？」

〈構わない〉

即座に文字は更新された。

いつも以上に文字の輝度は明るかった。

文字の輝度によってウィンドの思いを表していると感じるのは幻想だろうか、とレイヴンは内心で呟く。

「レイ君、さっきから独り言、怖いよ」

ウィンドの存在を知らないリザは、端から見て独り言を言っているレイヴンをたしなめた。

確かに事情を知らない者には、今のレイヴンはただの変人に映る。

「独り言ちゃうわ！ ……というか言ってなかったか？」

「？」

首を傾け、なんのことと意思表示。

レイヴンはまた説明か面倒だ、と呟いたあと、簡単に説明した。

「なあ、ウィンド。実体化とかできないのか？」

〈……不明、現段階ではなにも言えない、すまないレイヴン〉

「まあ、しょうがないな」

現段階ではなにも言えない、ならば多少の希望はある、そう信じてこれからも独り言に勤しむかな、畜生が。

「ウィンドちゃん、なんて言ったの」

興味津々な様子でリザが訊いた。

ウィンド“ちゃん”、なぜにちゃん付けだ？、とレイヴンは疑問を口にした。

「なんとなく、女の子ぽいからね。それよりなんて言ったの？」

「現段階ではなにも言えん、だと」

女の子ぽいか、俺はそう思えんがな、機械然としているしな。

「残念ね」

「――話を修正するぞ」

黙って三人の話に耳を傾けていたガーベラが割り込む。
なかなか進まない会話に業を煮やしたようだ。

「オーケー、これからのプランだったな」

「ああ、そうだ。聞かせてもらおうか、リーダー」

「勘弁してくれ。――各地を練り歩き、情報収集とギルドで経験を積んでいく、というプランだ」

「無難でいいな、誰が考えた」

とオールドが頷きながら言った。

「ウィンド」

「だろうと思った」

うるせえ、とレイヴンは悪態を吐き、空腹を感じたから店主に軽食を注文した。

「アンタらは食わないのか」

「私は朝を摂らない質なんだ」

ガーベラはそう言う野菜ジュースのみを店主に頼んだ。

「俺は、やはりリザの手料理だ、美味えしな」

確かに美味かったな、とレイヴンは認める。

「そうかい、夫婦仲良くイチャイチャしている。目の届かぬ場所だ」

ノロケは御免被る、まったくもって。

ガーベラもそれには同意する、と頷き呟く。

「言われずとも」

「じゃ、9時にギルド集合だ。遅れるなよ」

現在は8時、一時間もあれば十分だろ、と判断を下した

「りょかい」

「わかったわ」

腕を絡ませ、仲良く去っていく二人。

「……こう……四六時中見せられては、私も嫁が欲しくなる」

幾分か経ち軽食が運ばれ、それを摂取中に、ガーベラが羨ましげに言った。

「彼女はいないのか？ モテそうだがな、アンタ」

「いない、生憎とモテなくてな」

意外だとレイヴンは思ったが、しかし納得した。

「女顔だからな、自然と縁がなくなってしまう」

運ばれた野菜ジュースを飲みながらぼやく。

男なのに自分より美人だったら、そりゃ付き合いたくなるのも当然なことだ。

しかしガーベラから付き合ってくれと迫っても逃げられるらしい、不憫な。

クックツと喉を鳴らし笑う、レイヴン。

「なんだ、なにが可笑的い」

ガーベラは憤る、人の不幸話がそんなにお笑いか。

「違う違う、そう怒るな。――女と話せるだけマシ、悪役面よりかはマシだぜ」

レイヴンは軽食を摂り終え、次に甘めコーヒーを飲み干す。

「俺は泣かれたことがある。おっと、なにもしてないからな、暴力も暴言もなにも」

アチラの世界では、俺は悪役面だから恐れられていた。最初は恐れられる留まっていた、が。

暇つぶしにやり始めたケンカがそれに拍車を掛け、不良のレッテルを貼られた、といっても否定する材料はないがな。

そして一時期は殺人を犯したという噂が流れた。

その噂のお陰で俺に遭遇すれば蜘蛛の子が散らすかのように人々は逃げ去る。

たまに腰が抜けて逃げれない輩が現れては大泣きされた、殺されると。

1、2回ではない数十回だ。

「どうだ、面白いだろ。ハッハッハッ」

畜生、コーヒーが甘すぎで涙が出る。

「……驚いた。君が」

躊躇ったのか、一拍置いた。

「――君が誰かから気に入られたい、という感情があるなんて」

「……へえ、気付いていたのか」

「そういう魔法があるんだ」

事も無げにガーベラは言う。

ガーベラが言った魔法とは、対象の思考回路を読む探査魔法と呼ばれる高位魔法、使える人間は二桁に満たない。

「便利すぎだろ、魔法。で、それを使いどんなことがわかった」

欠伸を噛み殺し、コーヒーを飲みきる。

そしてレイヴンは鋭い視線をガーベラに這わせた。

「エゴイスト、利己主義者、究極の個人主義者。情が薄く、性欲はあっても愛情はない。家族を護る、という思考はない。非人間的な性格」

「当たり前当たり」

「人に気に入られたい、この人に尽くしたい、という感情はない。利用する程度、冷徹に人を見捨てる」

ガーベラは思い出す、赤と黒の機人戦、レイヴンが結構熱いことを言っていたが、アレは生存率を上げるために仕方なく言ったにすぎない。

だが、とガーベラは再思考。

「しかし君は特殊で、社交性があり、誰かに借り、恩を作るのを極

端に嫌っている。大抵の利己主義者は社交性皆無、借りがあらうと関係ないと言い突っ張れるワガママな性格だ。面白い症例だぞ、君は」

聞いたことのない利己主義者、人間的ではなく、かといって非人間的でもない、曖昧な存在。

ガーベラはそれを面白い症例、と評した。

「ソイツはどうも。――侍はそこまで知りながら、俺についていくと言ったのは何故だ」

「言ったはずだぞ、私の知的好奇心を埋めるために君についていく、君を利用する。ギブアンドテイク、というやつだ」

顔の筋肉を動かし、いい笑顔を作る。

「案外腹黒いな」

「君に言われたくない」

「コイツは失敬」

苦笑混じりにレイヴンはそう返した。

飲食代を払い宿を出る、現在8時50分。

思いの外、時間は迫っていた、レイヴン達は早足でギルドの向かう。

「到着、オッサン達は確認できず」

「そのようだな」

ギルドに入れば、やはり剣呑な雰囲気が漂っていた。

空いていたイスに腰かける、二人。

「どっこい正一」

レイヴンは腰かける間際、古くさく寒いオヤジギャグを発した。

「なんだ、それは」

当然、別世界の人間にはわからない。

「掛け声だ。コチラの世界では最もポピュラーな掛け声だ」

真顔で嘘を吐く。

「そんな珍妙な掛け声があったたまるか」

勘で嘘と見抜いたガーベラは冷ややかなツツコミを入れた。

「手厳しいツツコミ、サンクス」

皮肉な口調でレイヴンは返す。

それから適当に談笑するが、オールド達はまだ来ない、現在8時57分。

「暇だ。そうだ、侍、賭けしないか」

「賭け？ なんのだ」

「オッサン達が間に合うかどうか」

「いいだろう。賭けるものは？」

「昼飯おごりで」

「わかった。私は間に合うに賭ける」

「じゃ、間に合わないに賭けた」

現在、8時58分。
レイヴンの方が有利だ。

「さあ、どちらかな」

と言いながらもレイヴンは勝利を確信していた。

12話 予定報告(前書き)

先に謝つときます、すみません。

ダラダラと書いていたら、前回と同様に話は停滞。

次回からはポンポンと行くとしますわ

12話 予定報告

「……ふっ、私の勝ちのようだな」

愉快げに顔を変質させたガーベラ。

8時59分57秒、オールド達が来た、間に合った、賭けはレイヴンの負け。

「ファツキン」

悔しいげに呟くのが精一杯だった。

「兄者は、存外に約束を守るんだ」

“存外”という部分について詳しく語ってほしいな、弟よ」

握り拳を見せびらかすように掲げる。

俺は約束を平気で破る、そんな風に聞こえるのだから？

「なに、深い意味はないさ、兄者」

苦笑い混じりに誤魔化す。

「まあ、いい。んで、どこへ行くか決めたのか」

「無論、と言っておこう」

悔しげな表情から一変、自信げにレイヴンは返答した。

「行く宛はオイガミ王国、目的はワレル族の情報収集」

オイガミ王国は、古代兵器を解析の国家プロジェクトにしている国。古代兵器は遥か以前に世界の技術で作られた銃器、戦車、戦闘機などの兵器群を指している。

「オイガミ王国とは、なんでまた」

ガーベラはオイガミを選んだ理由が思い浮かばず率直に訊いた。

「マスターの手記に役に立ちそうなのが幾つか書かれていた」

レイヴンはギルドに来る前に買っておいた頑丈なバックに入れていた手記を取り出す。

「まず一つだが……確かこのへん……あったこれだ、一つ目はマスター行きつけのクレイジーレイジーと呼称される情報屋、オイガミに居るらしい、といっても現在は不明だが」

「クレイジーレイジー……“イカれた倦怠感”って、どんな名前だ」

とオールドが失笑混じりに言う。

「その人は物凄い怠け者なんじゃない？」

それを聞いたりザは自分の予想を口にした。

「この名前をつけた奴は相当のアホだな」

好き勝手に言い放った三人。

「アンタら言いすぎ。話を戻す、このクレイジーレイジーに話を訊きに行く、単純な話だ」

「なにかしらの情報を持ってそうだな、マスター行きつけとなれば。しかし疑問が一つ」

「今も生きているのか、というわけね」

「口封じにマスターだけに『永獄』を掛けて殺したとも思えん。そのレイジーなる人物もマスターの関係者として殺されている確率が高そうだぞ」

「ま、博打感覚だな。精々存命を祈るとしよう」

そう締めくくり、予定報告は終了。

「オイガミといや、日数がそれなりに掛かるな」

そう言ってオールドがおもむろに立ち上がると依頼書が貼り付けられた掲示板の下へ。^{もと}

数瞬、眺めたあとに一枚の依頼書を取る。

「オールド、なんの依頼？」

「魔物討伐依頼、討伐対象はデストロイドラゴン。時間は有効に使わんとな」

へデストロイドラゴン、脅威度合いS十

「S十とは、なんか強そうだ」

ウィンドが即応、瞬きより短い時間で検索終了、結果を表示した。

「デストロイドラゴンといえばこの前の奴だぞ」

ガーベラが言ったこの前の奴とは、共闘で倒したドラゴン、機人が来る前に戦ったドラゴンのことだ。

「つーわけでちよっくら行ってくる」

オルドは受付嬢を親指で指す。

「Sランク、俺にはまだ受けられないな」

ギルドでは自分のランク以上の依頼は受けられない。
レイヴンのランクは登録したてで最低ランクのF、デストロイ討伐
依頼のランクは最高のS、受けられるわけがない。

オルドは依頼書を右手で持ち、受付に足を働かせる。

リザはオルドを観察、ガーベラがオチ読めた、前回のパターンだ、
とため息を吐き言う。

「オ、ル、ド、やっぱり鼻の下伸びてるじゃない!」

「の、伸びてない!」

「ああ、どもった!」

リザは頬を膨らませ、私、怒ってますと腕を組み意思表示する。

「なるほど、このパターンか」

レイヴンはげんなりといった感じで呟く。

「毎度のことだ、私はもう馴れた」

「いやな馴れたな」

「まったくもっておっしゃる通り、というやつだ」

前回のようオルドが弁解、リザは拗ねたまま。

数分後にリザの機嫌が直った、疲れた表情でオルドは依頼書を提出、受付嬢は苦笑いしながら依頼を受理した。

「ギルドのランクアップってどうすればいいんだ？」

「正攻法でいけば、自分のランクに合った依頼を成功させて上げる。裏技は自分以上のランクの魔物を撃破させ、それをギルド側に認めさせるだ。それがどうした？」

「ちゃちゃっとランク上げれば、あんな三文劇を見なくて済むからな」

先ほどピリピリした空気から甘ったるい空気に変化、発信源は無論

オールドとりザだ。

「そうだ、ウィンド、デストロイドラゴンを撃破すればどの程度までリンクは跳ね上がるか？」

〈解答、Sが5%、Aが70%、Bが25%と推測〉

「サンクス。Sの道は険しいとはよく言ったもんだな」

「ふっ、そう易々となられてもらっては困る」

「そうかい。——おい、オッサンに慈愛、行くぞ！」

いつまでもイチャイチャ空間に居そうな夫婦を現実に戻すため、声を掛けた。

「「残念」」

二人とも物足りなさそうに口を開いた。

「アンタら、一体何時間それをやっとなければ気が済むんだ？」

「それは」

「勿論」

「「二十四時間」」

奴らの両者に向ける愛情は底なしか、とレイヴンは戦慄した。

二人の言葉に嘘偽りはなかった。

「コイツは……たまげた」

驚くガーベラ、そこまで愛しているのか。

「俺には理解できんな」

レイヴンは今まで愛情という誰かを愛する感情を抱いたことがない。それなりのことが過去に起こったために異常者と化したのだ。

「その内、お前にもわかる時がくるはずだ。必ず、な」

人間性を氷らせかけている鴉にぶっきらぼうな口調でオルドは口を開いた。

「んじゃ、行こうか」

「はい、貴方」

リザはたわわな胸部装甲をオルドに押し付けるように腕を絡ませる。て組む、鼻の下が伸びきっている。

「氷のハートもいつかは溶ける、それも氷りきっていないハートならば尚更だ」

オルド達に続くためガーベラは歩き出した。

「といっても過去になにがあったかは知らないし、勿論訊きもしないさ」

ガーベラは直感していた、レイヴンは過去になにかしらのことがあり、それ故に自分を大事にする利己主義に目覚めた。尤も、それがどんなことかはわからないが。

「……ハン」

レイヴンは曖昧に返事するだけ。

オイガミ王国はここから四日ほどかかる、そのため準備は万端にすべく、現在買い物を行っている。

「――食料はオーケーね、他には……これも、あとそれが必要で、ええ」と他には……」

リザが取り仕切り、他三人は荷物持ち。

（（長い、この上なく））

女性の買い物は長いとよく聞くが予想以上だった、かれこれ三時間。しかしオールドは馴れた様子、何度もリザの買い物に付き合ったために耐性がついたのだ。

「……………うん、こんなものね」

リザはやっと満足がいき、買い物は終了する。

馴れないレイヴン、ガーベラは疲れをため息として吐き出した。そう激しく運動したわけではないのに、この疲労はなんだ？ レイヴンは思考するが、答えはでない。

買い物終了時刻、12時48分、遅めの昼食の時間だった。買った物は業者に頼み馬車に積み込ませる。

「賭けの約束」

ガーベラが唐突に口を開く。

「覚えている」

「ふっ、ならいいさ」

朝と同様に二手に別れた、オールドはリザの手料理を食べに行った。一方でレイヴンはガーベラが先行し、ある店に案内された。

リザと一緒に食べないかと誘われたが、夫婦の時間に水を差すまねはしたくないという理由で断った。

ガーベラに案内された店は活気に満ちた食堂だった。

空いていた席に座り、近くにいた店員にそれぞれ料理を注文した。レイヴンは激辛唐揚げ定食、ガーベラは鮭定食。幾分経ち、運ばれた料理に早速箸を伸ばす。

「ありゃーしたっ！」

威勢のいい崩れた言葉が店を出る時に掛けられた。

「ゴチになった」

「賭けの約束だ。次回は勝って俺が言ってやる」

賭けに負けたのが悔しかったレイヴンはそうのたまった。

レイヴン達はリザの経営していた店に向かう。

「気長に待つよ」

ガーベラは挑発的な言葉を投げ掛けた。

「おうおう随分と自信満々だな、畜生」

「賭け事は趣味なんだ、そう簡単に負けられんよ」

「言ってる。次は潰す、俺が勝つ」

「また負けて吠え面かくなよ？」

「誰がかくか」

そうこうしている内に目的地に着いた。

と同時に店から二人が出てきた、まさにグッドタイミング。

「あら、ベラちゃんにレイ君じゃない」

「なんとタイミングのいい」

「俺もそう思った。ところで、やり残していることはないか？」

「……ねえな」

「……ないわね」

「……ないはずだ」

「ならいい。——じゃ、行こうか」

オーライと三人は同時に応え、歩き始めた。

馬車に乗り込み、荷物の点検をしたあとにオイガミへ馬車を動かす。

レイヴンはアチラの世界から持ってきたSF小説を読み始め、他三人は談笑をし合う。

「そーいや前から気になっていたんだが、お前のマーズ、弾薬はどうしているんだ？」

なんとなく思いついた疑問をオルドは訊いた。

「複合粒子が弾丸を作り出している——ウィンド曰く、科学技術と魔法技術、両方の特性を持った万能粒子だそうだ」

一度小説から目を離し、オールドに視線を向けた。

そして頭に刻まれた情報をすくい出すようにレイヴンは話し出す。

「その粒子のお陰、弾薬を生成しているから弾に困る心配がなくて助かる」

そういえば弾薬はどこに保管されているんだ、レイヴンは思考した。

「複合粒子、ねえ。聞いたことないな、ガーベラはあるか」

弾薬は異空間にでも保管されている、なんとなく答えに近い気がした。

まあ、そこまで重要なことではない、どうでもいいか。

レイヴンは視線を下に、小説へ移す。

「私もない。リザ殿は？」

「うーん、私もないわね」

三人は無意識に訝しげな表情になる。

そんな万能性の高い、高すぎる粒子ならば例え秘匿されようとも噂程度には流れそうだ。

それが一切ないというのは些か疑問だ、単にその粒子の噂を知らないだけかもしれないが。

「ま、弾薬の心配は無用というわけだ」

「ソイツはよかった。弾なくなって戦えませんかでは話にならんから

な」

「心配無用だ、第一に弾がなくなれば銃剣はある。十分に戦えるはずだ」

「そうかい。なら、今回の依頼は銃剣のみで戦え」

「なに？」

「訓練だ訓練。接近戦のな」

つまり飛び道具ばかり頼らず、接近戦の腕も磨けというわけだ。

「いいだろう、やってやる」

「なんなら私の手ほどきを受けるか？」

「いや、いい。勝手が違うだろう、銃剣と刀では。それに俺なりのやり方がある」

「おうおう張り切りやがって大怪我するなよ」

「その時は私の治癒魔法で治すわ、安心してね」

ウィンク付きでリザは言った。

「コイツは心強いな」

「リザ殿は治癒魔法に特化している、死亡以外なら瞬時に治せる、存分に死にかけてこい」

ガーベラは激励（？）の言葉をレイヴンに掛けた。

「オーライ、とでも言うと思ったか侍野郎。無傷で勝ってやる」

「精々口先だけにならないようにな。兄者、対象とはいつ頃出会う？」

「明日の昼頃ぐれえだ。レイヴン、お前一人で殲滅させてこい。デストロイドラゴンを一人で殲滅できれば一人前だ」

オルドとガーベラ、二人が本気殺る気を出せば造作もない、Sランクの魔物の群れを殲滅することなんて。

「あいよ」

気負いなくレイヴンは答えた。

馬車に取り付けられた小さな窓から見える空は曇り始め、今にも雨が降り注ぎそうだ。

雨は地面をぬからせ、姿勢制御が不安定にさせる、それは重大な隙が生まれることを意味する。

レイヴンはこれは面倒なことになった、と内心で呟く。

雨が降らないことを祈る、切実に。

13話 単独出撃(前書き)

前回の前書きは戯言としてながしてくれると幸いです。

13話 単独出撃

「目標地点到達。ウィンド、索敵しろ」

〈了解、索敵開始——3時方向、数5。12時方向、数7。10時方向、数5〉

総数17体、なかなかの数だ。

「結構な数だな」

〈敵は多い、背後を奇襲されないよう気を付けろ〉

ウィンドの助言を噛み締め、思考を切り替える。

「エンゲージ」

〈メインシステム、戦闘モード起動。右手武器マールヴ展開、左手武器ムーンライト展開〉

鋭角的デザインのマールヴと、新たに円筒形のパーツが左手に装着された。

「ムーンライト？」

〈レーザーブレードの呼称。高出力なため取り扱いは注意せよ〉

「了解」

〈対象との距離、2700〉

「にしても天気はどしゃ降りで足場も視界も悪い、コイツは面倒な」
〈心配するな、私がサポートする。私も信じろ〉

嬉しいこと書くじゃねえか。

オールド達が乗る馬車は遠くのほうで止まっており、そこから戦闘を見守る。

「じゃ、行こうか」

〈オーライ〉

強化された脚力で数メートルほど飛び上がる。

第一特殊機能…物質構築、一時的に空間に複合粒子で構成された物質を作る機能。

それを使い、足場を形成させ空を駆ける。

〈ターゲット確認〉

「排除開始」

ムーンライトに複合粒子を充填、青白い刀身が現れた。

その優しげな色合いにはどこか、全てを燃やし尽くす暴力を連想させた。

レイヴンは飛び跳ねるを止め降下する、ドラゴンのレーザー群が飛来するが狙いが粗く中らない。

降下と同時に手近な討伐対象の首筋に青い刀身を接触させる。

このムーンライトはどんな装甲だろうと貫く、そんな意識がレイヴンの胸に湧き上がった。

その意識通りにドラゴンの装甲を切り払い、切断に至らせる。

〈出力35%に限定〉

「今のでか。イカれてやがる」

たったの35%でこの威力とは、傑作的に狂ってる。

レイヴンはぬかるんだ足場から、再度空を目指した。

ムーンライトがあればアノ機人を倒せる——いや、無理か。

アノ機人は手加減をしていた、射撃、回避、全てにおいて。

マーズの銃剣とムーンライトを交互に使い分け、薙ぎ払っていく。

応射されたレーザーがかすったが、ダメージは軽微に収まる。

アノ機人、自分の攻撃を中てず、相手の攻撃は積極的に避けず、手加減していた。

ウィンドは、機人のバリア出力と装甲自体も意図的に弱らせている、と分析している。

だから、機人にダメージを与えることができた。

レイヴンは油断せずに戦闘行為を継続しながら思う。

前回はイレギュラーらしい俺に利用価値があったから死なずに済んだが、これからもそれが続くとも限らない。

消される可能性は十二分にある、ならば絶対強士体になるだけ、強くなるだけのことだ。

俺の生命を脅かす害悪な存在は自分の力のみで排除する、昔と同様

に。

否定されて生き続けた男に頼れるのは自分の力だけだった。
あとは他者の力を利用するだけ、そこに信頼信用はない、駒程度の
認識。

しかし例外的にウィンドのことは信用信頼していた。

レイヴンはウィンドの正体を知っている。

オールド達に言っていた、〈質問の意味不明。再入力せよ〉というの
はデマ、嘘だ。

他人を信用しない個人主義者が自分に関することをホイホイと言
いはしない。

〈警告。レーザー、3時方向〉

「よっと」

〈高エネルギー反応増大、12時方向。対処方法——情報流動〉

ウィンドより新たなモーションパターンが流れ込む、レイヴンはそ
れを実践。

「ブレード光波」

ムーンライトの装着された左手を横に振るう。

それは所謂飛ぶ斬撃で、その青白い斬撃は、デストロイより放たれ
た極太のレーザーを切り裂き、雲散霧消。

ブレード光波はそれに留まらず、デストロイを掻っ切った。

「まさに暴力だな」

〈残り3、気を抜くな〉

「抜かんさ、これがな」

形成した足場を蹴り滑空、マーヴの銃剣でドラゴンの頭部を穿った。切り裂くというより腕力任せのかち割り。

ゼリー状の脳みそが宙に舞い、レイヴンに降り注いだ。

「生くさっ。ファツキン」

しかし雨が洗い流した、逆に降雨でよかったなとレイヴンは思った。

〈警告。レーザー。ブレイク・スターボート、ナウ〉

命じられるままにブレイク・スターボート（右へ回避）。

雨のように降り注ぐレーザーは地を抉り、そして無数の弾痕を作った。

〈デストロイドドラゴンの異常行動、確認〉

「なにやってんだ。トチ狂って、共食いか」

レーザーの雨はブラフだった。

ドラゴンは互いの体を噛みつく。

仲間割れか？とレイヴンは口にした。

……いや、違う、これは――

〈融合〉

強烈な閃光がデストロイを中心に、曇って薄暗い空を照らした。

「クソ、目がイカれた」

直に強烈光の侵入を眼球に許し、視界を奪われる。

「……ああ、チカチカするぜ」

左手で目を揉みほぐし、視界を回復させる。

「コイツ——随分とスマートになったな」

視界に映っていたはずの大型生命体の影はなく、代わりに細身の間が映る。

その人間の胸部の膨らみ、顔立ちから判断して女性、それも真っ裸。乳頭に陰部、隠すべきところが隠されていない。

「貴様は何故我らを襲った!」

怒りの形相、その言葉がしっくりくる表情で女性は腕からレーザーを放った。

レイヴンは回避行動に移る、レーザーは直撃せず。

（激情に任せ、冷静になれていない。人間らしいな）

レイヴンは、乙女の裸を見ても無感動だった。

女性は次々にレーザーを放つが、中る兆しが見えない。

「チッ、近付けんな」

しかしデタラメに撃ち続けるレーザー網に接近戦は困難、至難のわざだった。

「我らはただここに居ただけだ、貴様ら人間にはなにもしていないだろう!？」

「生憎と人情に訴えかけてられても、俺に動く心はない。俺には関係ない。お前を殲滅することに変わりはない」

冷ややかにレイヴンは滔々と言った。

「それにお前らは人間を餌にする獣だ、文句を言われる筋合いはない」

なにもしていない、とは言ったがいつかは牙を剥く、自分の腹を満たすために人を喰らう。

そしてドラゴンが女性へ擬人化したのだって、コチラの注意を引き、同情を買い、隙を作らせ、その隙について殺す算段だ。

レイヴンは見抜く、アイツらは思考する能力がある知性体だ、そういう思考に辿り着いてもなんら不思議ではない。

「貴様っ!」

更に激情の炎を燃やす。

女性は両手に棒状の物体を出現、その棒状の物からレーザーを発振。

対抗しレイヴンもムーンライトの青白い暴力を起動。

弾かれたかのように駆ける二人、相手を必殺するために。

女性が先制、二つのレーザーサーベルを叩き付ける、同胞を殺された憎しみを乗せて。

レイヴンは、なにもしないで待つ。

鴉の眼前に光の刃が迫る、必殺を確信した女性。

しかし、その刹那レイヴンは横に一回転、光刃はかわす。

そして振り向き様、ムーンライトを振るい、女性を上半身と下半身に部位分けにした。

その危険な回避方法、反撃方法をレイヴンは事も無げにやった。

無論、ウィンドのサポートがあつてできたことだが、しかしやれと言われれば実際は身がすくむものだ。

イカれた神経をしていると女性は感じた。

「…ガフツ…：…きさ、ま…：…」

「存外にタフだな」

体を真つ二つにされて、尚も死んでいない。
怨讐思念体にでもなるつもりか、コイツは。

「き、さま…だけは、…：道連、れに！」

「その考えを否定する」

女性はエネルギーを暴走させ、自爆しようとするが、それに即応したレイヴンにトドメを刺され、意識は永遠になくなる。

〈戦闘システム、解除。通常モードに移行〉

「これで、やっと終わりか」

レイヴンは自分の体を分析、かすり傷程度の損傷に体力の大幅な消耗。

調子は上々、なにも問題はない。

〈コンプリートミッション〉

「RTB（帰還する）」

偽体とはいえ、人間となんら変わらない女性の惨殺体を目にしても、レイヴンは冷めた表情のままだった。

骸の群れに背を向け、歩き始めた、帰るために。

「結果は？」

「良好。なにも問題ない。オールオーケーだ」

馬車に到着、濡れた服装で入るのどうかと思っているとリザが特殊な魔法を使い服を乾かした。

それに感謝の意を表して中に入ると、オールドが早速訊いてきた。

「それはよかった。んで、傷は負ったのか」

「かすり傷程度」

「私の勝ちだな、兄者」

「クソ、また負けか。やはり大穴狙いは駄目か」

オールドは銀貨数枚をガーベラに投げ渡す。
露骨な笑みでそれを受け取る。

レイヴンはガーベラとオールドの会話の内容を察する。

「テメェら、俺で賭け事をしたな」

「まあ、な」

隠すものでもない、オールドは正直に言った。

「因みに私は君の負傷に5銀貨」

「俺は無傷に5銀貨」

「私はしていないからね」

この野郎共、人が命張って戦ってきたのに、暢気に賭け事に興じる
とは……

「許せんな、断じて」

「まあ、そんなことはどうでもいい。さっさとオイガミに行くぜ」
そう言ったオールドは、馬に指示を出しオイガミへ近付く。

「チッ。まあ、いい」

レイヴンは背もたれ付きイスに深く腰かける。

「レイ君、飲み物いる？」

「貰おう」

流石慈愛、気が利くぜ、と口に出さず内心で絶賛。

手渡しで渡された飲み物、緑茶で喉を癒す。

「渋い」

リザの緑茶はなかなか渋味が効いていた。

魔物の襲撃、山賊の襲撃など道中に色々と起こったが無事にオイガミへ着いた。

コンクリートと作られた丈夫な門を潜り、レイヴンの居た世界と同等レベルの技術で作られた街並みが広がる。

近代的家屋、ビル、舗装された道路、エトセトラ。
それよりもレイヴンが驚いたのは、自動車に似た物が走っていたこと。

ガーベラにその自動車のことについて訊く。

「アレはランナーといって科学技術で作られた産物だ。それがどうかしたのか」

「いやな、ここの街並みは俺の居た街並みにそっくりでな。気になっただけだ」

「元居た世界に、故郷に帰りたいとは思わんのか」

「ない」

レイヴンはバックから手記を取り出す。

「クレイジーレイジーの住所はA T―57 E F G、この住所がどこだかわかるかオッサン」

「……わからねえな。なんたったて初めて来たしな、オイガミは」

本当かとレイヴンは驚く。

「じゃあ、侍はどうだ」

仕方ない、気を取り直して次にガーベラに訊く。

「兄者と同じく」

だがオールドと同じく否定の言葉。

「……慈愛は？」

「ごめんね、レイ君。私も詳しく知らないの」

人に訊けばわかるかも知れんが、それには大変手間が掛かる。

「……ファツキン」

〈私はわかるぞ、レイヴン〉

思わぬところから救いの声が上がった。

「なに」

〈案内しよう。大丈夫だ、心配ない。私に任せろ〉

「オーライ。流石はウィンドだ」

「わかったのか」

「そういうこった。俺についてこい」

ウィンドの指示に従い、クレイジーレイジーなる人物の隠れ家に向かう。

十数分かけて到達したところにあったのは普通の一軒家。

一般家屋に擬態は合理的だ、木を隠すなら森と言う言葉もある。
一般人を装い、普通の暮らしをしてれば案外にわからないモノだ。

レイヴンが代表して玄関のチャイムを鳴らす。

ピンポーン

一般的チャイム音が鳴る。

家屋内からは音声、足音、物音などは聴こえない、留守だろうか。

再度、チャイムを押す。

ピンポーン

先と同じく反応なし、やはり留守か。

……留守なら致し方ない、後日出直そう。

と、したところで――

「む、小生の家に何用だ、お主ら」

金髪赤目のゴスロリ少女がレイヴンの隣に唐突に居た。

というか、一人称が小生とは、幼い外見には似合わない。

コイツ、ウィンドのセンサーに引っ掛からなかっただと、レイヴンは驚愕する。

オールドとガーベラも唐突に現れた少女に目を剥いて驚いていた。

リザは……抱き締めたいとイッた目付きで呟く。

「もしか、アンタがクレイジーレイジーなる情報屋か」

驚愕の感情をおくびに出さず、レイヴンは疑問を口にした。

「いかにも——その服装、たわけ者の持ち物だな、どうしてお主が持っている？」

幼女は殺意入りで訊いてきた。

たわけ者はマスターのことを指していると察する、しかし殺意入りで訊いてきたのは謎だ。

「コイツはマスター、デスドライバーより受け継いだ物だ」

「無償でか」

「いや、頼み事をされた」

「やはりか、アノ利己主義者がホイホイ自分の持ち物をやるわけがない」

幼女は腕を組み、うんうんと頷く。

中傷的発言だが嬉々の色が混入している、理由は不明。

「利己主義者、マスターが？」

レイヴンの主観でいけば好好爺だと感じたが。

「まあ、立ち話もなんだ。小生の家で存分に話すでしょう」

幼女がドアの鍵を開けて、レイヴン達を手招きする。

「どうするのだ、レイヴン殿」

「行くしかあるまい」

「それもそうだな」

なんとなく異様な気配を感じたレイヴンが横を見る。

「可愛い、抱き締めて頬擦りしたい」

目がイッたままでリザは鬼気が籠った声音で呟いた。

「……オッサン」

「なにも言うな、リザは極度の子供好きなだけだ」

明後日の方向に顔を向け、オールドは疲れたかのように言った。

「おい、どうした入ってこんのか？」

「今行く」

クレイジーレイジーの隠れ家へと入る、役に立つ情報があることを願いながら。

13話 単独出撃（後書き）

途中のドラゴン擬人化、主人公の、敵ならば誰であろうと潰すという冷徹な思考を晒すためにやっただけ。

女だろうが、子供だろうが、老人だろうが、どんな絶世の美人だろうと関係なく潰す、自分の害悪になるならば潰す。

14話 疑惑上昇（前書き）

徐々に下がる更新速度、なんかすんません。

14話 疑惑上昇

ゴスロリ幼女はレイヴン達をリビングへ案内した。
適当に座ってくれ、と幼女に言われソファ―に腰かける。

「……これは、どういことだ」

幼女はしかし困惑、なぜならばリザに抱き締められる形でソファ―に座らされているからだ。

適当にとは言ったがこの座り方はなんだ、と幼女は困惑する頭で思考。

「気にしない気にしない」

リザは頬擦りして、うっとりしたように返答。

リザは、子供にするように優しく幼女の頭を撫でる。

「撫でるな！ 子供扱いするな！」

幼女の抗議を意に介さず、撫で続ける。

「…………チツ」

抵抗虚しく撫で続けられる、ターナルを舌打ちする。

「駄目よ、女の子が舌打ちするのわ」

咎める口調でリザがたしなめた。

「……もう、いい。――まずは自己紹介といこう、小生はターナル、クレイジーレイジーは、無論偽名だ。見ての通り“人間”だ」

抗議を受け付けられないリザに鋭い視線をさしたが、ニツコリ微笑み受け流す。

数秒そうしたが、撫でるのを止めないと悟り、好きにさせる。

「俺はレイヴン」

なにを当たり前のことを言っている、自分は人間だ発言に疑問符を浮かべる、四人。

しかし訊こうとはしない、複雑な事情がありそうだからだ。

「お兄さんはオールド」

「ガーベラだ」

「私はリザよ、ナルちゃん」

「ちゃん付けをやめろ。ドイツもコイツも子供扱いして。言っておくが、小生はお主らより遥かに歳上だ。敬えアホども」

どう見ても10代前半、下手したら8、9歳にも見える。

しかし、マスターが現役のころからの専属の情報屋らしいから、実年齢はそれなりに召しているはず。

ターナルの言っていることは戯言ではなく事実なのだろう。

「そんな形なりではな」

レイヴンが投げ遣りに、どうしてもよさげに言う。

「うるさい、体型のことを言うな。小生も気にしているんだ」

「コイツは失敬」

「ふん。――早速本題に入るとしよう」

「そうだな。まず訊きたいことが一つ。アンタはマスター、デスドライバーがワレル族について調べていたのは知っているか？」

マスターと言っても誰のことかわからないと思ったレイヴンは言い換える。

「無論知っている。小生も調べていたからな、たわけ者に依頼されて」

「ソイツは重畳。なら知っている情報をくれ、金は払う。できれば良心的な値段だと有り難いが」

「いや、金是要らん。だが質問がある、それに必ず答えろ」

「いいぜ、なんならプライベートなことまで答えてやるぞ」

「要るか、お主のプライベートなど」

吐き捨てるようにターナルを言い、レイヴンはそれは残念と返答。

そんな感じにジョークを交えつつ対話を進める。

暇なオールドとガーベラは、二人の会話の耳を傾けながらポーカーをやっていた。

リザはターナルを撫でたり、頬擦りしたりと抵抗しないのをいい気にやりたい放題。

「ワレル族の真相についてはわからなかったが、有力な手掛かりはある」

「有力な手掛かり、それは一体？」

「そう焦るな、逃げはしないよ。――曰く、魔王はいない」

魔王はいない？　ワレル族Ⅱ魔王は本当にデタラメということか？

「順を追って話す。ワレル族は平和的非好戦主義者だ、戦いは好まない。尤も一般認識は真逆だがな」

それは知っている、とレイヴンは相槌を打つ。

マスターの手記、ターナルの言うことが事実と仮定したら、魔王なんてものは存在しない。

平和主義者であるワレル族の者が大量殺戮という無法など望まない。

「しかし、魔王は実在する」

今度は魔王は実在する？　おちよくってんのか、この少女は。

「確かな実例が存在するんだ。何百件も、な」

「その確かな実例があるとなれば、魔王の存在の保証されるな」

「そうだ。――魔王は毎度相当な被害を出す但結局勇者に倒されハッピースンド」

ターナルはフンとバカにしたように鼻を鳴るす。

「しかし倒したはずの魔王は百年に一度のペースで現れる、それは何故か」

「実は倒した奴は影武者なんですた、というオチか」

「アホか。そんなわけないだろ」

「ならなんだ、誰かがマッチポンプでもしているというのか」

「そうだ。といっても確定的な証拠があるわけではない、だが面白い情報はある」

ターナルが本棚からファイルを取り出しレイヴンに投げ寄越した。

「……フムン」

ファイルを開き、文字の羅列に視線を這わせる。

「コイツは……カノープス王国に捕らえられたワレル族の処理情報か」

そこにはびっしりと文字は書き連ねていた。

「一般的には処刑されたと書かれているが、秘密裏にどこかへ移送されている、移送場所は……不明、か」

怪しい、秘密裏に生かしてなにをしている？

「小生はこういう結論に至った。捕らえられたワレル族を魔法で洗脳し魔王に仕立て上げたのでは、と」

「洗脳、か。魔法はなんでもありだな。死人なんかも蘇生できるのか」

「流石に死人は無理だ。逆に言えば、それ以外ならなんでもできる。思考操作による思想変質により殲滅主義に目覚めるように洗脳も可能、つまり体のいい駒を作ることにも可能というわけだ」

「なるほど。筋は通っている」

洗脳したワレル族を魔王として暴れさせる、一方で黒幕は喚び出した勇者を鎮圧に向かわせる。

そして勇者が無事に魔王を殲滅、勇者を喚び出した国、つまり黒幕の国の評価が上がる。

評価が上がれば民が増える、誰しも安全な場所で暮らしたいもの、魔王を倒した国なら安全ということに繋がる。

民が増えれば国力、人材などが増えるを意味し国が発展する。

「それなら、この移送された場所がわかればいいんだがな」

「考えられそうな場所の目星はついたが、数が多い。徹底的絞り込

んでも、50箇所はある」

「50箇所、結構多いな」

「つまり、地道に回るしか答えは出ないということ。ターナル・クレイジーレイジーです」

何故かターナルはキリツとした顔付きに変貌させ、説明口調で言った。

「なに言ってるんだ、幼婆。というか何故に自己紹介した」

「いや、なんとなく言わなければならぬ気がしたただけだ。気にするな。——って、幼婆ってなんだ!」

「外見がロリータのくせに年を召した奴のことだ。アンタにぴったりの言葉だ。似合っているぜ、幼婆」

レイ君、女の子に婆は駄目よ、と凶悪な笑みでリザが言ってきたが、レイヴンはそれをコミュニケーションの一貫だとジェスチャーで返答し納得させる。

「幼婆言うな!」

「そーいや、魔王は「無視するな!」——1体しか現れないのだから? アンタの仮説を真実とすれば、他の捕らえられたワレル族はどこに行ったんだ?」

ファイルに再度視線を落としターナルの言葉を華麗にスルー。

ターナルの言うことが現実と仮定すれば、捕らえられたワレル族は総勢19名、一人は魔王となるがあとの18名はどうなるんだ？

「…チッ……戦況報告書のページを開けろ」

言われた通りファイルのラストページ付近を開ける。

「完全勝利、被害ゼロ、完全無欠の大勝利。なんかの戦争か？」

「3ヶ月前のカノープスVSオイガミ、ライジングの戦況報告だ。そこに書いてあるのはカノープスのだ、怪しいと思わんか？」

確かにとレイヴンはそう口にして思惟する。

この戦争、カノープスの完全勝利で幕を閉じているが、被害ゼロなところが怪しすぎる。

大国とはいえ多少の人員は失うはずだ、しかし被害ゼロ、誰も欠けることなく勝利とは怪しい。

「この戦争に残りのワレル族、18名全員を投入したのではないかと。これも小生の仮説だ」

レイヴンはワレル族の凄さをいまいち想像できなかった、しかし魔王となって猛威を振るうほどの力を秘めていることから、かなり危険な存在と認識した。

だからこそ、この戦争にワレル族を投入して完全勝利してもなんら不思議ではない。

「なるほど」

とレイヴンは納得した、ますますカノープスに対する疑惑が浮上する。

「だが疑問が一つ。ワレル族は亜人、人間とは一部が違うのだろうか？　なら戦場という大多数の目がある場所に出せば気付かれるのではないのか？」

「擬態魔法というものがある。それを使い人間と同じような姿に擬態したと推測できる」

ホント便利だな、魔法ってやつは。

「小生の持っている情報は大体こんなものだ。さて、小生の質問に答えてもらおうか」

そう口にしたターナルは紅茶を啜る。

「初体験は15だ」

それを見たレイヴンはすかさず、聞いた人が思い違いしそうな言葉を発した。

「ブフッ！　……ゲホッ、ゴホッ……な、なな、なにを言い出すんだ！　ハハハ、ハレンチな！」

ターナルが紅茶を吐き出しむせ、咳き込み顔を真っ赤にして抗議した。

掛かったな、レイヴンは悪どい顔をする。

元から悪役面なため、それに拍車をかける。

「ハレンチな？　クツクツ、俺はタバコを初めて吸った年齢を言っただけだ」

未成年で喫煙とは褒められない行為だ。

「な、なに」

「ハレンチとタバコ、なんら因果関係ないのだから」

「うっ」

「なんのことも勘違いしたんだ？」

「そ、それは……」

ターナルは顔を真っ赤にして口ごもる。

「うわあ、レイヴン、ノリノリで遊んでやがる」

「犯罪現場に偶然遭遇した気分だ」

ポーカールールをしている兄弟は自分の感想を言うが止めようとしないう。リザは微笑ましいそうにしている。

「さあ、なにを勘違いしたか言え（やはり、楽しいな。人で遊ぶのは）」

人を弄り遊ぶとは性格が悪いことこの上ない。

「い、言えるか！」

「ハハン？　なんでだ、いかがわしいことと勘違いしたか」

「……………」

「その沈黙は肯定したと同義だ」

「い、いや、それは違うぞ」

「と言ったあとの弁解こそ、いかがわしいこと考えたと肯定したと同義だ」

ターナルの必死の弁解を無造作に切り捨て、追い討ちをかけていく。

「……………き、貴様」

追い詰められて開き直ったのか、先ほどまで顔を真っ赤にしていたが、憤怒の意味で顔を真っ赤にする。

（あ、やっべ、やり過ぎた）

「あまり調子付くなよ、人間があああ！」

ターナルは片手に魔力を収縮、凝縮して解放。

光が室内に満ち溢れた。

「んんっ。ここからおふざけはなしだ。わかったか、糞鴉」

素敵な笑みをレイヴンに見せ付ける、目は笑っていないが。

「オーライ」

思わぬ命の危機に肝が冷えたレイヴン、素直に返答した。

「たわけ者——いや、デスドライバーは未だに存命か？」

真剣な顔でターナルは訊く、レイヴンは言うか迷う。

ターナルの言動からマスターに対し恋愛的感情を抱いている、とレイヴンは見抜いていた。

最初に会ったとき、ターナルは殺意付きでレイヴンの服装について訊いた。今思惟すれば、アレは好色抱いている相手の服装を身に付ける見知らぬ男に警戒をしたのではないのか。

マスターから貰ったこの服装はオーダーメイド品らしく、世界に一つしかないらしい。

ならばその服装を見知らぬ男が身に付けていたら、マスターを殺し奪ったのではないのか、と思考したのだろう。

アノ時、俺がどっかの糞爺殺して奪ったと言うものなら隙をつかれ殺られていたはずだ。

（迷う。だがマスターからもう一つ頼み事されているしな。そうとなれば——）

「……デスドライバーは既に故人になっている」

「そうか、存外にポツクリと逝ったな。伝説と謳われた者がなんと情けない」

ターナルはなんでもないと返答する。

その様はただの見栄、強がりだ。

「邪魔したな、俺たちはそろそろ帰ることにする。このファイルは借りていくぜ」

「勝手にしろ」

感情を凍結して悲しみの津波に耐えているとレイヴンは思った。

「オッサンに侍に慈愛、行くぞ」

「ね、ねえ、いいの？」

誰の目からもわかるターナルの見栄にリザは性分のお節介が働く。

「はた迷惑なだけだ、一人にさせた方がいい」

でも、と抗議するリザの腕をオルドが無理矢理引っ張り連行する。オルドはレイヴンの考えに賛同した、ガーベラは特段なにも言わないから同じ考えなのだろう。

なにか言いたげなりザを連れたオルドは先に玄関口へ向かう、ガーベラもそれに続く。

しかしレイヴンはまだ室内に残っている。

「あ、そうそう、言い忘れていたことがあった」

「なんだ？」

相変わらずの無感情。

レイヴンは内ポケットからデスドライバーとしての証、エンブレムを取り出す。

「デスドライバーから伝言だ。『契約は今を以て（もって）破棄する。自由に生きろ、お前を縛る鎖はもうない。愛していたよ、お前を』」

そう言いながらエンブレムを机の上に置く。

マスターの伝言の意味はわからない、だがそれでいい。二人の間に割って入るのは憚れる。

「じゃあな」

そう締めくくりレイヴンも去る。

小さな嗚咽、一筋の涙――響く大きな鳴き声、ダム決壊のような大粒の涙の群れ。

最愛の人の離別の言葉、ターナルの無感情が遂に瓦解した。

「遅かったな」

外にはガーベラがただ一人、オルドは先に帰った。

「用事があったんだ」

レイヴンは適当にはぐらかす。

「しかし謎だ。君は人の気持ちなど知ったことかと言わんばかりの人物と私は思っていたが、実際は違ったな」

ターナルへの配慮、ガーベラはずかずかと人の心に土足で踏み込むクソツタレな人物とレイヴンを内心で評価していたが、評価内容を改めることにした。

「それは利己主義者故だ。他人の心情を理解し最大限に利用する。多少は譲歩するさ、俺に損がないくらいにはな。——そういや慈愛は？」

「ぶちギレしていたぞ」

「ソイツは怖いな。オッサンが宥めててくれればいいのだが」

「そうだな、精々祈れ」

「アンタも祈ってくれ、俺の生命のために」

「あえて断る」

「ふざけたわけ」

時刻は夕方、沈む太陽、紅く輝く光は何故か、タ―ナルに元気出せ
と言っているように思えた。

15話 時間経過（前書き）

また更新速度が下がった。
ホント申し訳ないです。

それといきなりですが、前回の話から3ヶ月後に飛びます。

15話 時間経過

〈ボギーT1、T2、T3が散開、コチラを囲むつもりだ〉

「なら真正面から撃ち砕くだけのハナシだ」

囲まれたら全方位より攻撃を受け圧倒的に不利になる、なら正面突破後に残敵を掃討する、合理的な考えだ。

ちなみにボギーとは敵の仮称、ボギーT1で敵の一チームを表し、ボギー1で敵一人を表す。

〈了解。モード変更、レーザーライフル〉

鷹の目の如き視力をもって目標を視認、マールヴで照準。

〈target——Lock on〉

改良されたレーザーライフルは精度、威力、射程、全てにおいて向上を果たし、性能が格段に上がった。

レイヴンはトリガーを引く、マールヴの銃口から赤黒い渦々しい光がほとばしった。

目標…フル装備の兵士の上半身を消す、続けざまにレイヴンは撃つ。

〈警告。マールヴ砲身部分過熱、砲身が破損する恐れがある〉

「全体的に性能は向上したが、冷却機能はまだまだだな。長期戦には向かんか」

警告を受け、レイヴンは射撃を中止する、マーズの砲身は少し赤熱化していた。

レイヴンを中心とし、4時方向にボギーT1…魔法士が5人、7時方向にボギーT3…弓兵が7人と兵士が3人。
ボギーT2は先のレーザーライフルの砲撃で壊滅している。

「マーズを収納。次にムーンライトを具現、それと俺の右拳にバリ
アを展開しろ」
〈オーライ〉

マーズは雲散、代わりに円筒状のパーツの側面に二等辺三角形の追加ブレード形成装置が付いたムーンライトを左腕に装着。
そして右拳をなぞるように赤黒い壁ができる、それはナックルとして使用する。

〈試作加速装置を起動する〉

レイヴンの背中に底の深いお碗のようなものが現れた。

「加速装置?　——うおっ!」

そのお碗状のものから複合粒子が放出、瞬間的に加速する。

予告のないできごにレイヴンが焦る、しかしウィンドが絶妙な出力調整を行いバランスを崩すことなく、目標へ接近。

〈接敵したぞ、もたもたするな〉
「わかつている」

レイヴンは目の前の兵士を右拳で殴り飛ばす。

殴り飛ばされた兵士は頭蓋骨が砕け、脳みそをムチャクチャにした。

「ウィンド、なにかするなら事前に情報を教えろや」

「コイツは悪かった。だが訓練と実践では意味が違う。つまり、私が言いたいことは習うより馴れろ、ということだ」

「……まあ、いい。さっさと終わらせる」

ムーンライトの刃を形成、襲ってきた兵士二人を纏めて切り裂く。

「今頃になって弓を射るか、遅すぎる」

仲間へ誤射を恐れた弓兵、それは致命的ミスになる。

加速装置を点火、超スピードで弓兵の一人へ拳を振りかざす。

「・・・Huh」

殴られた者は、腕力と超スピードの衝撃で他の弓兵を巻き込み吹き飛ばす。

「どうしたウィンド」

「魔法士の連中が召喚魔法を行使した。該当データなし」

ちょうど弓兵を殲滅し終えた時のことだった。

レイヴンは後ろを振り返り、部分的に空が曇っている情景を目にする。

そこで召喚魔法とやらを行使しているのだろう。

「マーズは？」

「へまだ冷却中。使えることは使えるが、破損率が極端に上がる。破損すれば一時は使えないぞ」

そこにマーズで砲撃して殲滅しようかと思ったが、ウィンドの忠告で中止する。

「仕方ない、格闘戦でやる——」

「来るぞ——腕部、脚部負傷」

「速い！」

見えなかった、スピード重視の高機動タイプ、相性が悪い、とレイヴンは順々に思考を巡らせる。

先ほど加速装置は得たが、まだ使い馴れていない、それにこの加速装置はある欠陥がある。

それは、後ろにしか粒子を放出できない、すなわち前進しかできない。

縦横無尽に動く“奴”と前進しかできない俺とではコチラが不利だ。

「スーパースーチ、センサー類で奴を探れ」

「了解」

物質構築で足場を作り、無理矢理縦横に駆け回る、がしかし“奴”と比べるとお粗末なものだ。

（ヒット&アウェイ、か。高機動タイプの特性を一番に活かせる戦

法、厄介だ)

レイヴンは視線を周囲に這わせるが、“奴”を捉えるには至らない。逆にいえば、“奴”はいつでもレイヴンを奇襲できる。

レイヴンの回避行動をせせら笑うかのように“奴”が仕掛けてくる。腹部を裂傷、しかし傷はそこまで深くはない。腕部を裂傷、しかし傷はそこまで深くはない。背中を裂傷、しかし傷はそこまで深くはない。多少程度の流血に収まる。

傷跡を確認、引っ搔いたような傷跡、動物的生体の可能性が大。

敵の情報を集束させ対処方法を考える。

レイヴンは思惟する、奴に足りないのは攻撃力、つまり奴は決定力に欠ける攻撃しか持ち合わせていない。

手数重視、一撃が弱いなら何度でも攻撃するまで、というコンセプト。

まだカードがあるかも知れんが、ワンパターンの攻撃方法しかしていない、ならまだ時間にゆとりはある。

奴の動きを掴まえる情報はないか、とレイヴンは周りを見渡す。

偶然か必然か、レイヴンの視界の端の空間が揺らめく、陽炎みたいに。

「……そうか！ ウィンド、熱源センサーに切り替えろ」

〈了解〉

レイヴンの視界が熱を発するもの、人体や動物などを見分けるセンサー（サーモグラフィーに近い）が表示される。

そのセンサーに映る物体、かなりの速度だが捉えきれないわけではない。

「やはりな。風景と同化していたか」

奴の超スピードで自分の動体視力では捉えられないと思い込んでいたが、実際は風景と同化し姿を隠すことで、あたかも見切れない速度で飛行しているように見せ掛けた。

種がわかれば、極端に簡単なハナシだ。

熱源センサーに映る物体はどことなく中途半端に擬人化した鳥のような感じの動物、目測で170センチ。

奴は翼を振るい旋回、レイヴンから見て真後ろに移動する。

そして一気に加速、その様を例えるなら、砲弾。

自己を弾丸に見立て、翼は葉莢内の火薬が急速に燃烧し弾丸を押し出す圧力。

（チープな能力がバレたのに気付き、とっととケリをつけようという算段だな）

ならば――

「ムーンライト」

青白い光の刃を生成、時間をロスしすぎたと内心で愚痴る。

やるべきことがたくさん待っている、だから一撃で終わらせる。

加速装置点火、複合粒子の赤黒い光が散り、レイヴンの体を前進させる。

砲弾と光刃、それら二つが接触。

「感謝するぜ、間抜け。お前の傲りで俺は生き残った」

ムーンライトの暴力は蚊を殺すかのように相手を射ち貫いた、抵抗などないと言わんばかりに。

へ……魔法士が逃げ始めた、追撃せよ

「ブレード光波」

密集して逃げたのがお前らの運の尽きだ、散開し逃げれば生き残れたものを。

間違った判断だ魔法士ども。

飛ぶ暴力の斬撃、固まって逃げる魔法士達の一人に直撃、そして斬撃が暴れる。

一人を斬り捨てた斬撃は地面に着弾、行き場を失ったエネルギーは爆発という形でエネルギーを放出。

これにより人間5人分のミンチのできあがり、このミンチで何人前のハンバーグができるのだろうか？

といってもカニバリズムをする気など皆目ないがな、ブラックジョ

ークというやつだ。

レイヴンは今回の目的、ワレル族が移送されたと思わしき場所に足を踏み入れる。

ここもハズレなら、通算122回目になる。

ターナルより情報を教えられた日から3ヶ月が経つ。

一番可能性の高い箇所を優先的に回ったが、どこも無人orなにもない、だった。

だが得られた情報もあった、無人だった場所は人がいた形跡があり、そこから一定期間内にワレル族の隔離場所を変えている、と推測できた。

森をかき分けて進むと、無骨なコンクリートで作られた倉庫がレイヴンの目に広がる。

縦幅5メートル、横幅5メートル、窓などがなく、なにかを隔離している印象を受ける。

倉庫の周りは森林で囲まれて鈍色のコンクリートは目立つ、保護色で塗装すれば多少誤魔化せるものを。

結構な人数が護衛にいた、ならばなにかしらのモノがこの倉庫に隠されている。

だから今回は期待できる。

ドアを捻り開ける、倉庫内は薄暗い、監視用に暗視センサーを起動。名称通り、暗視を視覚できるセンサーで倉庫内を探る、中は天井、側面、地面関係なく幾何学模様で装飾され、その中心になにかが蠢く。

〈生体反応、1。照明代わりに複合粒子を放出する〉

複合粒子の赤い光が照明代わりになり、暗視センサーを切る。

赤く照らされる倉庫内、イスに固定され猿ぐつわを噛まされた亜人を視認、ワレル族だ。

必死にもがいている、ここから逃げるように。

レイヴンはわざと足音をたてる、自身の存在を気付かせるためだ、ビクッと体を震わせる亜人。

「心配するな、怪しい者ではない。といっても信じられないかもしれないかもしれんが」

できるだけ優しい声音に気を付ける。

「〜〜！　　〜〜！　　〜〜〜〜！」

亜人が声を上げるが猿ぐつわの影響で呻く声しか聞こえない。

「ハハン？　なに言ってんだ？」

「〜〜！　　〜〜〜〜、　　〜〜〜〜！」

「ちよいと待て、猿ぐつわを取る。そうビクビクするな」

怯えた表情の亜人、安心させるため丁寧に猿ぐつわを取る。ついでに亜人の奪われた自由を解放する。

「あ、貴方は誰ですか！？ さっきの人達の仲間ですか！？」

亜人は即座に距離を取り恐怖を滲ませた声音で訊いてくる。

「いいや、違う。俺みたいな善人が悪人なわけないだろ？」

「悪人面の貴方に言われても説得力がありません！」

大声を出すことにより恐怖を押し殺し自制を保つ。

「コイツはヒデェ」

レイヴンは演技くさい傷付いた顔をする、それを見た亜人は慌てたように言った。

「い、いえ、その……違うですよ！」

なにが？

「えっと、そのなんと言いますか……別にけなして言ったわけではなくてですね」

あのゝとか、えゝとですねとか言って口ごもる。

助けてもらった相手に、お前は悪人だ、言ったようなものだから罪悪感が働いた。

「まあ、ここいらで茶番は終わりにしてだな」

「本心じゃないと言いますか——って茶番！？」

「俺みてえなのが善人なわけねえだろうが！」

本題に入ろうとしたが、その場のノリで亜人で遊ぶのを繰り返す。

「やっぱりさっきの人達の仲間なんですか!？」

亜人は半歩後退りする、恐怖で再度顔を歪ませる。

なにも知らずに遊ばれる身としては堪ったものじゃない。

「ウエヘッヘッヘ」

奇抜な笑い声を上げ足を前に踏み出す、この前のターナルで遊んだ時と同じくノリノリだ。

「きゃあああああ！」

「待てえええい」

全力で逃げ出す亜人、それを追い掛ける変態。
建物自体あまり広いとはいえず、すぐに壁に退路を阻まれる。

「ウエヘッヘッヘ」

「……いい加減にした方がよいのでは?」

見かねたウィンドが遠回しに終了勧告。

「少し遊びすぎた。――さっきのはジョーク。成り行きだが、俺は
アンタを助ける者だ」

「……………ジョーク？」

恐る恐る訊いてくる。

「そうだ、ジョーク。要はアンタで遊んだ」

「……今は遊ばれたことに対してはなにもツツコまないことにします。貴方が私を助けるという話、本当ですか？」

「無論本当だ」

それを聞いた亜人は安心したように胸を撫で下ろす。

「……あと成り行きとは？」

「俺はここに用があった、それだけの話だ。だが、そんなことはどうでもいい。アンタはワレル族、で合ってるか」

「はい、合ってますけど」

ピコピコと人間の耳に当たる部分の獣耳を揺らし肯定する。

「続けて問うが、アンタはいつ捕まったんだ」

洗脳されている様子はない、至って健全な少女だ。

「一昨日くらいです」

「捕まっている間、連中からなにかされ——」

とレイヴンの質問が言い終える前に、くうくと可愛らしい音になる。発信源はワレル族の少女の腹部、つまり空腹の音色だ。

音色を響かせた本人は顔を赤らませ俯き、そして弱い声で言った。

「……あの食べる物持ってませんか？ 捕まっただけなら何も食べてなくて」

「悪いが携帯食料しかない、構わんか」

「構いません。贅沢なんて身を滅ぼしますから」

「慎ましい性格だな」

バックから棒状の固形食料と干し肉を手渡す。

「すみません、初対面なのにこんなこと頼んで」

それらをその場に座り細々と食べながら、申し訳なさそうに亜人の少女は言った。

「気にするな」

大事な情報源だ、優しく接するのは当然のことだ。

倉庫内をなにか他に情報がないか探る、成果はこれといってない。あるとすればこの倉庫内に広がる幾何学模様、魔法行使を阻害する効果があるとわかったぐらい。

だからかとレイヴンは納得、捕まっただけとしても魔法でも使って抜け

出せそうだが、魔法が殆ど使えないでも仕方ない。

それからレイヴンは少女が食事を終えるまで倉庫内を歩き回った。

16話 敵性接近（前書き）

今回頑張ってみたら案外早く投稿できた——いや、そこまで早くはないですね。

ホントすいません（笑）

16話 敵性接近

暇つぶしに倉庫内を歩き回るレイヴン、まだ亜人の食事は終わりそうにない。

「……貴方はここに用があるって言っていましたけど、どんな用なんでしょうか？」

食事を続けながら亜人の少女は気になった疑問を口にした。

「デカイ仕事。一般大衆の固定概念を真っ向から破壊、そして新たな固定概念の再構築、とでも言っておこう」

恰好付けた言葉、それでいて曖昧にレイヴンは返答。

「固定概念の破壊、再構築。それはいったい？」

この亜人の少女は知的好奇心が旺盛のようだ。

「ソイツは内緒、秘密。これは極秘事項。生憎だが、初対面のアンタに言うわけにはいかない。どこから情報が漏れるかわかったもんじゃないからな」

「そう……ですか、残念です」

そう言われたらこれ以上は踏み込めない、大人しく引き下がる。

「ところで、アンタ。——ああ、食事を続けたままでいい。アンタが一昨日から捕まりなにか聞かなかったか？」

「なにかとは」

「あゝと、そうだな。例えばアンタをどこかに連れていくとか、どこかの国に移送するとか。なんでもいい、なにかないか？」

「…………カタストロフィーがどうたらこうたらという話を聞きましたけど、それ以外はなにも」

「カタストロフィー、か。どこかで聞いた、どこだ？」

自問するが、答えはでない。

レイヴンはこの3ヶ月、ワレル族の搜索と平行してこの世界の知識を吸収した。

その知識の中にカタストロフィーという単語もあるが、知っているだけで、その言葉が人物名なのか地名なのかわからない。

レイヴンは残念ながら頭の出来はよくない、そのため一度に大量の知識は覚えきれない。

それが今回露になる、レイヴンは首を捻るが最終的に思い出すことはなかった。

「んぐんぐ、ごちそうさまでした」

手の平同士を合わせ、自身の栄養源となった食物に感謝する。

「腹は膨れたか？」

幾ら考えても出ないから思考を放棄、あとで調べることにした。

「はい、十分です」

「ならいい——」

〈転移反応確認〉

「なんだと」

転移は、一種の移動方法で長距離を一瞬で移動する魔法だ。

これを使える奴はそうそうに居ない、なぜならば“特化魔法”と呼ばれる種類の魔法だからだ。

名の通り、特化魔法はそれに特化するあまり、他の魔法が使えなくなってしまう。

つまり、この転移魔法なら転移魔法以外の魔法は使えない、ということだ。

だから使える奴はあまり居ない。

転移魔法はなかなか便利だがそれ以上に便利な魔法があるため、余程酔狂のな奴以外は転移魔法を取得しようとはしない。

「どうかしたんですか？」

事態を理解することができない少女は首をかしげる。

〈南東、距離1200。数17、今も尚増加中〉

「チッ、速すぎる。——アンタ、緊急事態だ、急いでここから離れるぞ」

少女の腕を掴み、早足で倉庫から出る。

〈数79。個体特定、人間が37、魔物が40、不明2〉

「それなりに多いな。マールヴを具現化、牽制射撃をする」

〈了解〉

「それにしても速すぎる、いつこの襲撃に気付いた？　――いや、なるほど、そうか。アノ時か」

レイヴンは疑問を口にしたが存外に解決が付いた、召喚魔法で呼ばれたアノ珍妙な奴と交戦中、残りの魔法士の連中が連絡を取ったのだろう。

「あのー、説明してもらえませんか？」

「簡単なハナシ。アンタを捕まえた仲間がコチラに来ているということだ」

マ―ヴを南東に向けて適当に乱射、モードはアサルトライフル。長期戦に向かないレーザーライフルは使用しない。

「ええ！　大変なことじゃないですか！？」

「だから逃げてるじゃねえか」

「あっ、そうですね」

「頭に蛆でもわいてんのか？」

トントン、と自分の頭を軽く叩きバカにしたようにレイヴンは言った。

「……レディにそういう物言いはいけませんよ」

素敵な笑顔、花開いた笑顔、悪鬼羅刹の顔、少女の表情を言語化したらこの三つのどれかだ。
個人的に三番目を推したい。

「失敬したな。そら走れ、敵は待ってくれんぞ」

できるだけ素敵な、花開いた、悪鬼羅刹な笑顔を見ないように先を促す。

「わかってます」

〈敵、295に増えた〉

「随分ご執心だな、ワレル族の人間に対して」

マーズのモード変更、エネルギーを意図的に低下させレーザーを数発ほど、背後に向けて引き金を絞る。
こうすれば、砲身に発生する熱量が少なくなる。

「さっきから誰と話してるのですか」

やはりと言うべきか、第三者から今のレイヴンはただ独り言を言う変人。

少女のレイヴンを見る目がそれを物語っていた。

「ソイツも極秘事項ってことだ、言うわけにはいかん（まあ、面倒なだけだが）」

「そうですか、残念」

〈敵、473まで増えたところで増加は終了。個体特定、人間が1

98、魔物273、不明2〈

余程逃がしたくないらしい、結構な人数を用意してきた。

「射撃地点よりコチラの居場所がわかるな。――物質構築をポイントG―7に円形状に構築しろ」

〈了解。なにをするつもりだ？〉

「見ればわかる」

ポイントG―7、左100m先に円形状の壁を構築、そこに向けて射撃、物質構築で作られた壁が弾丸を跳弾させ、敵部隊へ突っ込んで行く。

「小細工だが、目は紛らせる」

「凄いですねえ」

〈・・・dominant〉

暢気に感心する少女と、どこか疑惑と確信が入り混じった雰囲気でウィンドが書く。

dominant、どういう意味かは不明、ウィンドはなにか知っているようだ。

「dominant？　なんだそりゃ」

〈なんでもない、気にするな。――不明2が急速接近〉

「……アンタ、この木の影に隠れてろ。守りながら戦うのは難しい

からな。――このナイフを渡しておく、一応な。自衛程度にはなるはずだ」

少女の手を引き、大木の影に隠れさせる。

そしてオルドから詐欺られて貰った大型ナイフを、そのか細い手に握らせる。

「わかりました。健闘を祈ります」

親指を立て少女は、自分のために戦わせてしまう目の前の男に申し訳ない気持ちで言った。

それに片手を振って応えるレイヴン、敵は目前に迫る。

「おええっ！――嫌なもの見ちまったぜ、畜生が」

〈恐らく、先ほどの個体の上位体。油断してハマするな〉

先ほどの中途半端に擬人化した鳥のような奴、いま視認している奴は完全に擬人化していた。

背中に羽を生やしムキムキマッチョな男が2体、全裸で。

レイヴンは心底思った、擬人化するなら女だろうが。

なにが悲しくてムサイ男の裸体を見なくてはならんだ、ファツキン。

「消すぞ。不愉快だ」

〈同感だ。敵個体、射程範囲内。いつでもやれ〉

一分一秒たりとも長く目にしたくない、だからマ―ヴを乱射、合計75発の弾丸がマッチョ野郎どもへ襲撃。
着弾――0。

「侮ってもらっては困る」

広範囲に弾丸をばら蒔いたが、弾丸と弾丸の合間を縫って余裕と言いたげな態度で避けた、2体のマッチョ。
その重そうな見た目とは裏腹に機動力、運動性は高い。

「我らはエアマスター。空の主。そんな他愛ない攻撃など中るはずも――」

演説口調で偉そうに喋るマッチョな男Bの声が途切れ、その鋼鉄の肉体は重力の鎖の絡まり、地へ堕ちていく。

「名付けて、レフレクト・ショット」
〈安直すぎるな〉

乱射した風に見えたが、物質構築で作られた壁で弾丸を反射させ、背後から急襲。

マッチョAは動物的直感でその場を離脱したお陰で存命だが、マッチョBは自分達がいかに有能か語ることに夢中で、体の至るところに風穴が空き、生命活動を停止した。

「ラザアアア！」

それを目にしたマッチョAは絶叫、こんな若造に我らが容易く殺られる。

そんなバカにことはない、レーザーは少し疲れただけで、休憩に地に降りただけだ。

現実を認めようとしないう自称空の主。

「シンプリーズベスト、という言葉って知っているか、ウィンド」
〈ストレートすぎるのもいかなと思うがな〉

マッチョAがマッチョBの亡骸を揺する、だが反応はない。
当然だ、命はそこにはない。

「……相棒、最近辛口になってないか？」
〈気のせいだろう。――戦闘は続いている、お話はここまでだ〉

「オーライ。――じゃあな、マッチョ、あの世で筋トレに励んでくれ」

マーヴのモードを変更、レーザーライフル。
複合粒子の光、赤いレーザーが2体を吹き飛ばす、塵など残らない。

無抵抗だった2体を躊躇いなく背後から撃った。
人から卑怯と罵られ軽蔑される行動。

しかしレイヴンに言わせてもらえば、殺れる時に殺る、変なプライド持って死ぬよりかは、卑怯やって生き延びる方が断然いい。

〈敵群、距離800まで接近〉

レイヴンは思考する、あまり時間が残されていないため頭をフル回転。

レイヴンと亜人、二人が無事に生き残るための効果的プランを思惟

する。

レイヴンに亜人の少女を見捨てるという選択肢はない、無論弱きを助ける正義感が働いたわけではない。

少女が大事な情報源だからだ、みすみす死なせ、また情報収集の旅を続けるのはご免被る。

ただそれだけのことだ。

ワレル族の少女を守りながら戦う、このプランは却下。

理由は防衛対象という枷が機動力低下を意味し、機動力低下は被弾率の上昇を意味する、だから却下。

次案は、レイヴンが囹として敵中央で暴れる。

多少危険だがコイツを採用することにした、やり易さで言えばこの案の方が断然いい。

「ムーンライトを具現化」

〈了解。プランは？〉

「敵中央で暴れ――」

「よお、レイヴン。調子はどうだ？」

レイヴンの言葉の途中でそれを遮る聞き覚えのある声、声質は幼い。

なんとタイミングがいい、流石だぜ――

「幼婆。調子か、上々だぜ。重要参考人を見つけた」

レイヴンの隣に唐突として現れたターナル、転移魔法を使って現れたのだ。

ターナルは人間には到底生きられない年月を経て魔法技術を磨き続け、例外的存在になった。

通常魔法から特化魔法まで制限なく使える例外的存在、まさに人外。

「どこにいるんだ」

「アチラの大木の根元に隠れている。――そうだ、アンタの転移魔法で逃げるか」

「なんの話だ」

「目標近付く、距離600」

複数の草を掻き分けコチラに迫ってくる音、その方角をレイヴンは親指で指す。

「追手、か」

「そーいうこった」

「なんと不甲斐ない。アノ程度の人数を壊滅させることもできんのか」

呆れた口調でターナルが肩を竦め言う。

「オイオイ、幼婆、老化が進んでんのか？」

それに対しレイヴンはバカにしたような口調で返す。

「なに」

「ヘタに殲滅したら、黒幕に余計な警戒を抱かせるだけだろうが」

「……それもそうだな」

「そして、俺たちがワレル族について嗅ぎ回っているのは薄々だが感付かれている。あまり警戒を抱かせることはしない方が吉だ。この場所に護衛兵が十数人居たが、それなりに手練れていた」

高価な装備を纏った兵士、熟練した魔法士、たかが一つの小さな倉庫を守るにしては過剰気味の戦力。

「どこの者かわかったのか？」

「護衛兵はライジング王国の紋章、日の出の象ったエンブレムを付けていた」

そうライジング王国のエンブレムを付けていたのだ、思わぬダークホース。

尤も疑問が浮かんでくるが。

後ろめたいことをしている、そんな時に自分を特定するモノを身に付けるかというハナシだ。

例えるなら、殺害事件を起こした犯人が、自分の免許証を犯行現場に態々残す、といったところか。

なんて優しい犯人だろうか、警察が労せず捕まえることができる。

カノープスを明確な黒幕に仕立て上げたいわけではない、だがツツコミどころが満載な国を疑うのはごく自然だとレイヴンは思惟する。

「――そろそろヤバくなってきた」

先ほどのうっすら聴こえた草を掻き分ける音は、いまははっきりと聞こえる。

急ぎ足で大木の元へ戻る、隠れていた亜人の少女は両手を合わせ祈っていた。

なんと律義な、ホントに祈っているとは。

「おい、アンタ。予定変更だ、コッチに来い」

「ほえ？」

目をぱちくりさせ、呆けた声を上げる。

「幼婆、準備は？」

腕を掴み引き寄せる、魔法行使の準備をするターナルへ近付く。

「万端。――転移」

3人をターナルの転移魔法が、長距離まで運ぶ。
ホント便利なモノだな、魔法というやつは。



「現在ガーベラは北東、オールドトリザは極南の調査に当たっている。

詳細はこのファイルに記した」

転移魔法で人気ない場所、山頂を勞せず登った。
人気ない場所を選んだ理由は、ワレル族の少女にある。

事実ドチラかまだ不明だが、一般大衆はワレル族を悪と見なしている、なら悪を排するのは当然なことだからだ。

で、その一般大衆から排撃される少女は、いきなりの転移による平衡感覚の混乱で地面に目を回し寝転んでいた。

「いい子だ、よしこの飴をやろう」

子供にするそのように、ターナルの頭を撫でる。

尤も内訳はからかいが100%、労っているわけではない。

「要るか！ 子供扱いするないつも言っているだろうが、痴呆鴉」

「ソイツを悪かったな」

ターナルは差し出された手を払い除け、代わりにファイルを乱暴に投げ寄越す。

「……なかなか当たりがこないな」

ファイルを開き中身を確認するが、めばしい成果はない。

ワレル族が移送されたと思わしき場所はかなり数の数に上る、そのためレイヴンたちは拡散して搜索に当たっている。

レイヴンは単独、オールドトリザの二人、ガーベラも一応単独、ターナルは連絡係で基本的にガーベラに付いている。

「そう物事は上手くないかない。気長にやるしかあるまい。それで、その少女からなにか情報は得られたのか？」

ターナルの今の様子を見る限り、マスターのことは吹っ切れたようだ。

マスターの伝言、離別の言葉を聞いたターナルは目も当てられないくらいに落ち込み悲しんでいた、しかし今は気持ちの整理がつき落ち着いている。

「カタストロフィーって単語が聞こえた以外知らんらしい。どういう意味かわかるか？」

「300年ほど前に起こった大隆起現象の俗称だな。それ以外はよく知らん、まったく興味がないから」

「はい、私知ってますよ」

思わぬところから挙手。

「知ってんのか？」

「知ってるから挙手したんじゃないですか。頭わいているですか？」

少女は自分の頭を軽く叩き、レイヴンの真似をする。

「ファッキン。やり返されたぜ」

レイヴンは苦々しげに悪態をつき、少女は仕返しできて満足そうな表情をする。

それから少女はカタストロフィーについて語り始めた。

16話 敵性接近（後書き）

dominant…ドミナント、この意味を知っている人に言っておきます、それとは意味合いが多少違いますのであしからず。

17話 逃避森林（前書き）

書いて消して、それらの繰り返し。

これがスランプというやつですかね。

まあ、スランプになるほどの文は書いていない駄作者ですけどね。

これから更に更新速度が低下するかもしれませんが、本当に申し訳ないです。

17話 逃避森林

カタストロフィー、300ほど前に起こった大規模な地殻変動の俗称だ、単語の意味は大災害、まさにそうだった。

人、家畜、動物、魔物、大国、小国、被害対象は無数に上る、その時代を生きていた者にとってカタストロフィーは、文字通りの地獄だった。

今より317年前に起こった大規模な大隆起現象、1500mほど一部の地面が上昇した。

下から見上げれば変な形の山、尤も山のように上に上がるにつれ細くはなっていないが。

最大直径5km、最大横幅7km、菱形に似た形に切り取れた地面は、空から地上を見下ろす。

後に人々はその大地を『ブラッディグラウンド』と名付けた。

その大隆起現象に巻き込まれたのが当時のカノープス王国、死者重軽傷者は合わせて四千万人強、カノープスの被害は甚大だった。

だから血濡れた大地と名付けられた、四千万人強の血がその大地に流れ出たために。

しかしこれだけに留まらなかった。

オイガミ、ライジング、他の小国など関係なく限定的又は大規模に地面は次々に隆起していき、それが理由で滅んだ小国は数知れず。

なぜ大隆起現象が起こったかは未だに謎、一説によると神の裁きだとか。

当時の国々は、互いが互いを滅ぼしあい、殺しあい、蹂躪しあった。それを嘆いた神が戒めを込め大隆起現象を起こした、……説得力に欠けるいい説だ。

しかしそれ信じているのかは不明だが、カノープス、オイガミ、ライジングはたまに戦争は起こすが、そこまで規模は大きくない。じゃれあい程度の戦争、する意味があるのか疑問だが、戦わずにはられない人間の原始的な感情だろうか。

ブラッディグラウンド、こう名付けられた大地は今も尚隆起したまま。

そしてその大地は凄惨な記憶から人々が畏怖し恐怖し忌み嫌い寄り付くことはない、未だに。

「——と、こんな感じですね」

説明を一気に終えた少女は軽く息をつく。

「なるほど。存外に答えは目の前に迫っている」

「だな。小生もお前の考えに同意だ」

「なんの話ですか？」

「ブラッディグラウンド、アンタを連れていくとしたらうってつけ

の場所だな」

それに集合させてるのかも知れん、他の捕まえたワレル族を。3ヶ月も捜してこの少女以外のワレル族の発見には至っていない、なら考えることは、単に見つかっていないだけか、一ヶ所に集められているか、はたしてドチラなのだろうか。

「高さ1500m、登るのに一苦勞、二苦勞人も掛かる。それに人も寄り付かんしな。やましいことをする場所ならうってつけだ。お前の言ったことが事実ならばな」

「事実ですよ、私が極端に保証します」

えっへん、と言わんばかりに胸を張る、ターナルは親の仇でも見るかのような目で少女の胸を睨み付ける。

少女の胸は年若いながらも育っていた、ターナルの絶壁と違って。尤もそれは仕方ないことで、永遠を生きるターナルの体は成長が止まっている、だから育たない。

無常という言葉がある、永遠不変なものはないという意味だ、しかしこの言葉はターナルには当てはまらない。

一生、永遠不変、常住、変わらずにロリータだ。

「な、なんです。極端に怖いんですけど……」

ターナルの目付き気付いた少女は狼狽、若干怯えている。

「なんでもない」

なんでもない、と言っているが殺意風味の視線は少女の胸に固定さ

れている。

自分の育たない体にコンプレックスを抱いているターナルは、豊かな胸部を目にすると思わず睨んでしまう癖がある。

「な、なんでもない風に見えないんですけどお」

「な、ん、で、も、な、い！」

一語一語強調して、それでいてやっぱり視線は胸部に釘付けで、ターナルは言った。

「は、はひい」

小さい子供に涙目で怯える、外見年齢15、6歳の少女、アホみたいな光景だ。

「そう怖がらせるな」

「チッ。——もう帰る」

自分の胸部に手を添える、だがない、ないのだ。

貧乳レベルではなく、コイツは……無乳だ。

そんなことを考えてしまったターナルは泣きたい、眼球の洗浄液を枯らすまで流したいと思った。

会社に長年勤めていたサラリーマンがある日突然、不況の波の影響でクビにされ、妻にそれを知らせたら手の平を返したかのように見捨てられ、もう残り人生なんか全うできねえよ、そんな絶望した感じのため息がターナルから吐き出された。

「オイオイどうしたんだ、幼婆。——気にするな、一種のステータスだぜえい」

親指を天に突き立て、第三者の目から見れば元気出せよ、といったように見えるが、違う。

ターナルは見抜く、この糞鴉は明らかに楽しんでいる、小生の葛藤を。

ぶん殴りたい——いや、ぶち殺したい！

「……ブラッディグラウンドについて色々と調べることにする。それとこの情報を他の奴らに伝えねばならん。お前はソイツに同行し元の居場所に戻してやれ」

とかなんとか考えた、しかし実行したらそれこそ惨めだ。

ターナルは思いとどまり大人な対応、つまらなそうな顔で小さく舌打ちをするレイヴン。

なんとなく勝った気分になって気持ちが和らいだ。

「オーライ。元よりそのつもりだ」

ワレル族に借りを作つとくのも悪くない。

「精々送り狼にならんようにな。まあ、そんなことをする屑野郎ではないと思うがな」

他人に興味がない鴉に人を襲う愚考など思い付かない、そうターナルは無意識に思う。

「ご心配無用とっておくぜ」

「……それはそれで安心ですけど、なにか極端に傷付いた気分です」
私ってそんなに魅力がないんでしょうか？

「なんだ襲ってほ——」

「極端にお断りです」

きっぱりさっぱりばっさり斬り捨てご免な少女。

「……即答はねえだろうが、即答は」

言い終わらぬ内に少女が否定する、不貞腐れように呟くレイヴン。

「——3日以内に小生の家に来い。あまり時間を掛けすぎると手遅れになるかも知れん」

考える素振りをしていたターナルが言う。

「手遅れ？　　どういことだ、幼婆」

なにかしらの危険をはらんでいる、そう匂わせる手遅れという言葉。

「言葉通りの意味だ。さっさとしろよ」

そう言い残すと転移魔法で消え去る。

それを見届けるレイヴンと少女、現れときと同じく去るときも一瞬で姿を消す。

手遅れ、なにか情報を掴んでいるのか、それとも……

ターナルの思考内容は不明、他人の思考はレイヴンには、普通の人間には読めるはずもない。

できるのは推測程度、といっても推理力が特段あるわけでもないレイヴンの結論は、よくわからん。

とりあえずこの亜人を帰すことを早急に終わらせる。

「で、アンタ。どこ行きやいいかわかるか」

これが明確にわからないと大幅なタイムロスに繋がる。ターナルの手遅れ発言を聞かされたレイヴンとしては、賢明な解答を要求したい。

「ん〜、たぶん。アッチ、かな？」

考える素振りしたあとに出た答えは、適当な解答。レイヴンは、適当の意味をいい加減の方で認識。

「——うん、確定です」

少女は頷き自信を以て言葉を繋いだ。

「なんだ、指向性電波でも拾ったか」

最初は自信なさげに、その次は明確な言葉の急速な移り変わりに、レイヴンはそれを電波と評した。

「電波の意味はわかりませんが失礼なことを言っているのはわ

かりました」

ワレル族は未開人だ、科学といった近代文明はよくは知らない。科学を使いどんな事象をもたらすのか多少程度しか知らない、わからない。

少女はわからないながらもレイヴンの言葉の響きで判断した。

「正解。で、根拠はなんだ。勘ではあるまい」

「……種明かししたいところですけど、極端に秘匿されていることなので言えません。ですけど、確かです」

「ならいい、確かならな。——おら、行くぞ」

少女が指を指して示した場所、木が生い茂る森林、そこへ足を働かせ向かう。

自然再生が行動理念なワレル族の居場所、帰る場所は自然の中、そこまで自然に拘る理由はなんだ。

「はい」

まあ、俺には関係ない、それなりの理由があるのだらう程度の認識でいい。

これ以上関わることはない、はずだから……



深い森林の中心を目指し潜る二人の男女、数時間歩き続けた亜人の少女は顔色は疲労に彩られていた。

「……………」

レイヴンは前を歩き進行に邪魔な木枝をナイフで切り取り、そこいらに放り捨てる。

「…あ、あの……ちょっと休みませんか」

流石に無視できないほど疲れた切った少女は、控え目に提案する。自分の事情を相手に押し付けない謙虚な性格のようだ、この少女は数時間も弱音を吐かず歩いた少女を、十分頑張ったと思ったレイヴンは提案を受け入れることにする。

「そうだな。小休憩というこう」

レイヴンはバックから飲み物を取り出し、疲れた切った少女に渡す。
ペットボトル

感謝の意を表しそれを受け取った少女はキャップを捻る。

「んくんく、ぷはっ。冷えて美味しいですね、これ。——ただのバツクのようなですけど、なにか仕掛けがあるんですか」

渡されたペットボトルの中身は存外に冷えていて、それに驚く亜人の少女。

「小型の温度調整器が付いているんだ」

「温度調整器？ 魔法技術で作られているものですか」

「違う、科学技術だ」

少女の、好奇心に彩られていた表情が固まる。

「……科学技術。オイガミ王国が発展の主体として掲げる技術。悪魔の技術ですよ、科学は」

嫌悪を露に少女は毒を吐く、レイヴンは軽く驚いた。
恨みといっても差し支えない少女の様子に。

「フムン。ソイツはどうしてだ」

「魔法と科学、ドチラが自然に優しいと思いますか」

質問に質問で返される、自然にそこまで執着しているはなぜだ、と思ったがとりあえず少女の質問に解答する。

「やはり魔法でもないのか」

レイヴンが元居た世界は、進んだ科学技術の影響で、近視的（向こう見ずな）な開発による自然破壊。

化石燃料の枯渇の危機、大気の汚染、限りある資源の消耗、色々の事象が合わさり地球は限界だった。

進みすぎた科学は、現在の人類に繁栄をもたらし、そして、未来の人類に対し牙を突き立てていた。

結局のところ便利さを追求したばかりに自らが住む場所を破壊するという本末転倒なことをしているのだ、レイヴンの故郷は。

「正解です。魔法と科学、総合的に考えて有能なのは魔法なんです。だから科学は滅ぶべきなんです、自然のために」

例えば火を起こすでしょう、魔法は相応の魔力を支払えば火は簡単に起こせる。（一部の者を除く）

だが科学で火を起こしとなると存外に手間が掛かる。

この世界でオイガミを中心に普及しているガスコンロでは可燃性ガスの常時供給、ガス供給の調整、限りある資源を使わなければならぬ。

そこまで自然に拘る理由はなんだ、と口を開きかけたが訊くことをしなかった。

訊けば話しが長くなりそうで日が暮れる。それに面倒は嫌いだ。

レイヴンは、そうだな、とどうしてもよさげに返す。

「そろそろ休憩は終了しよう。あとの程度で着くかわかるか」

どうしてもよさげな態度にムッ、とした少女、しかし自分の価値観を無理強いするのは反感を招くと思い、レイヴンの問いに答える。

「3時間以内に着くと思います」

「日が暮れる前には着きそうだな。じゃ、行こう」

二人は立ち上がり、砂を払い除け、レイヴンが先頭をいき再度深い森を潜り始めた。

18話 山猫渡鴉

深い森を歩き続ける男女、二人は黙々とひたすらに歩く。

先頭をレイヴンがナイフ片手に、その後ろを亜人の少女が、なにかうねるようにして足を働かせている。

「どうかしたのか、アンタ」

「……いえ、ただなんとなく違和感が……」

「もしか、道に迷ったのか？」

先ほどの電波はどうした、圏外か？

「それは大丈夫です、この先を真っ直ぐ進めば着きますから」

「んじやなんだというのだ」

少女は考える素振りをしたあと、重々しく口を開く。

「……誰かに見られているような、そんな感じです」

〈IFFに応答なし〉

ウィンドは、周囲に敵生体は存在しないと、すかさず報告した。

IFFは、identification, friend or foeの略で、敵味方識別装置という意味だ。

原理は、高度に暗号化された電波を放出し、相手の解答により自動的に敵味方を識別する装置と、敵意、殺意、害意といった抽象的な

物に対しても反応する装置をも備えている。

I F Fに反応がない、ならこの少女の勘違いなのかもしれん。

念のために、レイヴンはウィンドにもう少し探らせる。

「スーパースーチ、各種センサー類起動」

熱源センサー、パッシブソナー、動体センサー、赤外線センサー、光源センサーなどで辺りを最大限探るが反応なし。

「アンタの勘違いだろう」

「うーん、そうなのかもしれませんね。——気にせず先を急ぎましょう」

「オーライ」

気を取り直し先へ進む。

ウィンドの索敵範囲外に“ソイツ”は居た、宇宙船が飛ぶには低すぎて、飛行機が飛ぶには高すぎる高度3万メートル。

中量級の軀、赤と黒のツートンカラー、右手にレーザーライフル、左手にはレーザーブレード、右背中に6連装ミサイルランチャー、左背中にグレネードキャノン、そして、左肩に黒い球体の中にオレンジ色で『9』と書かれたエンブレム。

3ヶ月以上前にレイヴンが戦って機人だ。

ソイツは、確かにレイヴンに視線を合わせていた、こんな高高度から。

目的不明、意図不明、ただじっと浮かんでいた……



「デカイな」

感心した風にレイヴンは無意識に口を開いていた。

2時間ほどかけて目的地と思わしき場所、えらい大きな木がそびえ立つところに着いた。

「すごいでしょ？　これこそまさに、長い長い年月をかけて育んだ自然の神秘です」

少女は、自分のことのように自慢気に言う。

その木は、大人が数十人かけて囲まなければならないほどの太さ、首を最大まで上げても見えないくらいの高さ、圧巻だ。

ほお、どうしてもよさげなにレイヴンは返す。

「んで、どうするんだ」

着いた方がいいが、このデケエ木以外ない、どうやって帰るんだ？
その、どこか神聖な木の表面を触りレイヴンは訊いた。

「詳しくは言えませんが、この神木を使ってあることをするとたげは言っておきます」

これはワレル族の者以外に教えることは禁じられている、たとえば恩人だろうとも。

レイヴンは記憶を掘り起こす、神木、確か膨大な魔力を蓄積させている特殊な木だったか。

その木は莫大な魔力に物を言わせ、自分自身を恒久的に成長させる性質を持っている。

その昔、神木の桁違いな魔力に目がくらんだ人類は軍事利用できないかと色々と試したが失敗に終わったらしい、多数の死傷者を発生させて。

詳しくは知らないが、魔力の暴走により大規模の魔力爆発、それは大多数の死傷者を作り、人類は畏怖した。

神の力、人間には制御できない力、だから神木と名付けられた。

それをレイヴンは、アホらし、と断じた。

無神論者なレイヴンは、自分たちの認識を超える事象をなにかにつけて神の仕業を決めつけるのは人間の性か、と心中でバカにしながら思った。

ブラッディグラウンドを作った大隆起現象も神の怒りらしいからな。

しかし、神の力と揶揄されたコイツを不用意に利用してドッカーン、爆殺されるのは勘弁だ。

「大丈夫なのか？ コイツは危険な代物なんだろう」

「えっ？ 神木に危険もなにもないでしょう？」

レイヴンと少女の間に語弊が生まれる、といってもドチラも正しいのだが。

神木は、意識に近いナニカをその大木に宿している。

その意識的ナニカで、自分の魔力を使おうとするものに対して、肯定か否定の判断を下す。

ワレル族が肯定で、人類は否定だ。

神木が差別する理由は明白で単純なことだ、それは自然に対しての見方。

人類は、自分たちの生活を便利にするため容赦なく自然を破壊する、破壊した分の木を植林をすることはない。

人類の自然の見方は、自分たちの生活を便利するための道具程度の認識、それを当然と思っている。

一方、ワレル族は真逆の考えだ、自分たちの生活よりも自然を優先している。

なら神木がドチラを味方を選ぶとしたら、無論ワレル族だ。

害以外の何者にもならない人類を選ぶはずなどない。

「つまり、アンタが言いたいことはワレル族なら大丈夫で、人間はお呼びじゃないと、そういうわけだな」

発生した語弊を解消するため持ちうる知識を二人は出し合い、レイヴンは結論を口にした。

「たぶん。少なくとも私たちには肯定的だったことは確かです」

「ならいい。爆散させられる心配がなくなったわけだからな。——じゃ、準備に取りかかってくれ」

神木と名付けられた果てしない大木より離れレイヴンは言った。

「はい」

レイヴンと代わるように少女が神木の傍に近づく。

〈神木より魔力収縮、転移魔法に類似した反応を確認。該当データなし〉

「類似しているが転移魔法では非ず、どういうこった——ま、どうでもいいがな」

心底興味ありません、と言わんばかりに欠伸を噛み殺しレイヴンは呟く。

神木を中心に、魔力が視認できるほどに濃くなる、色は輝く金。

（目がチカチカする）

眩しそうに目を細めるレイヴン。

少女は神木と向き合いなにかをしている、準備しているのだろう。

「あの！」

すると、少女が唐突に振り返る。

「今更なんですけど、お名前伺ってもいいですか？　このまま名前も知らずに別れるというのは心苦しいですから。それにいつかこの恩は返すつもりですしね」

色々世話になり迷惑をかけて、いつかは恩を返す相手の名前を知らないでは話しにならない。

「不要だ」

右手を軽く振るい、きっぱりと断る。

「……なんです」

無造作に斬り捨てられ少女は、ムツとした表情をする。

「恩返しされたくて助けたわけでも、正義感が働いて助けたわけでもない。ただアンタが有力な情報を持ってそうだから助けた、それだけだ。俺はアンタが思うほどに善人ではない」

俺を正義感溢れた人格者と間違われては面倒だ。

レイヴンは、善意ではなく利用価値があったから助けた、と暴露した。

勝手に期待して、勝手に失望してろ、俺には関係ない。

「……それでも私が助けられたことには変わりはありません、ですから――」

これで怒ってさっさと帰ると踏んでいたが、あてが外れた。

「私はリンクス、貴方の名前は？」

リンクスと名乗った少女、真っ白の髪と空色の瞳を持ち、長い白髪は一本結びにして、人間でいうところの耳には獣みたいな耳と長い尻尾を生やしている。

白い民族衣装のようなものを着こなし、清楚を連想させる。

リンクス、意味は山猫、獣耳に長い尾、この少女は清楚と共に猫も連想させる。

まんま俺と由来が同じだ、偽名か、とレイヴンは疑ったが、どうやら本名のようだ。

「別に恩を返さんでも俺は気にしない」

俺を追ってきてまた捕まっては、助け出した意味がないからな。

「私が気にします。――いますぐには無理ですけど」

頬を掻き困った口調で言った。

リンクスと名乗った亜人の少女、意志が固く、義理堅い人情味が溢れていた。

たとえそれが、利用価値があるから助け出されたとしても。できた人格者、それがリンクスの性格。

「……レイヴンだ、これでいいだろ。――帰りな、山猫」

もし俺を追ってきてこの山猫が捕まったとしても俺にはもう関係ない、この山猫が情報を寄越し、俺はコイツを助け出した、ギブアンドテイクの完成だ。

これ以上はない……だろう。

レイヴンはそう結論を下し、名乗り返す。

「山猫って、……まあ、いいですけど。——いつか必ず、この恩を返します」

リンクスは、金色に光輝く神木に近づく。

すると、神木に取り込まれるかのようにリンクスは消える——転移魔法に似たモノで自分の居場所に帰ったのだ。

「……必ず、ねえ。面倒な性格をしているな、山猫は」

消える寸前、念を押すようにリンクスが「必ず」、と呟いたのをレイヴンは聞き取った。

そしてそれを“楽しみ”にしている自分の無意識に気づいた。

他人に興味がない、そうだったはずの自分がリンクスに興味を抱いている？

無性にタバコが吸いたくなった、懷よりタバコを一本取り出し口にくわえ火を灯す。

「フー、やはりタバコは美味い」

肺を汚れた空気で汚染する、そしてなんとなく空を見上げる。

「……お、飛行機雲——飛行機雲？」

空を見上げたレイヴンは飛行機雲似たモノを視認した、おかしい。オイガミでは飛行機の実用化はまだはずだ、極秘裏に実用化できたのか。

レイヴンはあることに気づいた、なによりもおかしいことに、おか

しすぎて逆に気づかなかった。

その雲は普通とは違っていた。

緑色の幻想的でありながら毒々しい色彩をしていて、レイヴンはどこかで見かけたな、と思った。

（どこだったけなあ——いつぞやの機人か！）

ハッ、とレイヴンは思い出す、不可解な行動してきた赤と黒で塗装された機人。

即座にレイヴンは望遠センサーで毒々しい色の飛行機雲の発生させている機人を視認する。

「光ファイバー通信？」

チカチカ、と断続的に青い光が点滅するのをレイヴンは確認した。

〈解説中——コンプリート。通信内容を表情、『ようこそ、レイヴン。我々は異質同種体である君を歓迎する』〉

メッセージを読みきったレイヴンが吸っていたタバコが無意識の内に手からこぼれ落ちた。

ウィンドが解析したメッセージの『異質同種体』に目を見開き驚愕を露にした。

この言葉の意味を理解したレイヴンは、なぜだ、と心中で絶叫した。この異質同種体がなにを表すかはレイヴンとウィンド以外知る者はいない、オールドやリザ、ガーベラにターナルには隠していた、ソイツらに気づかれた様子はなかった。

なのに一度、しかも短時間しか会っていない機人になぜバレいる？

機人が反転、背中から大出力のブースト、一気に見えなくなった。用は済んだ、と意思表示しているみたいに。今更追いかけても無意味だ、深呼吸をして冷静さを取り戻す。落ちたタバコが雑草に引火しない内に拾い携帯灰皿で揉み消す。

「どういうことだ」

〈不明。私にもわからない〉

どことなく申し訳なさそうにウィンドが返答した。

アノ機人は俺の正体に確実に気づいている、しかし、とレイヴンは冷静に思惟する。

そこまで知られては困ることもない、驚きはするが焦りはしない。尤も知らない方が断然いいのだが。

「……まあ、いい。切迫する事態でもない。奴については追々調べることにして、いまはさっさと帰ることにしよう」

〈了解〉

果てしなくデカイ神木に背を向け、来た道を引き返し始めた。内心で、機人への疑惑とリンクスへの興味を渦巻かせながら。

19話 行動方法（前書き）

まずは謝罪を、申し訳ないです。

ストーリーを練り直していたら大分時間が経っていました。

まだ完全には練り終えてないので、まだこれからも不定期更新になると思います。

長い目で見ていただくと幸いです。

19話 行動方法

異質同種体、アノ機人はそう揶揄し歓迎してきた。門外不出の、最大の秘密を奴は認識しているようだった。なぜだ。

最初は俺を計るような言動を、次はコチラの秘密を難なく知り得、友好的な態度であった。この極度な移り変わりなんだ。――不明、圧倒的に情報が少ない、推測すらできない。しかし宛ならある。

カレード、六体の機人が所属する中立傭兵部隊、ここに行けば俺の疑問が解消される。恐らく、アノ機人もここに所属しているだろうからな、訊けば終わる。まあ、鴨がネギを背負ってやってくると同義だ。ナンセンス、無意味だ。試す言動にイレギュラー呼ばわり、そして不可解な歓迎、なにか大きな裏がありそうだ。俺の隠し続けてきた秘密を知り得ているのは驚きだったが、なんらかの陰謀に巻き込まれるのはゴメンだ。面倒は嫌いなんだ。どういう経緯で俺を調べたのか、どういうルートで俺の秘密を知り得たのか、これらは追々調べることにする、いまは気にしないでいいようだからな。

「行動プランを言い渡す」

目の前に居る幼婆がホワイトボードのようなモノに書き連ね始める。

山猫と別れた俺は急いで幼婆の隠れ家に向かった。遠慮なくドカと我が家の如く中に入ると、優雅に紅茶を啜る四人を視界に収めた。幼婆、オッサン、侍、慈愛だ。

直ぐに俺は手遅れ云々はどうした、幼婆、と訊いたが、どうやら低い可能性の話らしく、そこまで気負う必要はない、と断言した。俺を焦らせる言動をしたのはいったい――そうか、嫌がらせか、なるほど。日頃の俺に対する鬱憤を晴らした、というわけだな。紅茶を啜りながら器用に、幼婆は笑みを深めていたのがなよりの証拠

だ。クソツタレ。

「まずはここオイガミを出て、カノープスに向かう」

「待て、危険ではないか」

と空いていたイスに腰かけ俺が早々に口を挟む。頭のイタイ子を見る目付きで俺は幼婆と視線を交錯。

カノープスに向かう、黒幕と思わしき本拠地へ、か？ 俺たちを発見してくれ、と言わんばかりな無意味で無謀でトチ狂っている行動だ。

「ソイツは心配要らねえ。俺たちの存在は知らてねえからな、容姿的な意味で。事を起こすまではバレない、ということだ」

大柄強面なオッサンが、その体格に合わない似合わない小さなカップで紅茶を口に含み説明してきた。偏見だが強面なオッサンが、女性が飲むイメージの強い紅茶を飲むのは似合わない。

「だから堂々と歩ける、カノープス王国内をな」

「そういうことだ。――カノープスに到着後、ブラッディグラウンドに続いて向かう」

幼婆はホワイトボードに貼られた地図に目印と矢印をつけてわかりやすく説明する。

「着いたら適当に情報収集する、これで終了だ。ごく単純な話だ」

思いの外に早くこれからの行動プランの説明が終わる、早すぎる

といってもいい。まあ、やることはそう複雑なことでもないから、当たり前か。

「収集した情報はどう活用する？」

これが上手くキマらないと、これまでの行動が無駄になる。失敗すれば、ワレル族の迫害は続き、マスターの依頼を完遂は叶わなくなる。マスターから依頼を引き受けた以上、失敗は許されない。

「収集した情報を世界全体に広める。広める方法としては――そうだな、メディアなどの活用だな」

メディアか、一般大衆に広めるにはいい方法だ。良くも悪くもメディアの力は絶大だ。過去に起きた戦争において、いいように民衆を煽り、相手を殺すのに背徳感を感じさせないためメディアを使い自分たちに有益な情報を流し、自分たちの行動を正当化させた。例えば、A国はB国の無価値な捕虜を虐殺した。それを知ったB国は同様にA国の捕虜を虐殺。ここまでなら目には目を、齒には齒をの精神だ。しかし、A国はそれを有効活用。自国の民衆に対し、『B国は捕虜を虐殺する野蛮な国だ、これを赦してはならない。外道なB国を滅ぼしてこそ真の平和が訪れるのだ』と決して自分たちも同様なことをしたとは伝えずに煽り、真に受けた民衆はB国を滅ぼそうと躍起になる。戦争は金が必要だ、そのため民衆から搾り取ることで不満が発生する。溜まった不満は暴動にも繋がり、戦争どころではなくなる。しかし、民衆が進んで金を出したらどうだろうか。つまり、メディアを使い情報を限定的に公開し民衆を煽ることによって、自国を有利な立場に持っていく。合理的で実際に使われた手法だが、人に嫌われる手段だ。

ワレル族Ⅱ悪という形式を固定概念と化させたのもメディアの力のおかげだ。カノープスに極秘裏に依頼されてワレル族Ⅱ悪の形式

を広めた。決定的証拠はないが、根拠ならある——話が長くなるため今回は割愛する。

しかし、どんなにワレル族「悪」ではない”のが真実だろうと信じてもらわなければ無意味になる、それも大多数の人間に、だ。1人が信じてても残りの99人が嘘と断定すれば、そこでそれは偽物となる。つまり、そういうことだ。だから巧妙に上手くメディアを利用して広め、大多数の人間に認めさせるしかない。

「——信用できるジャーナリストに依頼するのが妥当だろうな」

と無口に耳を傾けていた侍が言った。

「金に流されず人に流されず先入観を持たず、常に第三者の視点で物事の肯定否定を判断するジャーナリスト。強者に媚びず、危険から退かず、自分の身すら省みないジャーナリスト——この条件に当てはまる該当者は——」

「「リシャルト・ワイズ」、だな」

オッサンが侍に続くかたちで言った。

聞いたことがある、リシャルトという名のジャーナリストを。かなり高名なジャーナリストで、何度かソイツの書いた記事を読んだことがある。書かれた記事の中身は皮肉の利いた否定的な内容が主で、肯定的なものは少なかったのを覚えている。——といってもアレコレ否定するだけの能無しではなく、否定にするにあたっての根拠と証拠を提示して読者を納得させる記事の内容だった。それ故、名も知れる、というわけだ。……まあ、そのおかげで批判対象からは陰ながら命を狙われているらしい、かなり過激な内容を書いたりもしているから当然なことなのかもしれない。

「——でも、その人にコンタクトを取る方法って有るの？」

慈愛が“尤もらしい”疑問を提言した。尤もらしい、というのは前述した通り、命を狙われているリシャルト・ワイズは自分の容姿的要素は公開していない。だから誰もリシャルト・ワイズという名前は知っていても容姿は知らない。俺も知らない、特段興味もない。ソイツが書いた記事に興味は引かれても、ソイツの容姿はどうでもいい。——慈愛の言った“尤もらしい”理由とはこのことだ。顔を知らない相手を探すのは不可能に近い。

「記事を出版した会社から身元を辿る——いや、無理か。ここまで容姿面の情報がないとなると余程慎重な奴のようだ、早々に尻尾は出さんな」

「南無三、コイツは困ったな」

まさか、情報公開の段階でつまずくとは予想外だ。無論、高名なジャーナリストに頼らなくとも情報公開はできるが、誰も耳を貸さんだろう。俺たちは武力は持っていても、影響力はない。酔っ払いがなにか喚いている、その程度にしか第三者の人々には認識されない。更に言うと、カノープスに俺たちの確固たる存在、容姿面を認識される。つまりは、カノープスお得意のメディアを活用した情報操作で、俺たちは悪（ワレル族）に与する（人間の）裏切り者となる。そうなたらめでたく俺たちも迫害——いや、殲滅対象の仲間入りだ。

だからジャーナリストの力が必要なのだ、高名なジャーナリストの力が。影響力のあるジャーナリストの力が。

「どうすつかねえ」

困った、実に困った。オッサンの言葉に内心で同意し、リシャルト・ワイズヘコンタクトを取る方法を思考する。

「そういや、侍」

そうだ、と俺はコンタクト方法を思いついた。

「なんだ」

「俺の思考回路を読んだ、……確か思考探查魔法といったか。ソイツを使って識別することはできないのか」

リシャルト・ワイズと思わしき奴を片っ端からその魔法で思考回路を読み識別する、大まかに言えばこんな感じだ。難点は時間がかかる、といったところか。

「もしかしたら識別できるかもしれないが、無理だ。なぜならリシャルト・ワイズと思わしき奴をリストアップするとしてもかなりの桁になる。それに思考回路を読んで、熱いジャーナリズムを持つ奴に『お前はリシャルト・ワイズか』と訊いて、ソイツが当たりだとしても『はい、そうです』と答えると思うか」

自分のことは公表しない奴が、そう答えるわけないな、考えが甘かった。結構自信があったんだが、致し方ない、別の方法を考えるとするか。

「……………まったく思いつかん」

「最悪の場合」

幼婆が考える素振りをしたあと、口を開いた。

「――リシャルト・ワイズが見つからなかったら、別の方法にするしかあるまい。一応、方法はある」

流石、幼婆。伊達に歳食ってないわけだ。俺は内心で幼婆を賛辞。決して口には出さん、後々が怖いからな。

「しかし、これは最終手段だ。おいそれと使えない、外道と呼ぶに相応しい手段だから、本音で言えば使いたくない」

それっきり糸で縫い合わせたかのように口を閉じる幼婆。方法の内容を話したくないと見える。それほど外道なのか、逆に知りたくなってきた。――尤も訊きだせる雰囲気ではない。ここは空気を読むむとしよう。

「じゃ、その話はここまでとして。ブラッディグラウンドについてわかったことは？」

「それがまったくだ」

困ったような素振りでオッサンは苦笑い。なんだテメェら、暢気に紅茶啜っていたのはサボりかコラ。俺はてつきり情報を集め終わる休憩でもしているものだと思っていたのだが。

「これっぽっちも、な」

「私が思うに明らかな情報規制が敷かれていた。……なんというだろうか、違和感のようなものが情報を集める段階で感じていた」

「小生もそう思う。疑わしいダミー情報は多数あるが、信憑性のあ
るものはない。だからブラッディグラウンドの正確な位置すらわ
からない」

「おい、ソイツは初耳だ」

「それはそうだ。いま初めて言ったからな」

フフン、と面白げに鼻を鳴らす幼婆。では、どうするのだ。ブラ
ッディグラウンドの場所がわからないでは話しにならない。

「とはいっても暫定的な位置は判明している」

……コイツ、俺をおちよくってやがる。まあ、自業自得か。身か
ら出た錆とも言うか。俺も幼婆——いや、幼婆に限らずだが、人をお
ちよくって遊んでいたからな。逆襲が怖い怖い。今度から“多少
”は自重するかな。

「ファツキン、初めからそう言え」

「初めから言ったら面白くあるまい」

ごもつとも。

「まあ、簡単に見つかるだろうがな。なぜなら1500mもある大
きな物体だ」

「ところで、いつ頃行くの？」

「明日だ」

慈愛が幼婆に訊く。存外に早いな。

「早朝には向かうつもりだ。各自、準備を整えさっさと寝ろよ」

「了解」

「わかった」

「わかったわ」

「了承」

それを皮切りに各々の行動に移る。すんなりとことが運ばいいのだが……

20話 血濡大地（前書き）

約1ヶ月の未更新。

言い訳は後書きに書いときます。

とりあえず、謝罪を。

ホント、すみません。

20話 血濡大地

黒い夜。真夜中。人は、安全な家に籠り、安らかな睡眠。動物は、外敵に怯えながらの睡眠。誰しもが睡眠欲に駆られる時間帯。僅かな月明かりは、朧気に光る。雲が掴めそうな高さ。そこに無数の人影。個と群れが激しく交錯する戦場。松明の灯り。それが、数少ない、視覚を使用できる要素だった。

「オラッ」

レイヴンは、武装展開せず、拳と脚。己の肉体のみを行使する。軋むほど握り締める拳を穿つ。気合いの入った拳は、剣を振りかぶり、コチラを殺さんとする軽装の兵士の顎を貫く。的確に入り、兵士の脳を激しくシェイク。レイヴンは握る拳を解放、兵士の鎧の継ぎ目を掴み、強引に引き寄せ、頭突き。視覚狭窄を嫌った兵士は兜を装着しておらず、モロに頭突きを喰らい、鼻は折れ、激流並みに流血。ついでとばかりにレイヴンは、兵士の股間にヤクザキック。口から蟹のように泡を噴き、意識が消失。

〈警告。後ろだ〉

ウィンドの警告。即座に反応。掴んでいる兵士と立場を入れ換わる。肉を裂く音が耳から脳へ伝わる。相手兵士は、味方を助けるため振るった剣で味方を斬ってしまったのだ。斬られた兵士は地に崩れ、レイヴンは斬った本人を蹴飛ばし、距離を作る。索敵を兼ねて周りを素早く目を這わせる。右を見ても左を見ても、前を見ても後ろを見ても、兵士の群れが存在していた。気が滅入る。四面楚歌、囲まれている。

「コイツはキリがねえな」

連戦で乱れる息を整える暇もなく、包囲網はジリジリと締められてくる。

真夜中の荒野。前回の会議より30時間程度経過。時計は深夜一時すぎを指している。事を大きくすることを嫌ったレイヴンは、真

夜中に襲撃を決めた。そのため、昼間の内にブラッディグラウンドの在処を捜し、見つけた。所要時間、7分。すぐに見つかった。当然か。全長1500メートルの物体だ、見つからないはずがない。――遠眼鏡で、大体の地形把握後、侵入ルートを決め、準備に取りかかった。そして、闇に包まれた夜空から差す月明かりの光を頼りに道なき道の山肌を進む。見張りや罠の類いに引つかからずに順調に進む。“順調に進んでしまった”と、いうべきか。気づいたときには、目一杯映る敵の集団。

――感づかれていたのか。敵を甘く見すぎた。

ウィンドのリーダーは、複雑な地形により機能障害を起こし、使い物にならなかった。レイヴンは、リーダーに頼りすぎていたのを痛感した。剣や槍で武装した兵士、ロングソードやランスを持つ騎士、弓兵、魔法士。どうやら、奴さんは本気で潰しにかかってきたようだ。

「さて、お主ら。闘いに一番必要なものはなんだと思う？」

ターナルは、少しのんびりとした口調で言った。余裕が感じられる。戦闘には参加せずにいるからだ。

――こんなときに幼婆はなにを行っているんだ。絶賛戦闘中だぞ。レイヴンは、兵士群の間を縫い合わせ、殴る蹴るの暴行をはたらく。

「俺は、やはりパワーだ。圧倒的の、な。攻撃が通じなければ意味がない」

オールドは、『パルヴァライザー』の側面で、物量に頼る群れを一風ぎし、ターナルの問いに答える。武器がある分、レイヴンより楽をしているようだ。

「私は、スピードだな。鈍く遅い攻撃では、敵に容易くかわされる」
ガーベラは、『冬』の柄と手刀で、急所を高速に穿ち、確実に仕留める。

「私は、スタミナかしら。持続性がなければ、一気に畳み掛けられるわ」

リザは、重力魔法を、兵士群に引力を作り出す。リザの出せる最大限で、だ。とはいっても、気絶させるのが関の山だ。リザの数少ない、攻撃系統よりの補助魔法だ。

「レイヴン、お主は？」

「……俺は、テクニクだ。強くても、一本調子ではな」

とりあえず、制約だらけの闘いを終わらせるため、ターナルに視線で打開策の魔法の準備を急かし問いに答えた。喧嘩で鍛えた体術は、まだ未熟な面を覗かせ、度々危ない場面に直面していた。

極力、殺人を犯さない闘いをするレイヴン、オールド、ガーベラ。別にこれ以上人を殺したくない、といった今更な考えではない。ターナルが提案した秘策のためだ。

「なるほど、お主らの言うことは全て正しい。パワー、スピード、スタミナ、テクニク。どれ一つ欠けると駄目だ」

レイヴンの、マスターから任せられた依頼を完遂させるのは、予想より難しいことだった。カノープス王国の黒い裏の情報収集に、捕らえられたワレル族の救出。――そして、それを一般大衆に浸透させなければならぬ。いま現在、どれ一つも達成されてない。カノープスの裏の顔の決定的情報も、ワレル族の救出も、影響力もつジャーナリストのあてもない。

「――しかし、闘いにおいて一番必要なものは、それ以前の問題だ」

ターナルは、戦闘に参加せず準備していた魔法を行使。ターナルを中心に、薄い膜のようなもの形成される。徐々に、急激に広がる。

目下戦闘中の区域を覆い尽くすほどに拡大した。

「『クレイジーレイジー』」

ターナルがそう宣言した。いきなり偽名言ってどうしたんだ、とレイヴンたちは疑問に思った途端の出来事。混戦状態の戦域は、静かになる。バタバタ、と地面に張り付く兵士、騎士、弓兵、魔法士。いままでの闘いが嘘のようだ。なにが起きたか理解できないレイヴン。同じくオールド。ガーベラとリザはすぐに察し、畏怖に近い視線をターナルに向ける。

「闘いに必要なもの、それは気力だ。意思といってもいい」

「……いまのは、その意思を削ぐ」

「——いや、“消失”させる魔法だ」

そうだ、と頷く。

「……コイツはすげえな」

感心半分、呆れ半分の割合でレイヴンは、地に伏す兵士たちを見渡し呟く。兵士たちは、無気力な表情をしていた。口を半開き、間抜け面を晒す兵士たち。珍妙な光景に、レイヴンは、先の戦闘が虚像に思えた。それほどまでに、珍妙すぎる光景だった。

「すげえどころじゃねえぞ」

ガーベラとリザの会話から、ターナルの魔法を知ったオルドは、その非常識さに驚愕の声を上げた。

「なんでだ」

「お前知らんのか」

「……俺は、魔法使えんから、魔法に関することは疎いだ」

魔法は、魔力を“持たない”レイヴンには無意味。進んで学ぼうとはしなかった。

「そういうやそうだったな。——いいか、魔法ってのは事象に干渉する異能だ」

「魔力という生体エネルギーを対価として支払い、行使する」

オルドに続き、ガーベラが補足。

「引き出す、って言った方がいいかもね。例えば、火が在るという事象を引き出す、といった感じにね」

「だがな、意思に関連する事象を引き出すのは難しいことなんだ」

「一つ加えると、洗脳などは比較的に簡単な方だぞ。なぜなら、意思のベクトルの向きを変えるだけだからだ」

「——けど、意思を消失させることは不可能に近い——いえ、不可能といっても過言じゃないの」

「どんな魔法よりタチが悪い。なんたって、生きる意思をなくすんだからな」

非難めいた視線をターナルに浴びせる。これでは、遠回しな虐殺だ。意思がなくなれば、なにもなくなる。なにも、だ。人間の生理的欲求さえも億劫に感じる。どんなに腹が空いてもだ。面倒だ、と思い食事を摂ろうとしない。さすれば、餓死の運命だ。――いや、それよりも、野犬に喰われるが先か。まあ、この問題はどうでもいい。

「安心しろ、一時的なものだ。一生ではない。そんなことをしたら小生の指示が無駄になる。本末転倒なことではせんよ」

「ソイツはよかった」

「誰が好き好み、虐殺するか。まったく」

絶対的に不利な立場であるレイヴンたちが少しでも有利になるための秘策――というよりは小細工、それは相手を殺さないだった。殺しは、悪い印象を与えてしまう。第一印象が悪いと、やることなすこと全てが悪いように思えてしまう。だから、極力、人を殺さずに生かす。それで、多少は好印象を与えられるだろう。希望的観測にすぎんが。

「へえー。幼婆、存外に凄い奴だったんだな」

「存外に部分について、釈明があれば聞くが？」

声は平静そのものだが、ピキピキ、と青筋が立っていた。それに気にした風なく、レイヴンは言葉を続ける。

「伊達に歳喰ってねえんだな」　ロリータでも立派なレディと認識しているターナルに、年齢のことは禁句。静かに魔法多重展開。七つの属性魔法を顕現。火、氷、雷、風、地、光、闇。無駄に豪華な属性を、魔力で編まれた槍に付加、射出。

「落ち着け、フロイライン」

あくまで、平静に。しかし、表情は、悪どい笑顔。されど、ターナルの攻撃は全力で回避。一撃が必殺なためにだ。仲間に、抵抗なく必殺を放つターナルもターナルだが、それを面白がって遊ぶレイヴンも、またレイヴンだ。

「敵増援、五人。内、異常魔力反応を探知。容量95万オーバー」

ウィンドの、いま唯一使える魔力探知レーダーが反応を示す。

「……お客さんだぜ、テメェら。予想外のな」

と、真面目な口調に変える。ウィンドの言った容量とは、一度に魔力を貯め込められる量のことだ。一般人の平均は100から500。一般魔法士で1500程度。エリート魔法士で1000だ。どれだけ異常な数値かがわかるだろう。

異常魔力反応、レイヴンたちより200mほど先に停止。ソイツらが上空から飛行魔法を使い飛び降り現れた。人影は5。レイヴンは、ウィンドに命令。視力を強化、降り立った人影を視認する。

中央に鎧を着た男。その右横に支援タイプの高価な装備をした魔法士の女。その女の横に、弓矢と短剣を持つ遠距離タイプの背の小さい女。鎧を着た男の左横には、レイピアとシールドを持つカウンタータイプの騎士然した女。その横に双剣を持つ接近戦タイプの露出の高い服装で体を包んだ女。横一列に並ぶ新参者たち。月が雲に隠れ、更に暗黒世界となり、さすがに顔は判別できない。

黒いコートを身につけたレイヴンは、フードを深く被りなおし、臨戦用意。従うようにオルドたちも。

——なんだ？ 来ないのか。

地に降り立った新参者たちは、それからアクションを起こさない。ただ、地に伏す兵士たちに目を向けるだけだ。レイヴンは、見えないう視覚で、動向を探る。成果は、悔しそうにする雰囲気は感じ取れただけだ。数瞬経って、やっと動きをみせた。

「北で、誰かが嘆いた。『悪は、永久を生きる、と』」

滔々と語る女の声。200mも離れているはずだが、はっきりと聴こえる。叫んでいる様子はない。

——名乗り口上というやつか。なんと、まあ、面倒なことを。暇つぶし程度に聞か。

「南で、誰かが泣いた。『悪は、全てを蹂躪する、と』」

先の女とは別の女の声。声が響く。声音拡張魔法でも使ったか。

「東で、誰かが怯えた。『悪は、強大だ、と』」

幼げな女の声。

「西で、誰かが諦めた。『悪は、倒せない、と』」
凜とした女の声。

「だったら！」

吼える男の声。

「俺が、そんな奴らに希望を見せる！」

——誰かと思えば、お前か。

「俺が希望の炎を照らす！」

——いや、ここに来て当然か。

「カノープス王国、現勇者！」

新たに現れた5人組の中心に立つ、動きやすそうな、装甲の薄い鎧を着た男は、名乗り上げる。雲が月から離れ、か細い光に血濡られた大地を照らした。そして、レイヴンは、よく見知った顔を認識した。

「天波炎輝！」

——熱血野郎。

「ここに参上！」

——相変わらず熱血しているな。

「覚悟しろよ、悪党ども。貴様らの悪行も……ここまでだ！」

赤みを帯びた茶髪、女性が喜びそうな端整な顔立ち。アチラの世界と一緒にツルんでいた親友だった。レイヴンは、なんだか安心した、と思った。コチラの世界でも“ハーレム”作っていることに。アチラの世界でもハーレム作って女難の日々を送っていた炎輝、レイヴンはそれをところ構わず大爆笑していた。人の不幸は蜜の味、とはよく言ったものだ。フードの下で人の悪い笑みを形作る。

それに気づかない勇者、天波炎輝は、腰のロングソードを勢いよく引き抜き、走り出した。それに伴い、炎輝の仲間たちも駆ける。炎輝は、仲間たちの健闘を内心で祈る。地を蹴り炎輝が殺気を以て近づくのを気づいていないのか、微動だにせず佇む黒い影。炎輝の間合いに、“黒いコートを着て、フードを深く被り顔を隠した無手

の人影”が入った。

20話 血濡大地（後書き）

～言い訳～

1.. ネタは結構思い浮かんだが、それをどう統合するかを考えていた。

2.. なかなか文章がでてこない。

3.. デモンズソウルというゲームが忙しかった。

4.. リアルが忙しかった。

3、4は、完璧なまでの自己中心的言い訳ですね。

まあ、ご心配なさらず。デモンズソウルは昨日クリアしましたから、多少更新頻度は上がると思います。

～最後に～

こんなクソツタレな作者が書くクソツタレな小説を読んでくださる人に感謝。

21 勇者炎輝（前書き）

1ヶ月経つのは早いですね。

気がついたら、今日までかかりました。すみません。

あ、それと視点を勇者メインへ変更しています。

21 勇者炎輝

眼前の敵。地を蹴り飛ばし奴の元へ。

「斬り裂く！」

立ち尽くす黒い影。無手の悪党。カノープス王国、果ては全人類に仇なす重罪人と聞かされた。人を殺すことを快楽とする狂人。女子供も例外なく殺る、そんな奴だと聞かされた。カノープスの王直々に。

優然とした国王はやつれた顔をしていた。この外道に心を痛めていたのがありありとわかる。

民衆から心優しき王様と慕われているのを知っている。俺も慕っている。傲慢な王らしくない、カノープス王を。

赦せない。こういう奴は生きてはいけない。人に悲哀を背負わさせる奴は。そう激情をなんとか堪え思った。

振り放つ一閃。斜め下に裂く、鋭い剣先。加減なく際限なく、殺意を以て。

快楽殺人者は、虫酸が走る。俺の一番嫌いな人種だ、と勇者炎輝は怒る。

嘲笑い人を遊び壊す。そんな外道は、自分の中の正道を武器に立ち向かう。

フードを深く被り表情は見えない外道は、体を揺さぶりかわす。諦めることのない追撃の一閃。瞬きの軌跡。外れる剣先。逃れる外道野郎。僅かに見える口元に三日月な笑いを貼り付けている。コチラの必死を嘲笑しているようだ。というより、まさしくそうだ。

上に逸れた剣の勢いに逆行し、力任せに縦斬り。切っ先は地面を割るにとどまった。肩を竦める、外道黒影。様子でわかる。これで終わりか、と馬鹿にしているんだ。過熱する頭を冷やし、正常を保

つ。怒り狂えば、それこそ奴の思惑どおりだ。

感情を切り換える。大地に突き刺さってロングソードを引き抜き、見据える。黒影を。

怒りを晴らすようにして、地を蹴る。走るといふより、宙を滑る。剣と拳、苛烈な応酬。隙を突き合う、二人。どちらも致命傷になる傷は受けない。

停滞する闘いに焦りをおぼえ始める。炎輝が。

「這いよれ、炎蛇！」

勇者炎輝が魔法を行使。戦法を変える。

七つの細長い火炎。うねる蛇のような軌跡を描き、空中を舞う。黒い影に殺到。右から左から、上から下から。全方位、四面楚歌に飛来する。

「貴様に見きれるか！」

「……フムン、コイツは困ったな」

困った様子もなく余裕そうな、くぐもった声。フードなのにくぐもっている？——そうか認識妨害魔法を使っているのか。自分を特定されないように。なんのために？

コイツの事前情報を反芻。

闘いに喜びを見出す、性別年齢関係なく、生命を刈ることを生き甲斐とする快樂殺人者。

……そうか、自分を知られ、命を壊すのを邪魔されないように。支障をきたさないためか。

そうまでして禁忌を犯したいのか、コイツは！
一気に沸騰。抑えきれない感情の津波が炎輝を襲う。今度は抗わず受け入れる。

勇者、天波炎輝は正義感に溢れた近年稀にみる珍しい男だ。

炎輝自身の正道と価値観に基づき、物事をはかっている。天波

炎輝は、よく言えば正義感が強い青年、悪く言えば盲信者。それゆえ、外道な悪を見ると激情する。炎のように燃える激情。ひと度着火すれば、悪を排除するまで、鎮火しない。してやらない。

食らいつく赤き蛇たち。幾つもの灼熱の軌跡を宙に残し、迫る。

黒影は服を焦げさせながらもかわし続けていた。厭な三日月の嘲笑を貼りつけて。

「魔力解放。炎蛇・全焼！」

口調は激情、思考も過激に。

炎輝は次の一手。意図的に、込めた魔力を暴走させ爆発を引き起こす。堅実な闘いに強引さが加わった。

閃光と爆音と熱風。点から面への攻撃。威力は下がるが範囲は広い。

嗅覚機関が異臭を察知。ここ3ヶ月で嗅ぎ慣れた、肉が焼けた臭い。多少のダメージを与えたことに成功した。

爆煙が辺りを覆う。どこだ？ 仕留めきれていないのは明白。確実に息の根を止める。そうしないと気が済まない。快樂殺人者に情けなんかかけない。

ザッ、砂利を踏み締める音。――背後。そこか！

ロングソードが煙を斬り払う。だけに終わる。

ターゲットはいなかった。黒影は存在しない。

じゃあ、どこに？

視線を忙しく動かす。――視界の端にうつすら見えた影。奴か！

今度こそ仕留める！

決死の一撃。溢れんばかりの殺意を乗せて斬り払われた煙の先には、黒影はいた。

しかし。

「……実体がない？」

通り抜ける剣先。確かにそこにはいる。人を小馬鹿にした笑みの黒影が。

……立体映像？ そんなものはこの世界にはない、立体映像を発生させる機械もない。ならこれはいったい。

少しの疑問と思考。それは致命的な隙だった。

「腕部推進機関兼打撃兵装」
ボクサー

〈Standby〉

「起動」

〈Ready〉

「お星さまになってこい」

〈Go〉

斬り払った真逆の方向から動体。奴はいた。

さっきまでなかった鋼鉄の装甲を腕に纏わせ、お腕状の部品から赤黒い粒子が勢いよく放出される。横っ腹にタッチダウン。

赤黒い粒子は、体に流れる血のような色というより、流れ出て凝固した血液。不気味だな、場違いな考えが炎輝の頭をよぎった。

そんな思考も、横っ腹に流れる痛みで吹き飛ぶ。代わりに口から無意識の咆哮。戦域に響く。炎輝の仲間たちにも響く。

「炎輝様！？」

「勇者炎輝！」

「炎輝……！」

「炎輝！」

炎輝の耳に届く仲間たちの声。眼下に仲間たちの姿が見えた。黒影の攻撃で体ごと吹き飛んでいた。視線を上に向ければ満点の星空。ロマンチック。こんなときには見たくない光景だ。

「……う……だ……」

大丈夫だ、と言って安心させたかったが、声にならない。
脇腹の骨は肺を突き破り、呼吸困難に陥っていた。

「そら、お次は地面とお熱いハグだ」

満点の星空を背後に、黒影は漂う。握り拳を作って。

二撃目。凝固した血液色の粒子を推進剤として放出、炎輝の胸部付近を狙い穿つ。躊躇いなしだ。

上昇していた体は、黒影の攻撃と重力が合わさり、加速的に地を熱望する。地面との熱い抱擁は、炎輝を戦闘不能状態までのダメージを与えた。

骨は折れ、折れた骨が肉を裂き、裂けた肉から決壊した血液が流れる。

「フムン、終わりか」

黒影が降り立つ。静かに。

遠目から炎輝の状態を見やり、そう呟く。つまらなさ気に。

「……う……お……！」

黒影の呟くに意識を向けず、ダメージを無視し、関係ないとばかりに気合いで立ち上がろうとする、炎輝。体はボロボロの瀕死、されど心は死なず。目はギラギラに光り睨みを効かせていた。コイツを赦さない、どんなに打ちのめされようとも諦めない。そんな光に満ちていた。

力を振り絞り岩石に体を預け、眼光を光らせる。

「意外にがんばる。――まあ、ここまでだがな」

見下す笑みの黒影。自分の体は枷をつけられた囚人のごとく、ままならない。

黒影の腕より、粒子。確か、ボクサーと呼んでいた、攻撃手段。それでトドメを差そうとしている。

心臓の鼓動の音が弱まる肉体をどうにか動かそうと、ムチをいれてやる。

「……ぐ……っ……」

回避は諦める。まったくびくともしない。ピクリと指先が痙攣するだけの死に体。

ここで終わる。なにも残せず果たせず。そんなのは、いやだ！
抗う。最後まで。

動かない体と回転率を失う頭。

それがどうした、そんなのは些細のこと。内心で思う。悪あがきと笑われてようと、無意味と呆れたとしても、だ。

霞む視界に映るは、快樂殺人者の笑い。嘲笑い。

炎輝は魔法行使。炎蛇。

魔力調整がうまくいかず、三体のみ。

所詮は牽制。明後日の方向へ飛んでゆく。

せめて、奴は道連れに……

一矢報いる。ただでは死なん。炎輝は、最終報復手段を決意。

「腕部推進機関兼打撃兵装」
ボクサー

〈Re—filling〉

炎輝の仲間たちは救援に向かいたい欲望は現状に邪魔をされ、できない。焦りが苛立ちに、苛立ちが、攻撃行動をワンパターン化。それは隙を意味した。

着々と迫る、結末のとき。

粒子の供給安定。

さあ、夢終わるときだ。

「坊やよい子だ寝んねしな、ってな！」

解放。フルスロットル。加速。加速。加速。トップスピード。相対距離縮まる。

拳。振りかざす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7529s/>

複合生命体

2011年9月26日22時33分発行